

2016 年度

博士論文

17 世紀前半におけるモンゴル語檔案文書の言語学的研究

東北大学大学院 環境科学研究科博士後期課程

地域環境・社会システム学コース

B2GD1101

海蘭(かいらん)

## 目次

序論	1
1. 研究目的と意義	1
2. 先行研究	2
3. 問題の所在	3
4. 論文の構成	3
5. 研究方法	4
第1章 研究対象および関連文献資料に関する考察	11
1.1 「文書A」(『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書)について	11
1.1.1 『満文原檔』について	11
1.1.2 「文書A」(『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書)について	12
1.1.3 「文書A」と『満文老檔』について	13
1.2 『十七世紀蒙古文文書檔案(1600-1650)』について	18
1.2.1 「文書B」("manju mongγul-un qarilčayan-u teüken-dü qolbuγda=qu bičig debter"満洲-モンゴル交渉の歴史に関する文書・檔案)について	19
1.2.2 「文書C」("dayičing ulus-un γadaγadu mongγul-un törü-yi jasa=qu yabudal-un yamun-u temdegle=gsen debter"大清国の理藩院の記した檔案)について	25
1.3 まとめ	29
第2章 モンゴル語檔案文書の字形の特徴	30
2.1 問題の所在	30
2.2 モンゴル語檔案文書の字形	35
2.2.1 母音字の字形	35
(1)母音字<a>の字形	36
(2)母音字<e>の字形	38
(3)母音字<i>の字形	41
(4)母音字<o><u>の字形	42
(5)母音字<ö><ü>の字形	45
2.2.2 子音字の字形	48
(1)子音字<n>の字形	48
(2)子音字<b>の字形	52
(3)子音字<p>の字形	54

(4)子音字<q>の字形	55
(5)子音字<γ>の字形	56
(6)子音字<k>の字形	59
(7)子音字<g>の字形	60
(8)子音字<m>の字形	62
(9)子音字<l>の字形	63
(10)子音字<s>の字形	64
(11)子音字<ξ>の字形	65
(12)子音字<t>の字形	67
(13)子音字<d>の字形	69
(14)子音字<č>の字形	71
(15)子音字<j>の字形	73
(16)子音字<y>の字形	74
(17)子音字<r>の字形	76
(18)子音字<ng>の字形	76
(19)子音字<w>の字形	77
(20)子音字<ġ>の字形	79
(21)子音字<f>の字形	80
2.4 まとめ	80
第3章 モンゴル語檔案文書の文法的語尾の特徴	83
3.1 問題の所在	83
3.2 名詞の曲用語尾	83
3.2.1 格語尾	85
(1)属格語尾	85
(2)対格語尾	89
(3)与位格語尾	93
(4)造格語尾	97
(5)奪格語尾	97
(6)共同格語尾	99
3.2.2 所属語尾	101
(1)再帰所属語尾	101
(2)人称所属語尾	104
3.3 動詞の活用語尾	110
3.3.1 命令形語尾	111
(1)第1人称に呼応する命令形語尾	111

(2)第 3 人称に呼応する命令形語尾 .....	113
3.3.2 終止形語尾 .....	115
(1)現在未来語尾 .....	115
(2)過去語尾 .....	117
3.3.3 副動詞形語尾 .....	121
(1)条件副動詞語尾 .....	121
(2)譲歩副動詞語尾 .....	123
(3)並列副動詞語尾 .....	124
(4)目的副動詞語尾 .....	125
3.4 まとめ .....	126
結 論 .....	128

## 序 論

### 1. 研究目的と意義

20世紀後半から、中国の歴代王朝である後金国および清朝時代の檔案文書が、次々と公開されている。『舊満洲檔』(1969)は、時代的に一番古い檔案文書である。それは、2005年に台湾の國立故宮博物院より『満文原檔』という題名で再版されている。その中には、老満文と新満文で書かれた満文による檔案文書がある他、所々に中国語やモンゴル語の檔案文書が入っている。モンゴル語檔案文書は、計47件を数える。

『arban doluduyar jāyun-u emün\_e qayas-tu qolbuyda=qu mongγul üsüg-ün bičig debter 十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』(以下『十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』という)は、1997年に公開されたモンゴル語檔案文書である。そこには、111件のモンゴル語檔案文書が収録されている。

これらのモンゴル語檔案文書が公になったことから、モンゴル史の研究が、「清実録」など従来の清朝の支配者の意思で作られた歴史書ではなく、その元になった檔案文書を重要な参考資料として扱うことができるようになり、これらのモンゴル語檔案文書がどのように扱われていたかを検討することが可能となった。

清朝が成立した後、モンゴル語を重視し、規範に力を入れていたことは康熙年間から、「清文鑑」が公開されていたことからわかる。モンゴル語檔案文書に関しても清朝の成立以前に書かれた檔案文書と成立以降の檔案文書を区別して視野に入れるべきである。

本研究は『満文原檔』(2005)と『十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』におけるモンゴル語檔案文書を研究対象として、17世紀前半におけるモンゴル語檔案文書の言語学的特徴を検討することを研究目的としている。

16世紀後半以降、チベット大蔵経カンジュール(kanjur)、タンジュール(tanjur)をはじめ、大量の仏典がモンゴル語に翻訳された。その際、モンゴル文語の字形や綴りが統一され、文章語として規範化が進められた。この時代以降の仏典に用いられる規範化された言語を「古典式モンゴル文語」と呼んでいる。モンゴル文語で、チベット語やサンスクリット語の音を写すために、アヨシ・グーシによって、モンゴル文字を変形した「アリガリ(aligali)」と呼ばれる文字が作製されたのもこの時期(1587年)である。また、仏典以外にも、『黄金史(アルタン・トブチ)』、『蒙古源流(エルデニン・トブチ)』、『黄史(シラ・トージ)』などの多くの年代記や史書が編纂された。従来の研究では、この時代は、モンゴル言語の歴史において「近代モンゴル語」と呼ばれ、この時代のモンゴル語は「古典式モンゴル文語」によって書かれたといわれている。

モンゴル語檔案文書は、満洲側とモンゴル側の政治的やりとりの中で作られた檔案文書

であり、すべて手書きの原文、或いは写しであり、書写には最も規範が求められたと考えられる。ここに用いられたモンゴル言語は、木版仏典とモンゴル年代記や史書と違って、当時の生々しいやるとりを反映している。それらは当時の言語の特徴を知る上では貴重な資料であり、言語学的特徴を検討することによって、モンゴル語の歴史をさらに明らかにすることができる。

## 2. 先行研究

『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書に関しては、中国第一歴史檔案館の李保文氏により、次のような紹介と研究、翻訳がおこなわれている。

- (1) 李保文・南快「17\_du<sub>1</sub>yar jāy<sub>1</sub>un-u ekin-dü qolbu<sub>1</sub>yda=qu 43 qubi mong<sub>1</sub>yul bičig(17世紀初頭の43件のモンゴル語文書)」『内蒙古社会科学(蒙文版)』1996年第一期 86～118頁、第二期 93～122頁。
- (2) 李保文「愛新国天命天聰兩朝蒙古文書檔案簡介(愛新国天命天聰兩朝蒙古文書檔案紹介)」『明清檔案与蒙古史研究』内蒙古人民出版社、2000年、217—276頁。
- (3) 李保文「天命天聰年間蒙古文書檔案譯稿(上)」《歴史檔案》2001: 3、3—8頁  
李保文「天命天聰年間蒙古文書檔案譯稿(中)」《歴史檔案》2001: 4、3—9頁  
李保文「天命天聰年間蒙古文書檔案譯稿(下)」《歴史檔案》2002: 1、3—4頁

『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書の言語学的研究に関しては、栗林均・海蘭(2015)がある。栗林均・海蘭(2015)では、『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書とその字形を考察し、表記のゆれを検討している。また、全47件の檔案文書をローマ字転写し、日本語訳を付け、付録として全単語索引と名詞の曲用語尾の索引、動詞の活用語尾の索引を付している。本論文のローマ字転写方式、第1章の「1.1 「文書A」(『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書)について」、第2章の字形の特徴では引用及び参考にしている。

『十七世紀蒙古文書檔案(1600—1650)』におけるモンゴル語檔案文書の研究に関しては、井上治、永井匠、柳澤明(1999)及び乌云比力格(1999)による二つの書評と斯琴高娃(Sečengow\_a・スチンゴワー)の2007年に内蒙古大学に提出した博士論文がある。

井上治、永井匠、柳澤明(1999)では李保文の『十七世紀蒙古文書檔案(1600—1650)』の中で付けたモンゴル語の表題に日本語の訳を付けた。また、そのなかのいくつかの檔案文書の内容の紹介をしている。

乌云比力格(1999)では、17世紀前半におけるモンゴル歴史、言語の一級資料の価値のある資料であることを述べた。

斯琴高娃(Sečengow\_a・スチンゴワー)の博士学位論文では本文献における111件のモンゴル語文書をすべて取上げ、表記、文法、語彙の特徴を検討している。

『十七世紀蒙古文書檔案(1600—1650)』の第1部は大清国が成立以前の主に満洲側と

モンゴル側の交渉に関わる文書である。この中には、満洲側がモンゴル側に送った文書は草稿のまま或いは写された物である可能性があり、モンゴル側から満洲側に送った文書は原本が含まれている可能性がある檔案文書である。第 2 部は大清国が成立後の理藩院の記録したもので、モンゴル各部からの貢品、或いは清朝からモンゴル各部の下贈品を列記した記録である。『十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』の第 1 部と第 2 部の字形、文法、語彙の面では大きな違いがある。斯琴高娃(2007)は、書かれた時間の前後によって生じた相違点と捉えているが、清朝の支配者との関わりがあると考えられる。そのため、二つに分けて分析する必要があると考えられる。また、ローマ字転写には、文字情報、文法的語尾の情報などが反映できるものが少ない弱点が見られる。

そのほかに、『十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』の希都日古(2006)による中国語訳と宝音徳力根等(2000)による満洲語と中国語の訳がある。

### 3. 問題の所在

本研究が明らかにしようとする課題は、次の三点に集約される。

- (1) モンゴル語檔案文書は、清朝の支配者が檔案を重鈔する際に、また歴史書を書く際に、参考にしてきた資料である。そのため、モンゴル語檔案文書は、後にでた檔案や歴史書でどのように扱われていたか。
- (2) 「古典式モンゴル文語」と違って、政治的やり取りの中で作成されたモンゴル語檔案文書の字形と文法は、どのような特徴を持つのか。
- (3) 清朝が成立以前に作成されたモンゴル語檔案文書と成立以降に作成されたモンゴル語檔案文書には言語的にどのような違いがあるのか。

本研究では、『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書を「文書 A」、『十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』の第 1 部におけるモンゴル語檔案文書を「文書 B」、『十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』の第 2 部におけるモンゴル語檔案文書を「文書 C」と呼ぶ。

### 4. 論文の構成

本論文は、序論、第 1 章：研究対象および関連文献資料に関する考察、第 2 章：モンゴル語檔案文書の字形の特徴、第 3 章：モンゴル語檔案文書の文法的語尾の特徴、結論から構成する。

第 1 章では、研究対象である『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書と『十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』の第 1 部と第 2 部におけるモンゴル語檔案文書の関連文献の考察をした。『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書の考察は、栗林均・海蘭(2015)で検討した部分である<sup>1</sup>。

第 2 章では、古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書のモンゴル文字の字形を比較し

---

<sup>1</sup> 栗林均・海蘭(2015) : 1-8 頁。

て、モンゴル語檔案文書の字形の特徴を検討した。栗林均・海蘭(2015)では字形に関連する若干の用語の説明と『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書の字形の紹介をしている<sup>2</sup>。本論文では、引用及び参考にした。

第3章では、古典式モンゴル文語の文法的語尾とモンゴル語檔案文書に現れる文法的語尾を比較し、モンゴル語檔案文書の文法的語尾の特徴を検討する。『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書の文法的語尾の特徴は、投稿論文である「『満文原檔』所収モンゴル語文書の文法的語尾の特徴について」<sup>3</sup>にて、検討している。ここでは、それに、『十七世紀蒙古文文書檔案(1600-1650)』の第1部と第2部に現れる文法的語尾を付け加えて、モンゴル語檔案文書の文法的特徴を明らかにした。

結論では、本研究の研究結果をまとめた。

## 5. 研究方法

本研究では、比較方法とローマ字転写方法を用いた。

### (1) 比較方法

本研究で用いた比較方法は、1)モンゴル語檔案文書(「文書A」、「文書B」、「文書C」のすべてを指す)と「古典式モンゴル文語」を比較する方法と2)「文書A」、「文書B」、「文書C」の三つの檔案文書を比較する方法である。

1)モンゴル語檔案文書と「古典式モンゴル文語」を比較する方法は、モンゴル語檔案文書に現れる字形と文法的語尾を N.Poppe の *Grammar of Written Mongolian*(Wiesbaden, 1954)の字形および文法的語尾と比較することである。

「古典式モンゴル文語」の文字と文法を当時の文字と文法の規範であると見なし、それと異なるものは規範からはずれたものと見なす。その規範からはずれたものは何か、なぜ生じたのかを検討する。

2)「文書A」、「文書B」、「文書C」を比較する方法は、「文書A」、「文書B」、「文書C」の三つの檔案文書に現れる字形と文法的語尾を比較することである。この三つの檔案文書を比較することによって、清朝の成立前と成立後のモンゴル文語の変化を検討する。「文書A」には計47件の檔案文書があり、これらを【1】～【47】とした。その中で、文書【1】から文書【42】までは清朝成立以前、つまり、1635年までの檔案文書であり、文書【43】から文書【47】までは清朝成立年、つまり、1636年以降の檔案文書である。本研究では、便宜のため「文書A」を清朝の成立前の檔案文書としている。

### (2) ローマ字転写方法

ローマ字転写をする方法でデータベースを作り、それを分類や分析して研究を行った。

---

<sup>2</sup> 栗林均・海蘭(2015) : 9頁-34頁

<sup>3</sup> 「『満文原檔』所収モンゴル語文書の文法的特徴について」 東北大学東北アジア研究センター 『東北アジア研究』第21号 2017年3月(査読を経て掲載決定済み)



モンゴル文語のローマ字転写方式は、栗林均・海蘭(2015)によるものであり、次にあげた方式である。

#### モンゴル語檔案文書のローマ字転写方式：

モンゴル文字は、複数の文字が同じ字形を取る多音字(polyphone)が少ない。たとえば、<o>と<u>、<ö>と<ü>、<k>と<g>、<t>と<d>、そしてモンゴル語檔案文書の中では<q>と<γ>、<č>と<j>の中位形、<j>の頭位形と<y>。字形の上で区別されないものを別の文字とみなすのは、それらがモンゴル語の別の「音」を表しているという前提に立っている。それでは、その「音」とは、いつの時代のどの地域のモンゴル語なのか？

N.Poppe の *Grammar of Written Mongolian*(Wiesbaden, 1954)の転写方式は、モンゴル文語が成立した 13 世紀の口語の発音を推定してローマ字をあて、それを「古典式モンゴル文語」にも適用していると考えられる。本研究では、基本的に N.Poppe(1954)のローマ字転写方式を採用しているが、その際モンゴル文語を口語から独立した文字言語の体系とみなしている。つまり、17 世紀前半のモンゴル語の口語の音声を反映していることを前提とするものではなく、当時においても、モンゴル文語が口語と異なる独自の体系をもった文字言語であったとみなしている。

モンゴル文字とモンゴル文語は、13 世紀初にウイグル文字とその書記法に倣ってモンゴル語を表記することによって成立した。それから現代までの 800 年以上にわたる期間にモンゴル語の口語も文語も多様な変化をこうむって来たが、文語と口語の変化の範囲と程度は一樣ではなかった。文語は社会上層の一部が使う書き言葉として伝統的な書法や語法が継承されてきたのに対し、口語は音声、文法、語彙等すべての分野で著しい変化を経て多くの方言や独立の言語に分岐するに至った。現代では、どの口語方言の発音をとってみても、モンゴル文語の綴りはそれらと大きく隔たっている。

本研究のローマ字転写は、モンゴル文字の識別情報(文字の種類を区別する情報)だけでなく、文字の字形や表記に関する情報を含め、できるだけ元の表記が再現できるように配慮するとともに、モンゴル文語の解釈に資するために文法的情報を付加している（「ローマ字転写で用いる若干の記号等について」を参照されたい）。


同じ文字を別の文字として判断する基準として、本研究では次のような古典式モンゴル文語および現代モンゴル文語の規範を作業仮説として採用している：

- 1) 与位格語尾では、母音字および子音字<l><m><n><ng>で終わる語幹には、子音字<d>が始まる語尾(-dur/-dur, -du/-dü)が付く。他方、子音字<b><d><g><γ><r><s>で終わる語幹には、子音字<t>で始まる語尾(-tur/-tür, -tu/-tü)が付く。これは、位格語尾(-da/-de, -ta/-te)、およびその再帰所属語尾(-dayan/-degen, -tayan/-tegen)に関しても同様である。
- 2) 並列副動詞の語尾では、母音字および子音字<l><m><n><ng>で終わる語幹には、子音字<j>で始まる語尾(=ju/=jü, =ji)が付く。他方、子音字<b><d><g><γ><r><s>で終わる語幹には、子音字<č>で始まる語尾(=ču/=čü, =či)が付く。

## ローマ字転写で用いる若干の記号等について

- 1) 「=」(イコール)動詞の語幹と活用語尾の境界を示す。

例：

 ekile=n 「始めて」


語幹と活用語尾の間の接合母音がある場合は、接合母音の前と後に「=」を付す。

例：

 bol=u=γsan 「成った」       seyil=ü=gseñ 「彫った」

動詞の語幹と同形の命令形では、「ゼロ語尾」と考えて語幹形の後に「=」イコールだけを付す。

例：

 ab= 「取れ」



- 2) 「-」(ハイフン)は、名詞類の曲用語尾が語幹と分綴されている場合の境界、つまり「語幹末スペース」を示す。

例：

 Manju-yin 「満洲の(属格)」       bičig-i 「文書を(対格)」

- 3) 「+」(プラス)は、名詞類の曲用語尾が語幹と連続されている場合の境界を示す。

例：

 üile+ben 「(自分の)ことを(再帰所属・対格)」  
 sara+yin 「月の(属格)」

- 4) 「\_」(アンダースコア)は、一つの語が、曲用語尾以外で分綴されている場合の境界、つまり「語中スペース」を示す。その典型的な事例は、母音字<a>と<e>が語末に位置して、離して書かれる場合である。

例：

 aq\_a 「兄」       kür=tel\_e 「～まで」

形容詞形成語尾 *tu/tü* 「～を持つ」が語幹と分綴される場合はこれに相当するので *\_tu/\_tü* と転写する。

例：

 *yala\_tu* 「罪ある」       *sedkil\_tü* 「心を持つ」


曲用語尾の二重語尾が分綴されている場合にも使う。

例：

 *yala+i\_yi* 「罪を」       *yala+i\_gi* 「罪を」

そのほかに、曲用語尾の第3人称所属語尾 *ni* が分綴され、子音字<n>が語幹に連続され、母音字<i>が分綴される場合がある。この場合は *+n\_i* と転写する。

例：

 *ire=gc'i+n\_i* 「来る人は」

5) 「'」(アポストロフィ)のついた転写字 *b' n' γ' q' č' j' s' u' ö' ü' š'* は、「'」

を除いた文字<b> <n> <γ> <q> <č> <j> <s> <u> <ö> <ü> <š>の表記上の変種を表す。主に、現代モンゴル文語と異なる字形に「'」を付している。

現代モンゴル文語の与位格語尾では、母音字および子音字<l><m><n><ng>で終わる語幹には、子音字<d>で始まる語尾(-*dur/-dur, -du/-dü*)が付く。他方、子音字<b> <d> <g> <γ> <r> <s>で終わる語幹には、子音字<t>で始まる語尾(-*tur/-tür, -tu/-tü*)が付く。これと異なる子音字で始まる場合は、*d'*、*t'*と転写する。これは、位格語尾(-*da/-de, -ta/-te*)、およびその再帰所属語尾(-*dayan/-degen, -tayan/-tegen*)に関しても同様である。

例：


現代モンゴル文語の字形

それと異なる字形

*b*

*b'*

 *galab* 「劫」

 *galab'* 「劫」

*n*


*n'*


 *nige* 「一」

 *n'ige* 「一」

*γ*


*γ'*


 *dayaya\_a* 「二歳の馬」


 *budaya'\_a* 「食料」

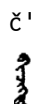
 jin'aysi 「こちらへ」

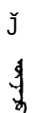
 inay'si 「こちらへ」

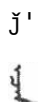
q  
 bay'aqan 「より多く」


q'  
 bayaq'an 「より多く」


č  
 bičigtü 「文字を持つ」

č'  
 bič'igtü 「ビチグト (人名)」


ǰ  
 üǰe=jü 「見て」


ǰ'  
 eǰ'en 「主」

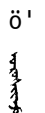
s  
 es\_e 「否定」

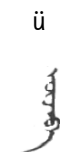
s'  
 es'\_e 「否定」


u  
 učir 「原因」

u'  
 u'čir 「原因」


ö  
 örüsüe=jü 「愛しんで」


ö'  
 ö'rüsüe=jü 「愛しんで」


ü  
 üǰe=be 「見た」


ü'  
 ü'ǰe=be 「見た」


š  
 š'asin 「宗教」


š'  
 šatu 「梯子」


d  
 qay'an-du 「ハーンに」

d'  
 qay'an-d'u 「皇帝に」

t  
 ulus'-tur 「人々に」


t'  
 ulus'-t'ur 「人々に」


そのほかに、子音字<d>が頭位形で  d で書かれ、人名に用いられる場合 D'で転写している。


D'  
 D'iwa 「ディワー」

- 6) 「"」(二重引用符の片方)の転写字は n"、ng"、j"等があり、単語の中における位置などによる、古典式モンゴル文語および現代モンゴル文語と異なる特殊な字形を表わす。

例：


 en"de 「ここ」

 Geng"gei 「ゲング (人名)」

 j"es' 「銅」


- 7) 「^」(キャレット) は、人名、地名、固有名詞などが分かれて書かれている場合、間に用いる。


例：

 Uba^qung^taiyi 「オーバ・ホン・タイジ (人名)」

- 8) 「[!](感嘆符)は、子音字 <γ>は現代モンゴル文語では、男性語に書かれるが、女性語に書かれている場合、転写の後ろに[!]の記号を付す。子音字<g>がモンゴル文語では、女性語に書かれるが、男性語に書かれている場合、転写の後ろに[!]の記号を付す。


例：


 degeγsi [!](16:5) 「上へ」

 jarlig [!]

- 8) 人名、地名等の固有名詞の語頭を大文字にしている。

例：

 Qalq\_a 「ハルハ (地名)」

 Sečen^qay'an 「セチェン・ハーン (人名)」

- 9) モンゴル語の例のあとにカッコに入れた数字は出現位置(文書番号と行番号)を示す。  
例：(4:6)は、文書【4】の「6行目」を表す。

## 第1章 研究対象および関連文献資料に関する考察

### 1.1 「文書A」（『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書）について

これは、『「満文原檔」所収モンゴル語文書の研究』（栗林・海蘭 2015）で検討した部分である<sup>4</sup>。

#### 1.1.1 『満文原檔』について

『満文原檔』は、台湾の國立故宮博物院より 2005 年に出版された清太祖、太宗時代の檔案（政府公文書）の写真版による複写資料集である：

馮明珠主編『満文原檔』全 10 冊、國立故宮博物院、2005.

そこに収録されている檔案は、1607（天命前 9）年から 1636（崇徳元）年に至る約 30 年間にわたるものであるが、それらは清代乾隆年間に整理・表装された 37 冊と、1935（民国 24）年に内閣大庫から発見された 3 冊を合わせた 40 冊から成っている。

『満文原檔』に収録されている檔案は、主に満洲語で記されているが、モンゴル語、漢語の文書も散見される。満洲語は、老満文と呼ばれる無圈点満洲文字のものが多く、有圈点満洲文字（新満文）の文書もみられる。

『満文原檔』（2005）の出版に先立つ 36 年前に、同じ資料が別の書名で出版されている：

『舊満洲檔』全 10 冊、國立故宮博物院、1969.

写真は縮小版であるが内容は同じものである。『満文原檔』（2005）が出版されるまでは、これらの檔案資料は旧版の書名にならって「舊満洲檔」と呼ばれてきた。また無圈点満洲文字（老満文）の檔案は「老満文原檔」、「無圈点老檔」などと呼ばれることもある。これらはすべて同じものを指しているが、『満文原檔』（2005）の出版後はこの書名で呼ばれることが多い。

『舊満洲檔』の第一冊に収録されている荒字檔と昷字檔の満洲語檔案に関しては、次のローマ字転写と漢語訳、注釈が公刊されている：

廣祿・李學智『清太祖朝老満文原檔（第一冊荒字老満文檔冊）』（中央研究院歴史語言研究所、1970（民国 59）年）。

廣祿・李學智『清太祖朝老満文原檔（第二冊昷字老満文檔冊）』（中央研究院歴史語言研究所、1971（民国 60）年）。

同様に、『舊満洲檔』の第六冊～第八冊に収録されている清太宗朝の天聰元年から天聰 5 年までの檔案に関しては、次のローマ字転写と漢語訳、注釈が公刊されている：

『舊満洲檔譯註 清太宗朝（一）』國立故宮博物院、1977（民国 69）年。

『舊満洲檔譯註 清太宗朝（二）』國立故宮博物院、1977（民国 69）年。

<sup>4</sup> 『「満文原檔」所収モンゴル語文書の研究』（栗林・海蘭 2015）の 1-8 頁。

また、日本では、天聰 9 (1635) 年の檔案について、満洲語のローマ字転写と、日本語の逐語訳と文意識、および注、人名・地名索引、漢滿対照表を合付して、次の 2 冊が公刊されている：

神田信夫・松村潤・岡田英弘譯註『舊満洲檔 天聰九年 1』東洋文庫、1972.

神田信夫・松村潤・岡田英弘譯註『舊満洲檔 天聰九年 2』東洋文庫、1975.

これらは『舊満洲檔』の第九冊にあたるが、それ以外の冊の檔案については、乾隆時代に有圈点満洲文字で重鈔された檔案資料（いわゆる「満文老檔」）によって同様の譯註本が公刊されている（これについては「1.1.3 モンゴル語檔案文書と『満文老檔』について」を参照。）

### 1.1.2 「文書 A」（『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書）について

『満文原檔』は、表題が示すように、ほとんどが満文（満洲語）による檔案であるが、一部にモンゴル語および漢語で書かれた檔案が含まれている。そのうち、モンゴル語の文書は、『満文原檔』全 10 冊のうち、第三、四、五、六、七、八、九、十冊の各所に分散しており、合計 47 件を数える。それぞれの文書の長さは数行から数十行にわたり様々であり、それらの内容は 1621（天命 6）年から 1636（天聰 10）年の間に満洲側とモンゴル側で交わされた交渉に関するものがほとんどである。

モンゴル語檔案文書を『満文原檔』（2005）に収録されている順を、一部年代順に並べ替えて、1 から 47 までの番号を付した。

「文書 A」に関しては、中国第一歴史檔案館の李保文氏により、次のような紹介と研究、翻訳がおこなわれている：

(1) 李保文・南快「17\_duγar jāγun-u ekin-dü qolbuyda=qu 43 qubi mongγul bičig(17世紀初頭の 43 件のモンゴル語檔案文書)」『内蒙古社会科学(蒙文版)』1996 年第一期 86～118 頁、第二期 93～122 頁。

(2) 李保文「愛新国天命天聰兩朝蒙古文書檔案簡介(愛新国天命天聰兩朝蒙古文書檔案紹介)」『明清檔案與蒙古史研究』内蒙古人民出版社、2000 年、217—276 頁。

(3) 李保文「天命天聰年間蒙古文檔案译稿（上）」《歴史檔案》2001：3、3—8 頁

李保文「天命天聰年間蒙古文檔案译稿（中）」《歴史檔案》2001：4、3—9 頁

李保文「天命天聰年間蒙古文檔案译稿（下）」《歴史檔案》2002：1、3—4 頁

これらのうち、(1)は、「満文原檔」に収録されているモンゴル語檔案の紹介、モンゴル語活字によるテキストの翻刻、ローマ字転写、注、『舊満洲檔』所収の該当する檔案のコピーである。47 件ののうち、【1】、【7】、【8】が欠けているのは、見落としたものと考えられる。また【19】と【20】は、一つの文書として扱われている。

(2)は、「満文原檔」に含まれるモンゴル語檔案 47 件のうち、【1】を除く 46 件に漢語の



標題をつけて内容を紹介したものである。(1)で見落とした【7】と【8】を加え、【19】と【20】は別の文書として扱われている。これらに加えて、中国第一歴史檔案館に所蔵されている3件のモンゴル語檔案があることが紹介されているが、それらは、未公刊の資料である。

(3)は(2)と同じく『舊滿洲檔』所収の46件、および中国第一歴史檔案館所蔵の3件の都合49件のモンゴル語檔案文書の漢語訳に注を付したものである。

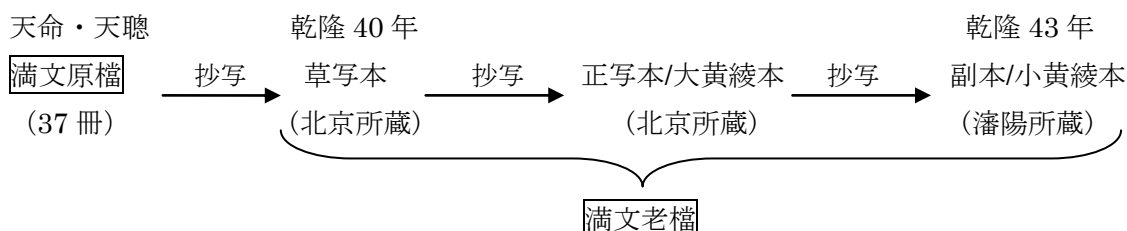
また「滿文原檔」のうち、天聰9(1635)年の分に関しては、滿洲語のローマ字転写に加えて、日本語の逐語訳と文意識、および注を合わせて、『舊滿洲檔 天聰九年 1』(1972)と『舊滿洲檔 天聰九年 2』(1975)として公刊されていることはすでに述べた。これらにはモンゴル語の檔案も含まれており、【39】【40】【41】【42】の4件がそれにあたる(該当する巻や頁については後述)。

### 1.1.3 「文書A」と『滿文老檔』について

「滿文老檔」は、「滿文原檔」が乾隆時代に重鈔されたものを指す<sup>5</sup>。有圈点滿洲文字によるものと無圈点滿洲文字によるものの2種類がある。

中国第一歴史檔案館・中国社会科学院歴史研究所訳注『滿文老檔』(中華書局出版、1990)の「前言」(2-3頁)によれば、「滿文原檔」のうち37冊が数回の抄写を経て、六つの写本が作られた。まず乾隆40(1775)年に有圈点滿文と無圈点滿文で各一部が写された。この2部は無格宣紙、書法が粗略なので「草写本」と呼ばれている。その後、「草写本」を底本にして、有圈点滿文と無圈点滿文で各一部が書き写された。それは「正写本」或いは「大黃綾本」と呼ばれている。乾隆43(1778)年に「正写本」(「大黃綾本」)はさらに有圈点滿文と無圈点滿文で各一部書き写された。それは、「副本」或いは「小黃綾本」と呼ばれている。「草写本」と「正写本」(「大黃綾本」)は北京の第一歴史檔案館に保存されており、「副本」(「小黃綾本」)は瀋陽の遼寧省檔案館に保存されている。これを図で示せば次のようになる:

#### 図「滿文老檔」の抄写過程



「滿文原檔」に収録されているモンゴル語檔案の研究にとって、「滿文老檔」が重要な意味を持つのは、そこにモンゴル語檔案の滿洲語訳が含まれていることによる。「滿文原檔」

<sup>5</sup> 天命、天聰時代の「滿文原檔」も合わせて「滿文老檔」と呼ぶこともあるが、ここでは天命・天聰年間の檔案を「滿文原檔」、乾隆重鈔本を「滿文老檔」として区別する。

のモンゴル語檔案は乾隆期に重鈔される際に、満洲語に翻訳されて収録されたのである。

乾隆重鈔「満文老檔」に関しては、次のような研究が公刊されている：

- (1) 藤岡勝二『満文老檔』昭和 14 (1939) 年。
- (2) 満文老檔研究会訳注『満文老檔』昭和 30-38 (1955-1963) 年。全 7 冊。  
I 太祖 1、II 太祖 2、III 太祖 3、IV 太宗 1、V 太宗 2、VI 太宗 3、VII 太宗 4
- (3) 中国第一歴史檔案館・中国社会科学院歴史研究所訳注『満文老檔』(中華書局、1990)
- (4) 中国第一历史档案馆整理编译『内閣藏本満文老檔』(辽宁民族出版社、2009) 全 20 冊。

上記のうち(1)と(2)は、瀋陽(奉天)の遼寧省檔案館所蔵の副本(小黃綾本)の写真版にもとづいたローマ字転写と日本語訳(逐語訳と文意識)。(3)は、漢語訳で、北京の第一歴史檔案館所蔵の草写本、正写本(大黃綾本)にもとづきつつ、他の檔案および文献を参照したという。(4)は正写本(大黃綾本)の原本影印(1-16 冊)、ローマ字転写(17-18 冊)、漢語訳(19-20 冊)を含む。

「満文原檔」に収録されているモンゴル語檔案全 47 件のうち、乾隆重鈔の「満文老檔」に満洲語の訳文が収録されているものは、【2】、【3】、【4】、【7】、【8】、【9】、【10】、【13】、【14】、【15】、【16】、【17】、【18】、【19】、【20】、【21】、【22】、【23】、【24】、【25】、【26】、【27】、【28】、【29】、【30】、【43】、【44】、【45】、【46】、【47】の 30 件である。

「文書 A」の若干のモンゴル語檔案文書を「満文老檔」における満洲語訳と対照すると翻訳過程で生じた過ちなどが見られる。例えば、文書【15】では、mori ton'uy「馬や道具」を満洲語で morin i ton「馬の数」と翻訳している。それは、次の文に現れる。「モンゴル語」は、文書【15】に現れる文であり、「満洲語」は「満文老檔」におけるモンゴル語に対応する満洲語訳である。

モンゴル語 : n'oyad ala=ba ge=jü mön qosiy'un-I kümün mori ton'uy-ača ab=ču gerečile=jü ire=küle「ノヤン達が殺したと言って、その旗の者が馬や道具を持って訴えて来るならば」

満洲語 : taiji waha bime kemuni gūsai niyalma morin i ton ci gaifi gercileme jici  
「taiji が殺したと言って、その旗の者が馬の数から取上げて訴えて来るならば」

次頁に掲げた表 1 は、『満文原檔』(2005) で収録されているモンゴル語檔案文書、全 47 件を一覧にしたものである。文書を年代順に並べ、文書名を付し、『満文原檔』(2005) における収録箇所を冊数と頁数で示し、文書の日付と、『舊満洲檔 天聰九年』(1972-1975) と『満文老檔』(1955-1963) におけるローマ字転写・日本語訳の所在を示している。

「番号」は、文書の年代順に寄ったもので、『満文原檔』(2005) の収録順とは一部前後するところがある。

「文書名」は、『満文原檔』(2005) でそれぞれのモンゴル語檔案文書の先頭に置かれて

いる満洲語の文章と李保文 [1996] [2000] の表題を参考にして付けたものである。

「冊」は、それぞれのモンゴル語檔案文書が『満文原檔』(2005) の第何冊に収録されているか、

「頁」はモンゴル語檔案文書の収録されているページである。

「日付」は、『満文原檔』(2005) でそれぞれのモンゴル語檔案文書の先頭に置かれている満洲語で記されているもの。文書 1 の日付は不明であるが、天命 6 年 7 月の檔案の中に収録されている。

「ローマ字転写・日本語訳」は、【39】、【40】、【41】、【42】の 4 件に関しては、神田信夫・松村潤・岡田英弘譯註による『舊満洲檔 天聰九年 1』(1972) と『舊満洲檔 天聰九年 2』(1975) に収録されているモンゴル語のローマ字転写と日本語訳の所在を示し(これらを「旧」とした)、それ以外は、満文老檔研究会訳注『満文老檔』全 7 冊(1955-1963) に収録されている満洲語のローマ字転写と日本語訳の所在を示している(「I」～「VI」は『満文老檔』の冊数を示す)。斜線は、モンゴル語檔案文書に対応するローマ字転写と日本語訳が存在しないことを示す。

表 1. 『満文原檔』における「モンゴル語檔案文書」一覧

番号	文書名(内容)	冊	頁	日付/ローマ字転写・日本語訳
1		三	2	天命 6 (1621) 年 7 月 /
2	エンゲドル(Engeder)の誓い	四	68	天命 8 (1623) 年 7 月 3 日 II・太祖 2・835 頁
3	ウルド(Ürüd)の誓い	四	69	天命 8 (1623) 年 7 月 4 日 II・太祖 2・835 頁
4	オーバ・ホンタイジ (Uuba <sup>^</sup> qung <sup>^</sup> taiyi) の誓い	五	45-46	天命 11 (1626) 年 6 月 6 日 III・太祖 3・1075 頁
5	トシェート額駙(Tüsiyetü <sup>^</sup> efü)が満洲のハーンに送った文書	五	117	天命 11 (1626) 年 7 月 6 日 /
6	トシェート額駙(Tüsiyetü <sup>^</sup> efü)がジャキチャン・ブク(Jakičan <sup>^</sup> büke)に送った文書	五	124-125	天命 11 (1626) 年 8 月 17 日 /
7	天聰ハーンがハラチン(Qaračin)とトゥメド(Tümed)に送った文書	六	327-328	天聰 3 (1629) 年 10 月 29 日 IV・太宗 1・241 頁
8	天聰ハーンがモンゴルに送った文書	六	342-343	天聰 3 (1629) 年 11 月 7 日 IV・太宗 1・249 頁
9	ジルガラン(Jiryalang)、サハリヤン	七	15	天聰 4 (1630) 年正月 9 日

	(Saqaliyan) がスブディ (Sübüdi) に送った文書			IV・太宗 1・284-285 頁
10	ジルガラン (Jirγalang)、サハリヤン (Saqaliyan) がハラチン (Qaračin) に送った文書	七	39-40	天聰 4 (1630) 年 2 月 1 日 IV・太宗 1・300 頁
11	天聰ハーンがナイマン (Naiman) のホン・バートル (Qung^bayatur) に送った文書	七	156	天聰 4 (1630) 年 4 月 2 日
12	天聰ハーンがダルハン・バートル (Darqan^bayatur) に送った文書	七	157-158	天聰 4 (1630) 年 4 月 4 日
13	天聰ハーンが四子 (Dörben^keüked) に送った文書	七	313	天聰 5 (1631) 年正月 13 日 V・太宗 2・464-465 頁
14	辛未年の法典 1	七	351	天聰 5 (1631) 年 4 月 7 日 V・太宗 2・500-501 頁
15	辛未年の法典 2	七	354-357	天聰 5 (1631) 年 4 月 12 日 V・太宗 2・504-508 頁
16	辛未年の法典 3	七	358-359	天聰 5 (1631) 年 4 月 11 日 V・太宗 2・508-509 頁
17	辛未年の法典 4	七	359-360	天聰 5 (1631) 年 4 月 11 日 V・太宗 2・509 頁
18	天聰ハーンがスブディ・ドーレン (Sübüdi^dügüreng) に送った文書	七	360	天聰 5 (1631) 年 4 月 20 日 V・太宗 2・511 頁
19	天聰ハーンがトシェート・ハーン (Tüsiyetü^qayan) に送った文書	七	370	天聰 5 (1631) 年 7 月 5 日 V・太宗 2・518-519 頁
20	天聰ハーンがトシェート・ハーン (Tüsiyetü^qayan) に送った文書	七	370-371	天聰 5 (1631) 年 7 月 5 日 V・太宗 2・519 頁
21	天聰ハーンがソン・ドーレン (Sübüdi^dügüreng) に送った文書	七	371-372	天聰 5 (1631) 年 7 月 5 日 V・太宗 2・519 頁
22	天聰ハーンがダライ・チュケグル (Dalai^čükegür)、四子 (Dörben^keüked) に送った文書	七	372	天聰 5 (1631) 年 7 月 5 日 V・太宗 2・520 頁
23	天聰ハーンがアオハン (Auqan)、ナイマン (Naiman)、バーリン (Bayarin)、ジャルド (Jarayud) に送った文書	七	373	天聰 5 (1631) 年 7 月 9 日 V・太宗 2・520 頁
24	天聰ハーンがオモブ・チュケクル	七	373-374	天聰 5 (1631) 年 7 月 9 日

	(Ombu <sup>^</sup> čükegür)に送った文書			V・太宗2・520 - 521 頁
25	天聰ハーンがチョクト(Čoytu)太后に送った文書	七	374-375	天聰5(1631)年7月9日 V・太宗2・521 頁
26	天聰ハーンがトシェート額駙(Tüsiyetü <sup>^</sup> efü)に送った文書	七	375-376	天聰5(1631)年7月19日 V・太宗2・522 頁
27	天聰ハーンがトシェート・ハーン(Tüsiyetü <sup>^</sup> qayan)に送った文書	七	379-380	天聰5(1631)年11月19日 V・太宗2・596 - 597 頁
28	天聰ハーンがトシェート・ハーン(Tüsiyetü <sup>^</sup> qayan)に送った文書	七	386	天聰5(1631)年11月28日 V・太宗2・604 頁
29	天聰ハーンがタンシャイ(Tangšai)に称号を与えた文書	七	390-391	天聰5(1631)年12月11日 V・太宗2・609 頁
30	天聰ハーンがソン・ドーレン(Sün <sup>^</sup> dügüreng)等に送った文書	七	399-400	天聰5(1631)年12月21日 V・太宗2・615 頁
31	天聰ハーンがジャライト(Jalayitu)部などに送った文書	八	297-298	天聰6(1632)年正月3日
32	天聰ハーンがガルジョー・セデル(Ĝarju <sup>^</sup> seder)に送った文書	八	301-302	天聰6(1632)年正月24日
33	申年の法度	八	302-304	天聰6(1632)年正月18日
34	天聰ハーンがナイマン(Naiman)のダルハン・バートル(Darqan <sup>^</sup> bayatur)に送った文書	八	305-306	天聰6(1632)年2月2日
35	天聰ハーンがハラチン(Qaračın)のトゥメド・オモブ・チュケグル(Tümed <sup>^</sup> ombu <sup>^</sup> čükegür)に送った文書	八	313-314	天聰6(1632)年3月27日
36	天聰ハーンがハラチン(Qaračın)のチョスキ(Čoski)に送った文書	八	315	天聰6(1632)年3月29日
37	天聰ハーンがハラチン(Qaračın)に送った文書	八	139-140	天聰6(1632)年4月6日
38	申年の法度	八	322-325	天聰6(1632)年10月5日
39	マカ・サマディ・セチェン・ハーン(Maq_a <sup>^</sup> samadi <sup>^</sup> sečen <sup>^</sup> qayan)等が天聰ハーンに送った文書	九	211-212	天聰9(1635)年5月27日 旧・1・159 - 160 頁
40	ハルハ(Qarq_a)のマカ・サマディ・	九	212-213	天聰9(1635)年5月27日

	セチェン・ハーン (Maq_a^samadi^sečen^qayan) が太后 に送った文書			旧・1・160 頁
41	天聰ハーンがゴルト・セチェン (Goltu^sečen) に号を与えた文書	九	285	天聰 9 (1635) 年 7 月 24 日 旧・2・214 頁
42	ハルハ(Qarq_a) のマカ・サマディ・ セチェン・ハーン (Maq_a^samadi^sečen^qayan) が天聰 ハーンに送った文書	九	445	天聰 9 (1635) 年 12 月 7 日 旧・2・345 - 346 頁
43	天聰ハーンがマカ・サマディ・セチ ェン・ハーン (Maq_a^samadi^sečen^qayan) に送っ た文書	十	30-31	天聰 10 (1636) 年 2 月 2 日 VI・太宗 3・912 頁
44	天聰ハーンがセチェン・ジノン (Sečen^jinüng) 送った文書	十	31	天聰 10 (1636) 年 2 月 2 日 VI・太宗 3・912 頁
45	天聰ハーンがエルデニ・ノムチ (Erdeni^nomči) に送った文書	十	31	天聰 10 (1636) 年 2 月 2 日 VI・太宗 3・912 頁
46	天聰ハーンがジャサクト・ジノン (Jasaytu^jinüng) に送った文書	十	31	天聰 10 (1636) 年 2 月 2 日 VI・太宗 3・912 頁
47	天聰ハーンがトルボト(Tolbutu) に 称号を与えた文書	十	31	天聰 10 (1636) 年 2 月 2 日 VI・太宗 3・912 頁

## 1.2 『十七世紀蒙古文書檔案(1600—1650)』について

本文献は、中国第一歴史檔案館に所蔵される、後金国時代から清朝初期にかけての対モンゴル交渉・統治に関わるモンゴル語檔案文書計 111 件を写真版で収めた資料集で、「モンゴル歴史文書檔案叢書(mongγul teüken bičig debter-ün čobural)」の第 1 巻として公刊されたものである。

本文献は大きく二部に分かれている。第 1 部は、"manju mongγul-un qarilčayan-u teüken-dü qolbuγda=qu bičig debter"(満洲—モンゴル交渉の歴史に関する文書・檔案)(以下「文書 B」)であり、1636 年以前のモンゴル語檔案文書 61 件が収録されている。第 2 部は、"dayičing ulus-un γadaγadu mongγul-un törü-yi jasa=qu yabudal-un yamun-u temdegle=gsen debter"(大清国の理藩院の記した檔案)(以下「文書 C」)であり、1639 年から 1647 年の間のモンゴル語檔案文書 50 件が収録されている。「文書 B」と「文書 C」は編集者の李保文氏によって表題が付され、文書に原寸、年代、作成者等に関する簡単な解題、ローマ字転写が載せられている。また、文書の写真が載せられている。「文書 B」と「文書 C」の付録に人名索引、地名・部族名・国名索引、語彙索引が付されている。

次に、「文書 B」と「文書 C」について詳しく考察する。

### 1.2.1 「文書 B」 ("manju mongyul-un qarilčayan-u teüken-dü qolbuyda=qu bičig debter"満洲一モンゴル交渉の歴史に関する文書・檔案)について

「文書 B」 ("manju mongyul-un qarilčayan-u teüken-dü qolbuyda=qu bičig debter"満洲一モンゴル交渉の歴史に関する文書・檔案)は、主に満洲側とモンゴル側の交渉に関わる文書であり、計 61 件である。これを【1】～【61】とした。この中では内容が、満洲側がモンゴル側に送った文書は草稿のまま或いは写されたものである可能性が高い。モンゴル側から満洲側に送った文書は、原本が含まれている可能性が大きい。

井上治・永井匠・柳澤明(1999)による、李保文氏の付けた文書名の日本語訳は、表 2 の通りである。日付は李保文の解題による。【11】、【15】、【44】には日付がない。

表 2. 「文書 B」

番号	文書名	日付け
1	モンゴルのホルチン(Qorčïn)部のダルハン・タイジ(Darqan^tayiji)が遠征に出陣しなかった理由を知らせるために満洲のノルハチ(Nurqači)に送った文書	1606-1626
2	モンゴルのノン・ホルチン(Nayun^qorčïn)がチャハル(Čaqar)の辺境を奪うようにと満洲のホン・タイジ(Qung^tayiji)に送った文書	1606-1626
3	モンゴルのホルチン(Qorčïn)部のマンゴス・ノヤン(Mangγus^noyan)が保護してくれるようにと満洲のホン・タイジ(Qung^tayiji)に送った文書	1614-1626
4	モンゴルのホルチン(Qorčïn)部のトシェート・ハン(Tüsiyetü^qayan)が欲するところが一つであることを知らせるために満洲のホン・タイジ(Qung^tayiji)に送った文書	1626-1632
5	満洲のホン・タイジ(Qung^tayiji)が政友となろうとモンゴルのナイマン(Naiman)部のホン・バートル(Qung^bayatur)に送った文書	1627,2,2
6	満洲のホン・タイジ(Qung^tayiji)が姻戚となり【関係を】強化するように、セント(Sentü)の望み通りにするようにとモンゴルのノン・ホルチン(Nayun^qorčïn)のノヤン(Noyan)たちに送った文書	1627
7	満洲のホン・タイジ(Qung^tayiji)がモンゴルのアオハン(Auqan)部のノヤン(Noyan)たちに誓った文書	1627,7,6
8	モンゴルのハラチン(Qaračïn)部のドグレン・グエン(Dügüreng^güyeng)をはじめとする者がフフホト(Köke^qota)で起きた戦争の状況を満洲のホン・タイジ(Qung^tayiji)に【書き】送った文書等を記録した檔案	1628,2,1
9	モンゴルのハラチン(Qaračïn)部のタボノン(Tabunung)たちの使者がチャハル(Čaqar)に出発するということを記録した檔案	1628

10	ダルハン・バートル・ノヤン(Darqan <sup>^</sup> bayatur <sup>^</sup> noyan)とダルハン・トシエート(Darqan <sup>^</sup> tüsiyetü)が親戚となったと満洲のセチェン・ハーン(Sečen <sup>^</sup> qayan)の御前に申し上げたことを記録した檔案	1628
11	ダルハン・バートル・ノヤン(Darqan <sup>^</sup> bayatur <sup>^</sup> noyan)とダルハン・トシエート(Darqan <sup>^</sup> tüsiyetü)が親戚となったと満洲のセチェン・ハーン(Sečen <sup>^</sup> qayan)の御前に申し上げたことを記録した檔案	なし
12	満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)が仲睦まじく暮らすためにモンゴルのハラチン(Qaračin)部の使者に誓って送った文書	1628,8,3
13	モンゴルのホルチン(Qorčin)部のトシエート・ハーン(Tüsiyetü <sup>^</sup> qayan)が罪を犯したと満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)が非難した文書	1628,12,1
14	満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)が禁令を統一するためにモンゴルのトメド(Tümed)部の政を司っているタボノン(Tabunung)たちに書いた文書	1628.12.9
15	ハラチン(Qaračin),満洲が和睦した【ことについての】ハラチン(Qaračin)の誓文	なし
16	満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)をはじめノン・ホルチン(Nayun <sup>^</sup> qorčin)の大小のノヤン(Noyan)たちが戦争に出馬するために話し合っ(て定め)た禁令	1629,3,2
17	モンゴルのハラチン(Qaračin)部のチョスキ・タボノン(Čoski <sup>^</sup> tabunung)が危機にあることを知らせるために満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1629
18	モンゴルのハラチン(Qaračin)部のワンダン(Wadan)が中国と接触したことを満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に知らせた文書	1629
19	モンゴルのエルデニ・ドーレン・ホン・バートル(Erdeni <sup>^</sup> dügüreng <sup>^</sup> qung <sup>^</sup> bayatur <sup>^</sup> tayiji)が従おうとする心は不変であることを知らせるために満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1629
20	モンゴルの Qorčin 部のトシエート・ハーン(Tüsiyetü <sup>^</sup> qayan)がチャハル(Čaqar)に何が起っているのかを知らせるために満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1630
21	満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)がチャハル(Čaqar)に出陣するようにとモンゴルのホルチン(Qorčin)部のトシエート・ハーン(Tüsiyetü <sup>^</sup> qayan)に書いた文書	1626-1632
22	モンゴルのホラチ・バートル・ノヤン(Qolači <sup>^</sup> bayatur <sup>^</sup> noyan)のセチェン・ダイチン(Sečen <sup>^</sup> dayičing)が困難を知らせるために満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
23	満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)が戦争・混乱を起こさないようにとモンゴルのホルチン(Qorčin)部のエルデン(Yeldeng)に書いた文書	1626-1632



24	満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji) 戦争・混乱を起こさないようにとモンゴルのホルチン(Qorčin)部のソノンタイジ(Sonun <sup>^</sup> tayiji)に書いた文書	1626-1632
25	満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)が政を話し合うためにモンゴルの山陽のノヤン(Noyan)たち、タボノン(Tabunung)たちに書いた返書	1626-1634
26	満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)がチャハル(Čaqar)のバイシン(Bayising)に出陣するようにとモンゴルのホン・バートル(Qung <sup>^</sup> baGatur)をはじめとする者に書いた文書	1626-1632
27	モンゴルのハラチン(Qaračin)部のハーン(Qayan)をはじめとする者がチャハル(Čaqar)に出陣するようにと満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
28	モンゴルのハラチン(Qaračin)部のウジェン・ブラマ(Üjeng <sup>^</sup> blam_a)が友好のために満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
29	モンゴルのトメド(Tümed)部のエルデニ・ドーレン・ホン・バートル(Erdeni <sup>^</sup> dügüreng <sup>^</sup> qung <sup>^</sup> bayatur <sup>^</sup> tayiji)がチャハル(Čaqar)に何が起こっているかを満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に知らせた文書	1626-1632
30	モンゴルのホルチン(Qorčin)部のトシエート・ハーン(Tüsiyetü <sup>^</sup> qayan)の妃が更に考えるようにと満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1636
31	モンゴルのハラチン(Qaračin)部のアバハイ(Abaqai)をはじめとする者がご機嫌を伺うために満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
32	モンゴルのホルチン(Qorčin)部のノミ・バグシ(Nomi <sup>^</sup> bayisi)が友好のために満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
33	モンゴルのハラチン(Qaračin)部のワンダン・タボノン(Wadan <sup>^</sup> tabunung)が政を話し合うために満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
34	モンゴルのハラチン(Qaračin)部のエチゲ・バラマ(Ečige <sup>^</sup> blam_a)が生活状態を知らせるために満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
35	モンゴルのハラチン(Qaračin)部のハーン(Qayan)をはじめとする者が援助を求めて満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
36	モンゴルのハラチン(Qaračin)部のトバスガ(Tobasaγ_a)をはじめとする者が生活状態を知らせるために満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
37	モンゴルのハラチン(Qaračin)部のジャイサン・タイジ(Ĵayisang <sup>^</sup> tayiji)が頼るために行って面会することができなかったことを知らせるために満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
38	モンゴルのトメド(Tümed)部シャムバ・タボノン(Šamba <sup>^</sup> tabunung)をはじめとする者が指定された城に住むことができなかったことを知らせるた	1626-1634

	めに満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	
39	モンゴルのハラチン(Qarač <sup>in</sup> )部のドーレン・グエン(Dügüreng <sup>^</sup> güyeng)が不満を表明して満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1636
40	モンゴルのハラチン(Qarač <sup>in</sup> )部のハーン(Qayan)をはじめとする者がチャハル(Ča <sup>q</sup> ar)に対して協力して出陣しようと満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1634
41	モンゴルのホルチン(Qorč <sup>in</sup> )部のトシエート・ハーン(Tüsiyetü <sup>^</sup> qayan)がアロ(Aru)へ出陣したチャハル(Ča <sup>q</sup> ar)を討伐しようと満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
42	モンゴルのチョグト・タイフー(Čoytu <sup>^</sup> tayikeü)がアロ(Aru)とウベル(Öb <sup>ü</sup> r)の政について満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1636
43	モンゴルのトメド(Tümed)部のゲンゲル・キヤ・ノヤン(Gengge <sup>l</sup> ^kiy_a <sup>^</sup> noyan)が政道の事を教えるために満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
44	モンゴルのハラチン(Qarač <sup>in</sup> )部のバドマ・タボノン(Badm_a <sup>^</sup> tabunung)が財産について満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	なし
45	満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)がチャハル(Ča <sup>q</sup> ar)を討伐することについてモンゴルのハラチン(Qarač <sup>in</sup> )部のハーン(Qayan)をはじめとする者に書いた文書	1626-1632
46	モンゴルのホルチン(Qorč <sup>in</sup> )部のトシエート・ハーン(Tüsiyetü <sup>^</sup> qayan)がバーリン(Bayarin)、ジャロード(Ĵarayud)について満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
47	モンゴルのハラチン(Qarač <sup>in</sup> )部のジョルビト(Ĵobil <sup>tu</sup> )ホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)が満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)をはじめとする者に与えた文書	1626-1632
48	モンゴルのハラチン(Qarač <sup>in</sup> )部のボディソグ(Bodisug)をはじめとする者が生活状態について満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
49	モンゴルのホルチン(Qorč <sup>in</sup> )部のトシエート・ハーン(Tüsiyetü <sup>^</sup> qayan)が逃亡者の言葉を満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に知らせた文書	1626-1632
50	モンゴルのハラチン(Qarač <sup>in</sup> )部がご機嫌に伺うために満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
51	モンゴルのホルチン(Qorč <sup>in</sup> )部が常に伴でいようと満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1636
52	モンゴルのウイジェン・クンドレン・ノヤン(Üijeng <sup>^</sup> kündüleng <sup>^</sup> noyan)が貢物について満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1636
53	モンゴルのエルデニ・ホン・タイジ(Erdeni <sup>^</sup> qung <sup>^</sup> tayiji)が友好のために	1614-1626

	満洲のホンタイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	
54	約束に遅れたことについて満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1636
55	いかなることでも文書で言うようにと満洲のホンタイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1636
56	満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)の罪を数え上げて送った文書	1626-1636
57	おいでくださいと満洲のホンタイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1636
58	政府の使者と逃亡者について満洲のホン・タイジ(Qung <sup>^</sup> tayiji)に送った文書	1626-1632
59	チェベト(Čebtü)のホーリチ(Quulči)について満洲のハーン(Qayan)に送った文書	なし
60	チャハル(Čaqar)の逃亡者の言葉を満洲のハーン(Qayan)に知らせた文書	-1634
61	オトク(Otuγ)の移動について満洲のハーン(Qayan)に送った文書	-1632

李保文(1997)によれば、「文書 B」の【5】、【7】、【8】、【12】、【13】、【16】の内容がある程度の編集を経て「清初内国史院満文檔案」<sup>6</sup>、『大清太宗文皇帝実録(一)(二)』に入っている。

「文書 B」の【16】：「満洲のホン・タイジ(Qung<sup>^</sup>tayiji)をはじめノン・ホルチン(Nayun<sup>^</sup>qorč'in)の大小のノヤン(Noyan)たちが戦争に出馬するために話し合っ(て定め)た禁令」は、「文書 A」の【15】：「辛未年の法典 2」に対応する。「文書 B」の【16】に付されている日付けは、天聡 3 年(1629 年)であり、「文書 A」の【15】に付されている日付けは、天聡 5 年(1631 年)である。「文書 A」の【15】の内容は、「文書 B」の【16】に付け加えと改善をしたものと考えられる。

希都日古(2006)には、「文書 B」の 36 件のモンゴル語檔案文書の漢語訳がある。それは【1】、【2】、【3】、【4】、【5】、【6】、【7】、【8】、【12】、【13】、【14】、【15】、【16】、【17】、【19】、【20】、【21】、【23】、【25】、【27】、【29】、【30】、【35】、【38】、【39】、【40】、【41】、【45】、【46】、【47】、【49】、【51】、【53】、【54】、【58】、【59】である。

<sup>6</sup> 「清初内国史院満文檔案」の原文は、"dayičing ulus-un dotuyadu sudur bičig-ün küriyeleng-dü qadaγala=γsan manju debter " (大清国の内国史院に保管した満文檔案)である。これは、中国第一歴史檔案館に所蔵されている清太宗太聡元年(1627 年)から清太宗崇徳八年(1643 年)までの満文による檔案である。その中国語訳は、1989 年に、『清初内国史院満文檔案訳編』の題名で中国第一歴史檔案館によって出版されている。

宝音徳力根等(2000)には、モンゴル語檔案文書【5】、【7】、【8】、【12】、【13】、【25】の満洲語訳と漢語訳がある。その満洲語訳(或いは満洲語の原文)は、「満文老檔」に載っている。文書【5】、【7】、【8】、【12】、【13】、【25】の満洲語訳は、それぞれ『満文老檔IV太宗』(満文老檔研究会訳注)の11、91、118、139、181、124頁にある。

文書【5】は、満洲のホンタイジ(Qung<sup>^</sup>tayiji)が政友になろうとモンゴルのナイマン(Naiman)部のホンバートル(Qung<sup>^</sup>bayatur)に送った文書である。本文書には塗抹された語句があり、それを解読し当該語句の復元した部分は「満文老檔」の満洲語に対応する。本文書はモンゴル側に送られた書簡の下書きであるがどの過程で塗抹されたか不明である。

文書【7】の内容は、満洲のホンタイジ(Qung<sup>^</sup>tayiji)がモンゴルのアオハン(Auqan)部のノヤン(Noyan)たちに誓った文書である。

文書【8】の内容は、モンゴル側のハラチン(Qarač<sup>in</sup>)から送って来た檔案文書を書き写したものである。この檔案文書の第14行と第15行には塗り消したところがある。塗り消したところに当てはまる満洲語訳はない。このモンゴル語檔案文書は原稿である可能性がある。

文書【12】は、満洲のホンタイジ(Qung<sup>^</sup>tayiji)が仲睦まじく暮らすためにモンゴルのハラチン(Qarač<sup>in</sup>)部の使者に誓って送った文書である。文書に書かれているのはハラチン(Qarač<sup>in</sup>)が満洲に悪意を持ち、明とチャハルと仲良くすれば、わざわざに会うがよいとしている。これと違って満洲語訳には、満洲がハラチンに悪意を持つと満洲にわざわざ来るがよいと書いてある。モンゴル語檔案文書と満洲語檔案文書は内容的に違っていることが分かる。両方とも不完全な誓い文である可能性がある。モンゴル語檔案文書はモンゴル側の誓い文であり、満洲語檔案文書は満洲側の誓い文である。

文書【13】は、モンゴルのホルチン(Qorč<sup>in</sup>)部のトシエート・ハーン(Tüsiyetü<sup>^</sup>qayan)が罪を犯したと満洲のホンタイジ(Qung<sup>^</sup>tayiji)が非難した文書である。満洲語の文書との違いは、満洲語の文書ではモンゴル側に捕まえられた人の名前は「egu」であり、これに対しモンゴル語檔案文書では「egüi」(23、25行)である。また一人の名前は満洲語では「Konggor Mafa」であり、モンゴル語では「Qongy'ur」である。モンゴル語の原稿が先に書かれ、檔案編集の際に、満洲語に訳された可能性がある。満洲語の「Mafa」は、「祖父」の意味であり付け加えられたと考えられる。

文書【25】は、満洲側がモンゴル側に送った檔案文書である。この文書は満洲語からモンゴル語に訳したものではなく原稿の可能性もある。檔案編纂の際にモンゴル語から満洲

語に翻訳した可能性がある。次にあげたように、それは、モンゴル語を満洲語に翻訳するときに、モンゴル語の「büri」(毎)を「bür」(全、皆)に誤って「burtei」(満洲語のすべての意味)に訳している。「モンゴル文語」は文書【25】にある文であり、「満洲語訳」は『満文老檔IV太宗』による満洲語訳のローマ字転写である。

モンゴル文語：Ülke-yin n'oyad büri-yin elči ilege=.. 「ウルケのノヤン達がそれぞれ使者を派遣せよ」

満洲語訳：ülhei beise burtei elcin unggi, 「ウルケのノヤン達がすべて使者を派遣せよ」

### 1.2.2 「文書 C」 ("dayičing ulus-un γadaγadu mongγul-un törü-yi ĵasa=qu yabudal-un yamun-u temdegle=gsen debter"大清国の理藩院の記した檔案)について

「文書 C」 ("dayičing ulus-un γadaγadu mongγul-un törü-yi ĵasa=qu yabudal-un yamun-u temdegle=gsen debter"大清国の理藩院の記した檔案)は、主に理藩院の記録したもので、モンゴル各部からの貢品、或いは清朝からモンゴル各部の下贈品を列記したものであり、計 50 件である。これを【1】～【50】とした。

井上治・永井匠・柳澤明(1999)による李保文氏の付けた檔案文書名の日本語訳は表 3 の通りである。日付は李保文の解題による。丸括弧()の中に書いたある日付は西暦による日付である。

表 3. 「文書 C」

番号	文書名	日付け
1	ホルチン(Qorčĭn)、ドルベド(Dörbed)等の部のノヤン(Noyan)たちが捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1639.1.6 (1639.2.8)
2	第 2 部の 1 に載せた檔案の帯紙の文字	1639.1.6 (1639.2.8)
3	アオハン(Auqan)のバンデイ(Bandi)が捧げた贈り物等のことについて理藩院が記録した檔案	1639.1.19 (1639.2.21)
4	ホルチン(Qorčĭn)のジャサグ(Ĵasaγ)のボヤント・ハトン(Buyantu^qatun)をはじめとする者が捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1639.1.25 (1639.2.27)
5	ホルチン(Qorčĭn)のジャサグ(Ĵasaγ)のボヤント・ハトン(Buyantu^qatun)をはじめとする者が捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1639.7.11 (1639.8.9)
6	ホルチン(Qorčĭn)のバートル(Bayatur)郡王が捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1639.7.19 (1639.8.17)

7	フフホト (Köke <sup>qota</sup> ) のトメド (Tümed) のグルゲ・ジャンギン (Gölüge <sup>janggin</sup> ) をはじめとする者が捧げた貢物について理藩院が記録した檔案	1639.7.19 (1639.8.17)
8	ホルチン (Qorčin) のジャサグ (Ĵasaγ) のビント・ハトン (Bingtü <sup>qatun</sup> ) をはじめとする者が捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1639.7.26 (1639.8.24)
9	アオハン (Auqan)、ナイマン (Naiman) 等の部のあらゆる罪状を話し合ったことについて理藩院が記録した檔案	1639.8.5 (1639.9.2)
10	アオハン (Auqan) の多羅郡王所属のダダン・オバシ (Dadang <sup>ubasi</sup> ) をはじめとする者の罪について理藩院が記録した檔案	1639.8.5 (1639.9.2)
11	ヘシゲテン (Kesigten) のソノム (Sonum) をはじめとする者の罪を話し合ったことについて理藩院が記録した檔案	1639.8.5 (1639.9.2)
12	スニド (Sönid) のテンギス (Tenggis) をはじめとする者が捧げた貢物等のことについて理藩院が記録した檔案	1639.8.17 (1639.9.14)
13	ゴルロス (Forlus)、ホルチン (Qorčin) 等の部のノヤン (Noyan) たちが捧げた貢物について理藩院が記録した檔案	1639.8.17 (1639.9.14)
14	鑲黄の Cholmon (Čolmun) を取り調べたことについて理藩院が記録した檔案	1639.8.20 (1639.9.17)
15	バーリン (Bayarin) のマンジョシリ (Manjusiri) の罪を取り調べたことについて理藩院が記録した檔案	1639.8.20 (1639.9.17)
16	外のノヤン (Noyan) たちが捧げた貢物について理藩院が記録した檔案	1639.11.5 (1639.11.29)
17	ハラチン (Qaračin)、トメド (Tümed) のノヤン (Noyan) たちの罪を話し合った等のことについて理藩院が記録した檔案	1639.11.13 (1639.12.7)
18	ホルチン (Qorčin)、ドルベド (Dörbed) を取り調べたことについて理藩院が記録した檔案	1639.12.27 (1640.1.19)
19	アバガ (Abay <sub>a</sub> )、スニド (Sönid) のノヤン (Noyan) たちが捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1639.12.28 (1640.1.20)
20	ウジュムチン (Üjümüčin)、ホルチン (Qorčin) 等の部のノヤン (Noyan) たちが捧げた贈り物、供えた供物について理藩院が記録した檔案	1642.1.5 (1642.2.3)
21	ハルハ (Qalq <sub>a</sub> ) のダイチン・ハタン・バートル (Dayičing <sup>qatan</sup> bayatur) をはじめとする者が捧げた貢物について理藩院が記録した檔案	1643.1.26 (1643.3.16)
22	オルドス (Ordus) のジャムソ・タイジ (Ĵamsu <sup>tayiji</sup> ) をはじめとする者が捧げた貢物について理藩院が記録した檔案	1643.1.26 (1643.3.16)
23	ウェールド (Ögeled) のセレン・ノヤン (Sereng <sup>noyan</sup> ) の第一夫人を	1643.1.26

	はじめとする者が捧げた貢物 <sup>みつぶつ</sup> について理藩院が記録した檔案	(1643.3.16)
24	フフホト (Köke^qota) のトメド (Tümed) のグルグ・ジャンギン (Gölüge^janggin) をはじめとする者が捧げた貢物について理藩院が記録した檔案	1643.2.13 (1643.4.1)
25	四子 (Dörben^keüked)、オンニゴド (Ongniγud) 等の部のノヤン (Noyan) たちが捧げた貢物について理藩院が記録した檔案	1643.8.6 (1643.9.18)
26	フフホト (Köke^qota) のトメド (Tümed) のグルグ・ジャンギン (Gölüge^janggin) をはじめとする者が捧げた貢物について理藩院が記録した檔案	1643.8.27 (1643.10.9)
27	ホルチン (Qorčīn) のジャサグ (Ĵasay) のボヤント (Buyantu^qatun) をはじめとする者が捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1643.9.1 (1643.10.13)
28	シレート・チョルジ (Siregetü^čorĵi) をはじめとする者が捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1643.9.5 (1643.10.17)
29	バーリン (Bayarin)、ホルチン (Qorčīn) 等の部のノヤン (Noyan) たちが捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1643.9.14 (1643.10.26)
30	ホルチン (Qorčīn)、ゴルロス (Ĝorlus) 等の部のノヤン (Noyan) たちが捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1643.9.19 (1643.10.31)
31	ハルハ (Qalq_a)、スニド (Sönid) 等の部のノヤン (Noyan) たちが捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1643.10.5 (1643.11.15)
32	アバガ (Abay_a)、ウジュムチン (Üĵümüčīn) 等の部のノヤン (Noyan) たちが捧げた贈り物、供えた供物について理藩院が記録した檔案	1643.10.19 (1643.11.29)
33	オルドス (Ordus)、スニド (Sönid) のノヤン (Noyan) たちが捧げた貢物、四季の貢物について理藩院が記録した檔案	1643.10.19 (1643.11.29)
34	フフホト (Köke^qota) のトメド (Tümed) のグルグ・ジャンギン (Gölüge^janggin) をはじめとする者が捧げた貢物について理藩院が記録した檔案	1643.10.22 (1643.12.2)
35	フフホト (Köke^qota) のトメド (Tümed) のチェグチェム (Čegčēümü) をはじめとする者が捧げた貢物について理藩院が記録した檔案	1643.10.30 (1643.12.10)
36	トメド (Tümed)、ハラチン (Qaračīn) 等の部のノヤン (Noyan) たちが捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1643.10.30 (1643.12.10)
37	ハルハ (Qalq_a)、チベット (Töbed) のノヤン (Noyan) たち、ブラマ (Blam_a) たちが捧げた貢物について理藩院が記録した檔案	1643.11.7 (1643.12.17)
38	オルドス (Ordus)、ゴルロス (Ĝorlus) のノヤン (Noyan) たちが捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1643.11.28 (1644.1.7)
39	ハルハ (Qalq_a) のマカ・サマディ・ハーン (Maq_a^samadi^qayan) をはじめとする者が捧げた貢物について理藩	1643.12.19 (1644.1.28)

	院が記録した檔案	
40	崇徳8年の檔案の包装紙に書かれた文字	1644
41	ナイマン(Naiman)、ホルチン(Qorčīn)等の部のノヤン(Noyan)たちが捧げた貢物と回賜について理藩院が記録した檔案	1646.1.19 (1646.3.6)
42	ホルチン(Qorčīn)のジャンギロン(Ĵanggilun)、ウラド(Urad)のチュチェンゲ(Čüčenggei)が捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1646.1.19 (1646.3.6)
43	トメド(Tümed)のラムジャムバ・ブラマ(Ramĵamba^blam_a)をはじめとする者が捧げた貢物と回賜について理藩院が記録した檔案	1646.2.29 (1646.4.14)
44	トメド(Tümed)、ウエーレド(Ögeled)、ハルハ(Qalq_a)のノヤン(Noyan)たち、活仏(Qutuγtu)をはじめとする者が捧げた貢物と回賜について理藩院が記録した檔案	1646.3.8 (1646.4.23)
45	ハルハ(Qalq_a)のノヤン(Noyan)たち、活仏(Qutuγtu)をはじめとする者が捧げた貢物と回賜について理藩院が記録した檔案	1646.3.25 (1646.5.10)
46	ホルチン(Qorčīn)、ホーチド(Qayučid)等の部のノヤン(Noyan)たちが捧げた贈り物と回賜について理藩院が記録した檔案	1646.4.11 (1646.5.25)
47	バヤスホラン(Bayasqulang)をはじめとする者が捧げた贈り物について理藩院が記録した檔案	1646.7.29 (1646.9.8)
48	四子(Dörben^keüked)、スニド(Sönid)のノヤン(Noyan)たちに対する下賜を理藩院が登録した檔案	1646.10.11 (1646.11.17)
49	フフホト(Köke^qota)のトメド(Tümed)のグルン・ディワ・活仏Gürün^diw_a^qutuγtuをはじめとする者が捧げた貢物と回賜を理藩院が登録した檔案	1646.11.26 (1647.1.1)
50	イラゴグサン・活仏(İlayu=γsan^qutuγtu)をはじめとする者がチャガン・ブラマ(Čayan^blam_a)と共に遣わしたブラマ(Blam_a)、使者たちと【彼らが】首都に到着した日を理藩院が登録した檔案	1647.12.10 (1647.1.15)

李保文(1997)によれば、「文書 C」の文書【3】、【4】、【5】、【6】、【7】、【8】、【9】、【10】、【11】、【13】、【15】、【17】、【18】、【20】、【21】、【22】、【23】、【24】の内容がある程度の編集を経て「清初内国史院満文檔案」、『大清太宗文皇帝実録(二)』に入っている。そのほか、【26】、【27】、【28】、【29】、【30】、【31】、【32】、【34】、【36】、【37】、【38】、【39】、【41】、【42】、【44】、【45】、【46】、【47】、【48】、【50】の内容がある程度の編集を経て『大清世祖章(順治)皇帝実録(一)(二)(三)』に入っている。これらの文書は、『大清太宗文皇帝実録(二)』と『大清世祖章(順治)皇帝実録(一)(二)(三)』に、かなり縮小されて収められたことを確認できた。



### 1.3 まとめ

本章では、研究対象である「文書 A」（『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書）、「文書 B」（"manju mongγul-un qarilčayan-u teüken-dü qolbuγda=qu bičig debter"満洲—モンゴル交渉の歴史に関する文書・檔案）、「文書 C」（"dayičing ulus-un γadaγadu mongγul-un törü-yi jasa=qu yabudał-un yamun-u temdegle=gsen debter"大清国の理藩院の記した檔案）の関連文献に関する考察をすることにより、「清初内国史院満文檔案」、「満文老檔」、『大清太宗文皇帝実録』、『大清世祖章(順治) 皇帝実録(一)(二)(三)』などに入っていることから、共通して、檔案や史書編纂する際に参考にされていたことが分かる。その際に、数多くのモンゴル語檔案文書が満洲語に翻訳されている。

「文書 A」の文書【1】は従来の研究では見落とされ、本研究では新しい報告する文書である。

「文書 A」と「文書 B」には、内容が重なるモンゴル語檔案文書が含まれている。また、共通して、若干のモンゴル語檔案文書が満洲語に翻訳され、「満文老檔」に入っている。若干のモンゴル語檔案文書を満洲語と対照することによって、翻訳過程で生じた過ちなどから、モンゴル檔案文書が原文である（満洲語から翻訳したものでない）ことを確認できた。

## 第2章 モンゴル語檔案文書の字形の特徴

### 2.1 問題の所在

モンゴル文字の字形は最初のウイグル文字の字形から少しづつの変化を経て今日に至る。

『蒙古学百科全書(語言文字卷)』(2004)では、「近代モンゴル文語は16世紀から18世紀前半までである。この時代のモンゴル文語の一つの大きな特徴は、「アリガリ(alı ɣalı)」文字が作られたことにあり、仏典などの専門用語を記録するために新しい文字や記号がモンゴル文語に付け加えられ、「古典式モンゴル文語」になった。この時代のモンゴル文語が、檔案と公文書に使われたほか、大量の仏典の翻訳、モンゴル年代記に使われた」<sup>7</sup>としている。

本章では、上述した「古典式モンゴル文語」が17世紀前半におけるモンゴル語檔案文書に使われたかどうか、つまり、同時代の古典式モンゴル文語の字形と同じかどうか、異なっていれば、それは何の字形であるかを検討する。

モンゴル語檔案文書はすべて手書きの文献であり、竹ペンで書いたものがあれば、筆で書いたものもある。個人による字の形の違いが大きいですが、字形は甚だ離れたものではなく、モンゴル文字の時代的な特徴を反映するものである。

モンゴル語檔案文書の中では、同一人物の記したと考えられる文書も存在する。例えば、「文書B」の【18】と【33】は、同じ人物の書いた文書である。【18】は、「モンゴルのハラチン(Qaračın)部のワダン(Wadan)が中国と接触したことを満洲のホン・タイジ(Qung<sup>^</sup>tayıjı)に知らせた文書」であり、【33】は、「モンゴルのハラチン(Qaračın)部のワダン・タボノン(Wadan<sup>^</sup>tabunung)が政を話し合うために満洲のホン・タイジ(Qung<sup>^</sup>tayıjı)に送った文書」であり、【18】と【33】は、同じくハラチンのワダンという人から送られた文書である。このような例は他にも幾つか見られる。本研究では、これらの個人による字体をすべて、同時代の字形の特徴を反映できるものと見なす。

次に、モンゴル文字の字形に関連して、本論文で使用する若干の用語について説明する。これは、既に栗林均・海蘭(2015)に書いてあるモンゴル文字の字形に関する用語の説明であり、ここでは、研究方法として用いる。

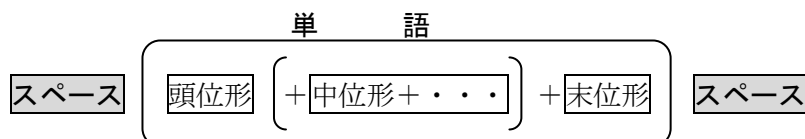
**字形(頭位形、中位形、末位形)**：モンゴル文字が、単語の中に占める位置や他の文字と連なる際に取りうる形を字形と呼ぶ。モンゴル文字では、単語をひと続きに書き、単語と単語の間にはスペースが置かれる。その際、ひとつの単語を構成する複数の文字は縦の中心線に合わせて線(字画)が途切れることなく続くのが特徴である。つまり、ひとつの単語に含まれる文字の中心線は連続しており、文字と文字との間にスペースは入らない。

モンゴル文字のもうひとつの大きな特徴は、単語内の位置、つまり語頭、語中、語末で

7 『蒙古学百科全書(語言文字卷)』(2004) 19頁

文字の形が変わることである。大まかに言えば、すべてのモンゴル文字は、単語の語頭、語中、語末に現れる際に取りうる3種類の異なった字形をもっている。語頭、語中、語末に現れる文字の字形を、それぞれ頭位形、中位形、末位形と呼ぶと、単語を構成する文字の位置と字形の関係は、次のように表すことができる。

図1. 単語を構成する基本的な字形の配置

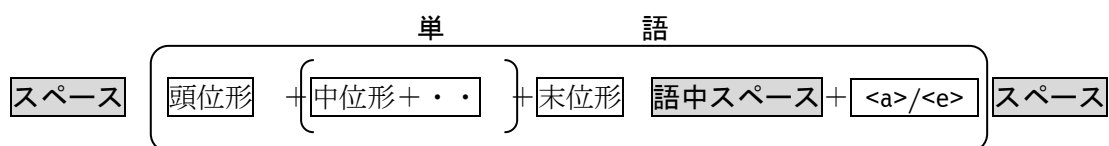


頭位形と末位形の間には置かれる文字は、いくつ連なっても、すべて中位形となる。単語が2文字からなる場合は、頭位形に直接末位形が連なる。このように中位形の文字がない場合もあるので、上図では中位形をカッコに入れた。

分綴、連綴、語中スペース、分離形：上に見たように、モンゴル語ではひとつの単語を構成する文字の線（字画）が切れ目なく連なるのが原則である。これに対して、ひとつの単語が分けて綴られる場合がある。その主要な部分をなすのは、母音字 <a> と <e> が語末に位置する場合、単語の先行する部分から、しばしば離して書かれることである。この場合、母音字 <a> <e> の前にスペースが置かれて、語末には母音字 <a> <e> が1文字だけ置かれることになる。

このように、単語の中にスペースが置かれて、ひとつの単語が分けて綴られることを「分綴（ぶんでつ）」と呼ぶ。また、単語の内部に置かれるスペースを「語中スペース」、語末に単独で現れる母音字 <a> <e> の字形を「分離形」と呼ぶ。「連綴（れんでつ）」は「分綴」に対して、語中スペースを入れずに連ねて書くことを明示的に示す用語である。そのような単語を構成する文字の配置と字形は、次のように示すことができる。

図2. 語末の <a> <e> が分綴される場合の字形の配置



ここで注意すべきことは、語中スペースの前の文字は末位形となることである。

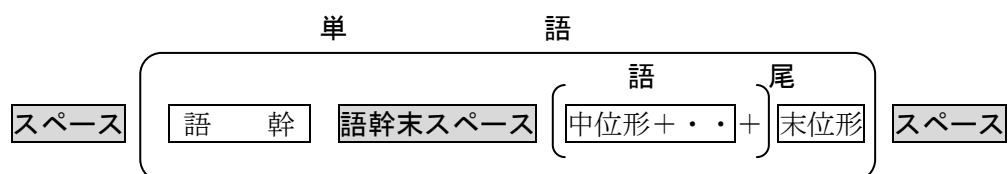
ローマ字転写では、語中スペースを「\_」（アンダースコア）で表記する。

上の図1. と図2. は、単語を構成する字形の配置を示す基本形とみなすことができる。さらに、名詞の語幹と曲用語尾（格語尾、複数語尾、所属語尾）が分綴される場合も、それらはひとつの単語を構成する。名詞の格語尾、および複数語尾の一部は語幹から離して書かれるが、それらは語幹と一緒に単語を構成しているので、ひとつの単語が分綴されているとみなされる。この場合、語幹と語尾の間に置かれるスペースを「語幹末スペ

ース」と呼び、ローマ字転写では、これを「-」（ハイフン）で転写する。

図3. は「語幹」と「語幹末スペース」と「語尾」の関係を示したものである。この場合、図1. と図2. でみた単語の語形は、そのまま「語幹」の語形となる。一方、分綴される語尾は原則として中位形の文字から始まる。それらの字形と位置の関係は、次のように表すことができる。


図3. 分綴される語幹と語尾における字形の配置







語尾が1文字だけから成る場合は、末位形で現れる。この場合、語末に単独の文字が書かれるので、図2. の場合と同様「分離形」と呼ぶこともできる。

語尾の先頭の文字が中位形となるのは、単語が完結していない（語尾が単語の一部である）ことを示していると考えられる。

**合体字**：複数（多くの場合二つ）の文字を組み合わせた字形で、それぞれの文字の特殊な字形の連なりとみなされる。「文書」では、子音字 <b> <g> <k> と母音字 <o> <u> <ö> <ü> との連なりが典型的な合体字として現れている。


<b>と<o><u>の合体字：頭位、中位、末位で  (bo, bu)


<b>と<ö><ü>の合体字：頭位で  (bö, bü)、中位・末位で  (bö, bü)


<g><k>と<ö><ü>の合体字：頭位で  (gö, gü, kö, kü)、中位・末位で  (gü, kü)

**字体**：字体はひとつの字形の中のヴァリエント(variant)を指す。個人や集団の癖、筆記具の種類や文字が記される媒体の違い、時代や地方の違いによって様々な字体がありうる。字体の違いは、異なる字形が融合した結果であったり、新たな字形が形成される過程であったり、文字の変化を内含している場合があるため、本論文ではモンゴル語檔案文書のモンゴル文字の字体の違いにも注目した。

**字画**：モンゴル文字（字形）を構成する線や点の要素。特に次の三つの字画は、母音字の字形を構成する際に用いられるので重要である。右はモンゴル語の名称である。

 ačuy (アチヨグ) または sidü (シユド)

 silbi (シルビ) または urtu sidü (オルト・シユド)

 gedesu (ゲデス)

次の表 4 は N.Poppe(1954)による古典式モンゴル文語の字形である。

表 4. 古典式モンゴル文語の字形表<sup>8</sup>

Number	Transcription	Characters		
		Initial	Medial	Final
1	a	ᠠ	ᠡ	ᠢ ᠨ
2	e	ᠡ	ᠢ	ᠣ ᠨ
3	i	ᠢ	ᠣ	ᠤ
4	o u	ᠣ	ᠤ	ᠥ
5	ō ü	ᠣ	ᠤ ᠥ	ᠥ
6	n	ᠨ	ᠨ	ᠨ
7	ng		ᠨ	ᠨ
8	q	ᠬ	ᠬ	ᠬ
9	γ	ᠬ	ᠬ	ᠬ
10	b	ᠪ	ᠪ	ᠪ
11	p	ᠪ	ᠪ	
12	s	ᠰ	ᠰ	ᠰ
13	š	ᠰ	ᠰ	ᠰ
14	t d	ᠲ	ᠲ ᠳ	ᠲ
15	l	ᠯ	ᠯ	ᠯ
16	m	ᠮ	ᠮ	ᠮ
17	č	ᠴ	ᠴ	
18	j	ᠵ	ᠵ	
19	y	ᠶ	ᠶ	ᠶ
20	k g	ᠬ	ᠬ	ᠬ
21	k	ᠬ	ᠬ	
22	r	ᠷ	ᠷ	ᠷ
23	v	ᠸ	ᠸ	
24	h	ᠬ	ᠬ	

\*第 23 の文字 ᠸ は本研究では w に転写する。

<sup>8</sup> N.Poppe(1954) 17 頁。

ここでは、13-14 世紀のウイグル式モンゴル文字の字形、現代モンゴル文語の字形の表も提示する。表 5 は 13-14 世紀のウイグル式(先古典式)モンゴル文字の字形表であり、表 6 は現代モンゴル文語の字形表である。

表 5. 13-14 世紀のウイグル式モンゴル文字の字形表<sup>9</sup>

	頭位形	中位形	末位形
a	ᠠ	ᠡ	ᠠᠨᠠ
e	ᠡ	ᠢ	ᠠᠨᠡ
i	ᠢ	ᠣ	ᠠᠨᠢ
o,u	ᠣ	ᠤ	ᠠᠨᠣ
ö,ü	ᠤ	ᠥ	ᠠᠨᠤ
n	ᠨ	ᠨ	ᠠᠨ
b	ᠪ	ᠪ	ᠠᠪ
q	ᠪ	ᠪ	
γ	ᠪ	ᠪ	ᠠᠪ
k,g	ᠬ	ᠬ	ᠠᠪ
m	ᠮ	ᠮ	ᠠᠮ
l		ᠯ	ᠠᠯ
s	ᠰ	ᠰ	ᠠᠰ
š	ᠰ	ᠰ	ᠠᠰ
t, d	ᠲ	ᠲ	ᠠᠲ
č, ĵ	ᠴ	ᠴ	
y	ᠶ	ᠶ	ᠠᠶ
r		ᠷ	ᠠᠷ
ng		ᠨᠠᠭ	ᠠᠨᠠᠭ
w	ᠠ	ᠠ	

<sup>9</sup> 『蒙漢詞典』(1999) 1515 頁。

表 6. 現代モンゴル文語の字形表<sup>10</sup>

	頭位形	中位形	末位形
a	ᠠ	ᠡ	ᠢ
e	ᠡ	ᠢᠡ	ᠣᠡ
i	ᠢ	ᠣᠢ	ᠤ
o,u	ᠣ	ᠤ	ᠥ
ö,ü	ᠤ	ᠥᠤ	ᠦᠥ
n	ᠨ	ᠨᠢ	ᠨᠢᠨ
b	ᠪ	ᠪ	ᠪ
p	ᠮ	ᠮ	
q	ᠬ	ᠬ	ᠬ
γ	ᠬᠡ	ᠬᠡᠨ	ᠬᠡᠨ
g	ᠬ	ᠬ	ᠬ
k	ᠬ	ᠬ	
m	ᠮ	ᠮ	ᠮ
l	ᠯ	ᠯ	ᠯ
s	ᠰ	ᠰ	ᠰ
š	ᠰ	ᠰ	ᠰ
t	ᠲ	ᠲᠡ	ᠲᠡ
d	ᠲᠡ	ᠲᠡᠨ	ᠲᠡᠨ
č	ᠴ	ᠴ	
ǰ	ᠵ	ᠵ	ᠵ
y	ᠶ	ᠶ	ᠶ
r	ᠷ	ᠷ	ᠷ
ng		ᠨᠭ	ᠨᠭ
w	ᠠ	ᠠ	ᠠ

## 2.2 モンゴル語檔案文書の字形

ここでは、母音字の字形と子音字の字形に分けて検討する。





### 2.2.1 母音字の字形

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」には共通して <a> <e> <i> <o> <u> <ö> <ü> の七つの母音字が現れる。

<sup>10</sup> 『蒙漢詞典』(1999) 1418 頁、1420 頁。






これらのうち、<o>と<u>の文字、および <ö>と<ü> の文字は、それぞれ字形が完全に同じであるため、<o>と<u>、および <ö>と<ü>の文字を一緒に扱う。

### (1) 母音字<a>の字形



古典式モンゴル文語の母音字<a>の頭位形は 、中位形は 、末位形(分離形)は  と  である。次はモンゴル語檔案文書の母音字<a>の頭位形、中位形、末位形、分離形の字形である。


頭位形は二つの ačuy (アチョグ) からなる。書き出し(起筆)の部分の形によって様々な字体が見られる。なお「文書 C」に現れる字体の変型(variant)は少ない。

母音字<a>の頭位形：

「文書 A」に現れる頭位形：① 、② 、③ 、④ 、⑤ 、⑥ 

「文書 B」に現れる頭位形：① 、② 、③ 、④ 、⑤ 

「文書 C」に現れる頭位形：① 、② 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の母音字<a>の頭位形の字形は共通して、古典式モンゴル文語と同じ字形があるほか、多くの場合 ačuy (アチョグ) の書き出しの部分が右斜めにした形、あるいは曲がった形が現れる。これは、古典式モンゴル文語の字形と違った形であり、むしろ現代モンゴル文語の字形  と近い。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の母音字<a>の頭位形の古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語との対応を表で示せば、表 7 の通りである。

表 7. 母音字<a>の頭位形の字形


















	古典式モンゴル文語の字形 	現代モンゴル文語の字形 
「文書 A」	⑥ 	①  、②  、③  、④  、⑤ 
「文書 B」	④  、⑤ 	①  、②  、③ 
「文書 C」	② 	① 

表 7 で示したように、「文書 A」の⑥、「文書 B」の④、⑤、「文書 C」の②は古典式モンゴル文語の字形に近い形である。「文書 A」の①から⑤まで、「文書 B」の①から③まで、「文書 C」の①は、現代モンゴル文語に近い形である。

例：

「文書 A」に現れる例：

 ala=ba(4:6) 「殺した」

 Abay'\_a(15:19) 「アバガ」



「文書 B」に現れる例：

ayan (1:11) 「遠征」

aliba(5:6) 「すべて」

ali(19:10) 「どんな」

alus(35:11) 「遠く」

「文書 C」に現れる例：

ariki(1:4) 「酒」

arban(5:6) 「十」

arban(24:12) 「十」

中位形は一つの ačuy (アチョグ) からなる。「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる字形は であり、古典式モンゴル文語と同じ。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

qad(4:2) 「ハーン達」

čay'an(16:8) 「白い」

末位形は 1)子音字<b>に連なる字形と 2)それ以外の子音字に連なる字形である。

末位形 1)は子音字<b>に連なる字形である。字画の最後で上にハネる字体と、なめらかに払う字体が見られる：① 、②

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<a>の末位形 1)は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

qayirala=ba(4:9) 「愛しんだ」

alda=ba(14:2) 「失った」

末位形 2)は、<b>以外の子音字に連なる字形で、右に払う角度の違いや、字画の最後をハネる・ハネないといった字体の違いが見られる。：① 、② 、③ 、④

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<a>の末位形 2)は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。






例：




tulada(6:6) 「～ために」




yabu=qu1a(4:14) 「行けば」

分離形は線の角度や、書き出しの形によって次のような字体が見られる：

「文書 A」に現れる字形：① , ② , ③ , ④ , ⑤ , ⑥ 


「文書 B」に現れる字形：① , ② , ③ , ④ , ⑤ 


「文書 C」に現れる字形：① , ② , ③ 


「文書 A」に現れる分離形⑥  と「文書 B」に現れる分離形①  は先古典式(ウイグル式)モンゴル文語に現れる形 () と近い形である。この形は「文書 C」に現れない。


例：

「文書 A」に現れる例：


 Abay'\_a(15:19) 「アバガ (地名)」


 Qalq\_a(4:12) 「ハルハ (地名)」

 Jungq\_a(10:2) 「ジョンハ (地名)」


 tabun'-a(21:5) 「5 日に」


「文書 B」に現れる例：


 badm\_a(37:4) 「バドマ (人名)」


 lam\_a(39:17) 「ラマ (人名)」

「文書 C」に現れる例：





 tory'\_a(1:12) 「絹」

 miq\_a(5:6) 「肉」



 tory'\_a(34:14) 「絹」




 tabun-a(4:7) 「5 日に」




## (2) 母音字<e>の字形


古典式モンゴル文語の母音字<e>の頭位形は , 中位形は , 末位形(分離形)は  と  である。次はモンゴル語檔案文書の母音字<e>の頭位形、中位形、末位形、分離形の字形である。

頭位形は一つの ačuy (アチョグ) からなり、書き出しの形によって、次のような字体が見られる。

「文書 A」に現れる字形：① , ② , ③ 

「文書 B」に現れる字形：① , ② , ③ 

「文書 C」に現れる字形：① 、② 、③ 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の母音字<e>の頭位形の字形は共通して古典式モンゴル文語の字形と一致する字形があるほか、ačuy (アチョグ) の書き出しの部分の右斜めになった形、あるいは曲がった形が現れる。これは、古典式モンゴル文語の字形と異なる形であり、現代モンゴル語の字形 <e>に近い。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<e>の頭位形の古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語との対応を示せば、表 8 の通りである。

表 8. 母音字<e>の頭位形













	古典式モンゴル文語の字形 ↓	現代モンゴル文語の字形 →
「文書 A」	③ 	①  、② 
「文書 B」	②  、③ 	① 
「文書 C」	③ 	①  、② 




表 8 に示したように、「文書 A」の①、②、「文書 B」の①、「文書 C」の①、②は現代モンゴル文語の字形に似た形である。そのほかは、古典式モンゴル文語と一致する。

例：




「文書 A」に現れる例：

 ečige(2:2) 「父」     en'e(5:8) 「これ」     ende(36:2) 「ここで」


「文書 B」に現れる例：

 ežen(1:4) 「主」     egülen(2:2) 「雲」     elči(5:4) 「使者」

「文書 C」に現れる例：

 ežen(7:2) 「主」     en'e(3:7) 「これ」     ežen(36:20) 「主」

母音字<e>の中位形と末位形は母音字<a>の中位形と末位形と同じ。




中位形は一つの ačuy (アチョグ) からなる：

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<e>の中位形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：




 mede=ju(31:5) 「知って」
  ger(15:15) 「家」





末位形には 1)子音字 <b> <k> <g> に連なる字形と 2)それ以外の子音字に連なる字形がある。

末位形 1)は子音字<b> <k> <g>に連なる：①、②、③

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<e>の末位形 1)は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。



例：



 eči=be(5:2) 「行った」
  berke(32:7) 「困難な」
  ečige(4:8) 「父」

末位形 2)は<b> <k> <g>以外の子音字に連なる。：①、②、③、④







「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<e>の末位形 2)は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。






例：




 ebde=(20:2) 「損なえ」
  eme(33:9) 「妻」



 ene(29:2) 「これ、この」
  bile(40:10) 「～だった」

分離形は末位形 1)と同じ形か、あるいは書き出しの部分に違いがあり、語中スペース、語幹末スペースの後に書かれる。

「文書 A」に現れる字形：①、②、③、④、⑤、⑥

「文書 B」に現れる字形：①、②、③、④、⑤

「文書 C」に現れる字形：①、②、③

「文書 A」の⑥と「文書 B」の①は、先古典式(ウイグル式)モンゴル文字に現れる形 (ᠳ)に近い形であり、「文書 C」に現れない。

例：

「文書 A」に現れる例：

 ür\_e(4:15) 「子 (種)」
  es\_e(2:5) 「(否定詞)」

ir\_e=(23:6) 「来い」

em\_e(38:9) 「妻」

「文書 B」に現れる例：

ey\_e(23:11) 「和睦」

ey\_e(3:8) 「和睦」

bey\_e(17:12) 「体」

n'er\_e(37:7) 「名前」

「文書 C」に現れる例：

em\_e(23:2) 「妻」

üniy\_e(5:12) 「雌牛」

nigen-e(5:19) 「1日に」

### (3) 母音字<i>の字形

古典式モンゴル文語の母音字<i>の頭位形は、中位形は、末位形(分離形)はである。次はモンゴル語檔案文書の母音字<e>の頭位形、中位形、末位形、分離形の字形である。

頭位形は ačuy (アチョグ) に silbi (シルビ) が連なった字形で、次のような字体が見られる。

「文書 A」に現れる字形：① 、② 、③

「文書 B」に現れる字形：① 、② 、③

「文書 C」に現れる字形：① 、②

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」には古典式モンゴル文語と違って、ačuy (アチョグ) の書き出し部分の右斜めになった形が現れる。例えば、「文書 B」の②である。

「文書 A」に現れる例：

ire=be(2:4) 「来た」

ire=küi(15:9) 「来ること」

ire=jü(38:29) 「来て」

ilegü(27:11) 「余った」

「文書 B」に現れる例：

ire=jü(3:2) 「来て」

ire=be(23:7) 「来た」

ire=be(29:8) 「来た」

「文書 C」に現れる例：

ire=be(3:11) 「来た」

isegei(5:2) 「絨毯」

中位形は silbi (シルビ) だけからなる：

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<i>の中位形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

「文書 A」に現れる例：

čerig(24:6) 「軍」

bičig(37:6) 「書簡」

末位形は右に膨らんだ弧を描く線である。次のような様々な字体が見られる：

① 、② 、③ 、④ 、⑤ 、⑥ 、⑦ 、⑧

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<i>の末位形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

küči(28:3) 「力」

elči(16:8) 「使者」

分離形は末位形と同形で語幹末スペースの後に書かれる：① 、② 、③

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<i>の分離形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

yabudal-i(32:2) 「ことを」

qay'an-I(3:3) 「ハーンのもの」

この字形を取るのには、名詞の対格語尾-i と、それと同形の属格語尾である。本論文では、対格語尾-i と区別するために属格語尾を-I (大文字) で転写している(以下同じ)。

#### (4) 母音字<o><u>の字形




母音字の<o>と<u>は全く同じ字形で、これらを表記で区別することはできない。




古典式モンゴル文語の母音字<o><u>の頭位形は 、中位形は 、末位形(分離形)は である。次はモンゴル語檔案文書の母音字<o><u>の頭位形、中位形、末位形、分離形の字形である。



## 頭位形

「文書 A」と「文書 C」の母音字<o>と<u>の頭位形は、ačuy (アチョグ) に gedesü (ゲデス) が連なった字形である。

「文書 B」には二つの形が現れる。1) ačuy (アチョグ) に gedesü (ゲデス) が連なった字形、2) ačuy (アチョグ)、gedesü (ゲデス)、silbi (シルビ) が連なった字形

「文書 A」に現れる字形：① 、② 、③ 

「文書 B」に現れる字形：1) ① 、② 、 2) ① 

「文書 C」に現れる字形：① 、② 

母音字<o><u>の頭位形には古典式モンゴル文語にある字形とそれと異なる字形が現れる。古典式モンゴル文語と異なる字形は現代モンゴル文語の字形と同じか近い字形である。

表 9 では、「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<o><u>の頭位形の古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語の字形との対応を示した。

表 9. 母音字<o><u>の頭位形














	古典式モンゴル文語の字形 	現代モンゴル文語の字形 
「文書 A」	②  、③ 	① 
「文書 B」	1) ①  、② 	
「文書 C」	① 	② 


表 9 に示したように、古典式モンゴル文語の字形  と近い字体は「文書 A」の②、③、「文書 B」の 1) の①、②、「文書 C」の①である。現代モンゴル文語の字形  と同じか、近い字体は「文書 A」の①、「文書 C」の②である考えられる。


「文書 B」に現れる字形 2) の①  は古典式モンゴル文語、現代モンゴル文語にない字形である。


例：

「文書 A」に現れる例：


 ol=qu1a(7:5) 「見つければ」

 oru=qu1\_a(9:8) 「入れば」





 urida(20:4) 「前」


 urida(9:4) 「前」

「文書 B」に現れる例：

- 1)  ulus(1:4) 「人々」  otuγ(5:14) 「オトグ (地名)」
- 2)  u'č'ir(42:3) 「こと」  u'č'ira=ju(9:7) 「会って」

「文書 C」に現れる例：



-  Ongniγ'ud(1:9) 「オンニゴド (地名)」  Urad(1:6) 「オラド (地名)」
-  on(12:12) 「年」  ulus(7:10) 「人々」

中位形は gedesü (ゲデス) だけからなる： 


「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<o><u>の中位形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

-  doγ'uysi(15:2) 「下へ」  say'u=qu(16:4) 「住む」


子音字<b><p>に連なって合体字 、 (「文書 C」にだけ現れる)となる。この合体字は、語末にも現れる。





末位形には 1)子音字<b>,<p>との合体字と 2)それ以外の子音字に連なる字形がある。

末位形 1) 子音字<b>との合体字： 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる末位形 1)は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：


-  tabu(17:4) 「五」

末位形 2) <b>以外の子音字に連なる：① 、② 、③ 、④ 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<o><u>の末位形 2)は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。



例：

-  Boru(26:2) 「ボロ (地名)」  aduγ'u(16:6) 「馬群」

分離形は末位形と同形であるが語幹末スペースの後に書かれる： 






「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<o><u>の分離形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：  
 qay'an-u(10:4) 「ハーン」の  
 tan-u(43:2) 「汝ら」の  
 この字形を取るの、名詞の属格語尾 (-u) である。



(5) 母音字<ö><ü>の字形




母音字の<ö>と<ü>の字形は全く同じで、これらを表記で区別することはできない。


古典式モンゴル文語の母音字<ö><ü>の頭位形は 、中位形は 、末位形(分離形)は 。次はモンゴル語檔案文書の母音字<ö><ü>の頭位形、中位形、末位形、分離形の字形である。

頭位形は、1) ačuy (アチョグ) と gedesü (ゲデス) と silbi (シルビ) が連なった字形と 2) ačuy (アチョグ) と gedesü (ゲデス) だけの字形がある。古典式モンゴル文語の規範では、<ö>と<ü>の頭位形は 1)のみで、2)の字形はない。ローマ字転写では、頭位形の 2)の字形を、ö' ü' と転写する。

頭位形 1)は ačuy (アチョグ) と gedesü (ゲデス) と silbi (シルビ) が連なった字形である：

「文書 A」に現れる字形：① 、② 、③ 

「文書 B」に現れる字形：① 、② 、③ 

「文書 C」に現れる字形：① 、② 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の母音字<ö><ü>の頭位形の 1)には古典式モンゴル文語の頭位形と同じ形がある他、異なる形も現れる。それは、ačuy (アチョグ) の書き出しの部分が右斜めになった形であり、現代モンゴル文語の字形に近い。

表 10 では、「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の母音字<ö><ü>の頭位形 1)の古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語の字形との対応を示した。

表 10. 母音字<ö><ü>の頭位形 1)












	古典式モンゴル文語の字形 	現代モンゴル文語の字形 
「文書 A」	②  ③ 	① 
「文書 B」	①  ③ 	② 
「文書 C」		①  ② 


表 10 に示したように、古典式モンゴル文語の字形と一致するのは、「文書 A」の②、③、


「文書 B」の①、③である。現代モンゴル文語の字形と一致するのは、「文書 A」の①、「文書 B」の②、「文書 C」の①、②である。


例：

「文書 A」に現れる例：


 ösiy\_e(40:6) 「仇」


 ög-güsei (5:2) 「与えなさい」


 ülü(4:7) 「(否定詞)」

 üge(5:6) 「言葉」


「文書 B」に現れる例：


 ürgülji(2:2) 「いつも」

 ürgülji (23:3) 「いつも」



 ögede(27:13) 「向上」

「文書 C」に現れる例：

 üker(1:2) 「牛」

 ög=kü(14:27) 「与える」

頭位形 2)は、ačuy (アチョグ) に gedsü (ゲデス) が連なった字形で、<o><u>の頭位形と同形である。



「文書 A」に現れる字形：① 、② 

「文書 B」に現れる字形：① 


「文書 C」に現れない。

例：

「文書 A」に現れる例：

 ö'rüsiye=jü (3:2) 「愛しんで」  ü'je=be(44:2) 「見た」


「文書 B」に現れる例：

 ö'rüsiye=jü (12:10) 「愛しんで」

中位形には、1) gedsü (ゲデス) と silbi (シルビ) が連なった字形と 2) gedsü (ゲデス) だけからなる字形がある。

古典式モンゴル文語の規範では、1)は第 1 音節に、2)は第 2 音節以降に現れる字形であるが、「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」では、第 1 音節に 1)の字形も 2)の字形も現れ、第 2 音節以降には 2)の字形だけが現れる。ローマ字転写では、第 1 音節に現れる 2)の字形を ö' ü'

と転写する。

中位形 1)は gedesü (ゲデス) と silbi (シルビ) が連なった字形である：

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<ö>と<ü>の頭位形 1)は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

 mön(9:6) 「また」       n'ökür(33:9) 「友達」


中位形 2)は、<o><u>の中位形と同形である：

第 1 音節に現れる例：

「文書 A」に現れる例：

 dö'rben (15:30) 「四」       tü'si=jö(3:2) 「頼って」

「文書 B」に現れる例：



 čü'kegüri (36:9) 「チュケグリ(人名)」




「文書 C」に現れる例：

 dü'čin(48:33) 「四十」       tü'rki=gsen(32:25) 「塗ったもの」

第 2 音節以降に現れる例(ここでは、「文書 A」に現れる例を示す):


 küčün(2:6) 「力」       öči=müi (4:3) 「言う」

なお、子音字<b>に<ö><ü>が連なる場合、第 1 音節では合体字となり、第 2 音節以降では合体字となる。

さらに、子音字<k><g>に<ö><ü>が連なる場合、第 1 音節では合体字となり、第 2 音節以降では合体字となる。合体字は、語末にも現れる。


末位形は 1)子音字<k><g>との合体字と、2)それ以外の子音字に連なる字形がある。


「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の子音字<b>との合体字は末位に現れない。

末位形 1)は子音字<k><g>との合体字である：

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<ö><ü>の末位形 1)は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：


 ög=kü (33:8) 「与える」


 mönggü(37:4) 「銀両」


末位形 2)は、<o> <u>の末位形 2)と同形である：① 、② 、③ 、④ 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<ö><ü>の末位形 2)は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：


 ilegegütü(37:5) 「余りのもの」


 ülü(4:7) 「(否定詞)」

分離形は、末位形と同形であるが語幹末スペースの後に書かれる：  の


「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる母音字<ö><ü>の分離形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

 biden-ü(4:5) 「我々の」

 erten-ü(43:3) 「昔の」







この字形を取るのは、名詞の属格語尾 (-ü) である。

子音字 <k> <g> に <ö> <ü> が連なる単独形の合体字は  であり、「文書 C」に 1 回現れる。

## 2.2.2 子音字の字形

「文書 A」、「文書 B」には<n b q γ k g m l s š t d č j y r ng w ğ>の 19 の子音字が使われる。「文書 C」には、そのほかに、子音字<p>と<f>が現れる。

### (1) 子音字<n>の字形

古典式モンゴル文語および現代モンゴル文語では、子音字 <n> は、母音字の前では点をもつ字形  が現れるが、それ以外（子音字の前、語末）では点をもたない字形  が書かれる。古典式モンゴル文語の子音字<n>の頭位形は 、中位形は 、、末位形は  である。



モンゴル語檔案文書では、母音字の前では点をもつ形と点をもたない形の両方が現れる。音節末（子音字の前と単語末）でも点を持つ形と持たない形の両方が現れる。




ローマ字転写では、母音字の前で点をもたない字形を n' と転写する。音節末(子音字の前、単語末)で点を持つ場合 n" と転写する。




頭位形は、ačuy (アチョグ) の左に点をもつ字形と、ačuy (アチョグ) だけからなる (点

をもたない) 字形の 2 種類がある。

点をもつ字形：

「文書 A」に現れる字形：① 、② 

「文書 B」に現れる字形：① 、② 、③ 

「文書 C」に現れる字形：① 、② 、③ 

モンゴル語檔案文書の子音字<n>の頭位形には、古典式モンゴル文語と同じ字形 ačuy (アチョグ) に点が付いた形の他、それと異なる字体が現れる。それは、書き出し部分の曲がった形であり、現代モンゴル文語の子音字<n>の字形(・→)と一致する。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<n>の頭位形の点を持つ形の古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語との対応を示せば、表 11 の通りである。

表 11. 子音字<n>の頭位形の点をもつ字形



















	古典式モンゴル文語の字形・↓	現代モンゴル文語の字形・→
「文書 A」		①  、② 
「文書 B」	①  、②  、③ 	
「文書 C」	② 	①  ③ 

表 11 に示したように、古典式モンゴル文語と一致するのは、「文書 B」の① 、② 、③ 、「文書 C」の② である。現代モンゴル文語の子音字<n>の字形(・→)と一致するのは、「文書 A」の① 、② 、「文書 C」の① 、③ である。


例：


「文書 A」に現れる例：


 neke=jü(8:3) 「追って」

 nige(13:2) 「一」


「文書 B」に現れる例：


 ner\_e(15:19) 「名前」

 -nai(17:23) 「～の」




 nayaysi(36:4) 「ここへ」




「文書 C」に現れる例：



 nayan(48:16) 「八十」

 nige(24:8) 「一」

点をもたない字形：


「文書 A」に現れる字形：① 、② 、③ 


「文書 B」に現れる字形：① 、② 、③ 


「文書 C」に現れる字形：① 、② 


例：

「文書 A」に現れる例：


 n'oyad (14:6) 「ノヤン達」


 n'er\_e(3:1) 「名前」


 n'ige(13:2) 「一」


 n'aran(42:7) 「太陽」

「文書 B」に現れる例：


 n'igen (1:25) 「一」


 n'oqai (47:10) 「犬」

 n'ige (6:8) 「一」



 n'utuy (27:8) 「土地」

「文書 C」に現れる例：

 N'aiman(1:5) 「ナイマン (地名)」

 n'ige(13:2) 「一」


中位形でも、点をもつ字形と、点をもたない字形が現れる。


点をもつ字形： 、

「文書 B」には、母音字の前で点を持つ形が現れる他、子音字の前でも点を持つ形が現れる。「文書 A」と「文書 C」には、母音字の前で点を持つ形が現れるが、子音字の前で点を持つ形が現れない。ここでは、「文書 B」に現れる例を示す。


例：


子音字の前で点を持つ形の例：


 qoyina(32:10) 「後」

 sana=(26:8) 「思いなさい」

子音字の前で点を持つ形の例：

 en"de(18:14) 「ここ」

 GÜN"ji (33:15) 「公主」

点をもたない字形： 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に同じ形が現れる。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

ende(36:2) 「ここに」      qon'i(15:9) 「羊」

末位形に現れるのは、点を持つ字形と点をもたない字形である。

点を持つ字形は「文書 B」と「文書 C」に現れる。「文書 B」では、点を持つ字形は語幹末と語幹末スペースの前に書かれる。「文書 C」では、点を持つ字形は語中スペース、語幹末スペースの前に現れる。

点を持たない字形は語幹末、語中スペースの前、語幹末スペースの前に現れる。

点を持つ字形：

「文書 A」に現れない。

「文書 B」、「文書 C」に現れる字形：① 、②

例：

「文書 B」に現れる例：

(語幹末に現れる例：)

jin"(33:12) 「ジン(意味不明)」      -iyen"(44:1) 「自分の~を」

(語幹末スペースの前に現れる例：)

qay'an"-I (33:10) 「ハーンの」      kümü'n"-i(33:18) 「人を」

「文書 C」に現れる例：

(語中スペースの前に現れる例：)

(語幹末スペースの前に現れる例：)

qoyin\_a(9:26) 「後」      qorin-a(13:13) 「二十日に」

点を持たない字形：① 、② 、③ 、④ 、⑤ 、⑥ 、⑦

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

ün'en(4:3) 「本当」      dayisun(32:12) 「敵」

qoyin'\_a(4:5) 「後」      olan'-a(40:2) 「大勢に」

古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語の子音字<n>は母音字の前では点を持つ形を持つ。「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の子音字<n>は共通して、点を持つ形と点を持たない形であるが、「文書 C」は「文書 A」と「文書 B」と違って点を持つ割合が大きい。現代モンゴル文語の規範と一番近いのは「文書 C」である。それは、母音字の前の子音字<n>の点を持つ形の割合は半分近くになっている。その比較を表 12 に示した。



表 12. 「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の子音字<n>の母音字の前の字形の比較

	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
点を持つ形	55 回 12%	59 回 5%	973 回 40%
点を持たない形	389 回 88%	1070 回 95%	1434 回 60%

表 12 に示したように、「文書 A」の子音字 n の母音字の前の点を持つ形は 55 回現れ、母音字の前に現れる子音字<n>の 12%を占め、母音字の前で点を持たない形は 389 回現れ、母音字の前に現れる子音字<n>の 88%を占める。「文書 B」の子音字<n>の母音字の前で点を持つ形は 59 回現れ、母音字の前の子音字<n>の 5%を占め、点を持たない形は 1070 回現れ、母音字の前の子音字<n>の 95%を占める。「文書 C」の子音字<n>の母音字の前の子音字<n>の点を持つ形は 973 回現れ、母音字の前の子音字<n>の 40%を占め、点を持たない形は 1434 回現れ、母音字の前の子音字<n>の 60%を占める。

「文書 B」では、中位形において、母音字の前も、子音字の前も点を持つ形が現れる。また、単語末と語幹末スペースの前でも、点を持つ形が現れる。これは、先古典式モンゴル文語の字形と一致する。

## (2) 子音字<b>の字形


古典式モンゴル文語の子音字<b>の頭位形と中位形は 、末位形は  である。


モンゴル語檔案文書の頭位形と中位形は古典式モンゴル文語と同じ形があり、末位形には違うところが見られる。次はモンゴル語檔案文書に現れる子音字<b>の頭位形、中位形、末位形である。

子音字 <b> の頭位形と中位形は同じ形とみなされる： 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<b>の頭位形、中位形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。



頭位形の例：

 basa(6:3) 「また」


 berke(32:7) 「困難な」



中位形の例：





 arban(15:3) 「十の」       ibege=jü(4:9) 「庇護して」




子音字 <b> は母音字の <o> <u> <ö> <ü> と連なって、合体字となる。

子音字 <b> と母音字<o><u>の合体字：頭位、中位、末位で  (bo, bu) である。




「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<b>と母音字<o><u>の頭位形、中位形、末位形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：


 bo|juγ'an(36:3) 「約束」       yabu=jü(36:2) 「行って」  
 qabur(19:3) 「春」       tabu(17:4) 「五」



子音字<b>と<ö><ü>の合体字：頭位で  (bö, bü)、中位で  (bü)。「文書 A」頭位には  (bü') が 1 回現れる。そのほかは、「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる字形が一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

頭位の例：

 bügüde(24:2) 「すべて」       büri(11:1) 「～毎に」  
 bü'güde(37:6) 「すべて」





中位の例：

 Sübüdi(9:1) 「スブディ (人名)」


末位形には  という 2 つの字形が見られる。「文書 A」と「文書 B」には二つの字形が現れ、「文書 C」には 1 つの字形  が現れる。


例：


「文書 A」に現れる例：


 jöb'(42:8) 「正しい」       jöb(32:5) 「正しい」  
 ğalab'(42:7) 「劫」       ğalab(14:8) 「劫」

「文書 B」に現れる例：


 j**öb**'(1:26) 「正しい」


 j**öb**(2:9) 「正しい」

 g**alab**'(12:10) 「劫」

 t**ib** (31:2) 「洲」

「文書 C」に現れる例：

 Čoyiski**b**(29:36) 「チョイスキブ (人名)」

 Dondub(30:43) 「ドンドブ (人名)」















子音字<b>の字形において、注目するのは、末位形である。表 13 で示したように、「文書 A」と「文書 B」には二つの形  と  が現れる。これと違って、「文書 C」では、一つの形  のみが現れる。この形は現代モンゴル文語の子音字 b の末位形の字形()と一致する。

表 13. 子音字<b>の末位形の古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語との対応


	古典式モンゴル文語の字形 	現代モンゴル文語の字形 
「文書 A」		
「文書 B」		
「文書 C」	ない	


### (3) 子音字<p>の字形


古典式モンゴル文語の子音字<p>の頭位形と中位形は  であり、モンゴル語檔案文書ではそれと違う形が「文書 C」に現れ、「文書 A」と「文書 B」に現れない。現代モンゴル文語の子音字<p>の頭位形と中位形は同じく  である。

子音字<p>は頭位形にしか現れない。母音字<a>と<i>の前では子音字<b>の頭位形の字形と同じ字形で現れる：

例：

 pai(4:1) 「牌」

 pi la(32:22) 「皿」

母音字<o>と<u>の前では満洲文字の<po>の字形と同じ字形が現れる：

例：



Ponsuy(22:4) 「ポンソグ (人名)」






puu(37:2) 「銃」

これは満洲語の影響を受けた可能性がある。

子音字<p>はアリガリ (ali γali) 文字に現れ、現代モンゴル文字と同じ形である。それが、モンゴル語檔案文書に使われていないのは、アリガリ (ali γali) 文字の影響を受けていなかったことである。





#### (4) 子音字<q>の字形



古典式モンゴル文語の子音字<q>の頭位形は、中位形は、末位形はである。

モンゴル語檔案文書の子音字 <q> は、音節頭（母音字の前）に現れる。頭位形と中位形は、子音字 <γ> の字形と同じであり、これらを表記で区別することはできない。子音字 <q> は語中スペースの前に現れることがあり、その場合の字形を「末位形」と呼ぶ。これは子音字 <γ> の末位形と同じ形である。

頭位形には「文書 A」と「文書 B」に様々な字体の変型が見られ、「文書 C」の字体の変型が少ない。

「文書 A」に現れる字形：①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨⑩

「文書 B」に現れる字形：①、②、③、④

「文書 C」に現れる字形：①、②

例：

「文書 A」に現れる例：



qan(39:4) 「ハーン」



qola(14:5) 「遠い」



Qalq\_a(43:1) 「ハルハ (地名)」



qay'an(2:2) 「ハーン」



qariy'uča=qu(7:2) 「抵抗する」



qayirala=qula(12:3) 「愛すれば」

「文書 B」に現れる例：



qay'an(1:12) 「ハーン」



qay'an (2:14) 「ハーン」





Qalač'in (9:1) 「ハラチン (地名)」






qay'an(13:1) 「ハーン」

「文書 C」に現れる例：


 quyay(4:2) 「鎧」


 qorin(48:14) 「二十」






中位形は、二つの ačuy (アチヨグ) の左側に二つの点をもつ形と、点をもたない形が見られる：、

点をもつ形は「文書 A」に 1 回現れる。本論文では、母音字の前で点をもつ形を q' と転写する。そのほかは、「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる字形が一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：


 Čaqar(4:3) 「チャハル (地名)」


 bayaq'an(34:3) 「より多く」




末位形は子音字 <q> の末位形と同形である：①、②、③、④、⑤

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字 <q> の末位形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：






 aq\_a(15:24) 「兄」

 Qalq\_a(4:12) 「ハルハ (地名)」

子音字<q>において、「文書 A」には二つの点を持つ形が 1 回現れる。頭位形の字形は先古典式モンゴル文語()、或いは古典式モンゴル文語の字形()と一致する字形が見られ、現代モンゴル文語と同じ字形()が現れない。

### (5) 子音字<q>の字形











古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語では、子音字の <q> と <q'> は、文字の左側の二つの点の有無によって区別される。





古典式モンゴル文語の子音字<q>の頭位形は、中位形は、、末位形は、である。



モンゴル語檔案文書の子音字の <q> と <q'> は同じ形を取り、それらを表記で区別することはできない。次はモンゴル語檔案文書に現れる子音字<q>の頭位形、中位形、末位形である。

頭位形には「文書 A」と「文書 B」に様々な字体の変型が見られ、「文書 C」の字体の変

型が少ない。


「文書 A」に現れる字形：① 、② 、③ 、④ 、⑤ 、⑥ 、⑦ 、⑧ 、⑨ 、  
⑩ 


「文書 B」に現れる字形：① 、② 、③ 、④ 


「文書 C」に現れる字形：① 、② 


例：

「文書 A」に現れる例：


  $\gamma'$ ar(30:6) 「手」


  $\gamma'$ urba(15:13) 「三」


  $\gamma'$ ary'a=ba(4:9) 「出させた」


  $\gamma'$ aĵar-a(9:4) 「土地に」

「文書 B」に現れる例：


  $\gamma'$ ar(29:37) 「手」


  $\gamma'$ urban (6:2) 「三」



  $\gamma'$ ary'a=ĵi(35:7) 「出して」

  $\gamma'$ aĵar-a(61:12) 「土地に」

「文書 C」に現れる例：

  $\gamma'$ uĉin(5:6) 「三十」


  $\gamma'$ ar=ba(14:14) 「出た」

中位形には、二つの ačuy (アチヨグ) の左側に二つの点をもつ形と、点をもたない形が現れる：  


「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字< $\gamma$ >の末位形が一致する。ただ、「文書 A」には、子音字の前で点をもつ形が 2 回現れる。母音字の前で点をもたない字形、および子音字の前で点をもつ字形を  $\gamma'$  と転写する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。


例：

点を持つ字形の例：

 bayil $\gamma$ a= $\gamma$ san(20:5) 「やめさせた」

点を持たない字形の例：

 qa $\gamma$ 'an(3:1) 「ハーシ」


 a $\gamma$ ta(35:3) 「駟馬」

子音字の前で現れる点を持つ形の例：


 inaγ'si (42:8) 「こちらへ」       činaγ'si (42:8) 「あちらへ」

なお、子音字 <γ> は、男性語（すなわち母音字 <a> <o> <u> を含む語）に書かれるが、次の例では女性語（母音字 <e> <ö> <ü> を含む語）に書かれている。ローマ字転写では[!]の記号を付した。

「文書 A」に現れる例：



 degeγsi [!] (16:5) 「上へ」



「文書 B」に現れる例：

 tejiye=γsen [!] (17:20) 「養った」

末位形：

「文書 A」に現れる字形：① 、② 、③ 、④ 、⑤ 、⑥ 

「文書 B」に現れる字形：① 、② 

「文書 C」に現れる字形：① 、② 

上掲のように、「文書 A」と「文書 C」に点を持つ形と点を持たない形が現れる。「文書 B」には点を持つ形が現れない。点を持つ形は語中スペースの前で現れる。語中スペースの前で現れる、つまり、母音字<a>の分離形の前で点をもたない形は γ' と転写する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

 jarlaγ (7:1) 「命令」       joliγ (38:14) 「代替」



 budaγ'\_a (23:5) 「食料」       dayaγ\_a (30:8) 「二歳の馬」

中位形と末位形は点を持つ形が僅かであり、ほとんどの場合は点を持たない形である。点を持つ形は、「文書 A」に 5 回、「文書 B」に 12 回、「文書 C」に 4 回現れる。



子音字 <γ> は、男性語（すなわち母音字 <a> <o> <u> を含む語）に書かれるが、女性語（母音字 <e> <ö> <ü> を含む語）に書かれる場合があり、「文書 A」と「文書 B」の現れている。

## (6) 子音字<k>の字形

子音字 <k> は音節頭（母音字の前）にのみ現れ、末位形はない。頭位形と中位形はすべて子音字 <g> の字形と同じであり、これらを表記で区別することはできない。


古典式モンゴル文語の子音字<k>の頭位形、中位形の形は  であり、現代モンゴル文語の頭位形、中位形の形は  であり、書き出しの部分の字画が見られる形である。次はモンゴル語檔案文書に現れる頭位形と中位形の字形である。


頭位形と中位形は同じ形とみなされる：① 、② 

頭位形では、モンゴル語檔案文書には古典式モンゴル文語の字形と同じ字形②  と現代モンゴル文語と同じ字形①  が見られる。


「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<k>の頭位形と中位形が一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。


頭位形の例：



 ken(14:7) 「誰」

 Kitad(15:6) 「明国」

中位形の例：


 eken'er(41:6) 「妻」

 yakiqu(8:6) 「どうする」


子音字<k>に母音字 <ö> <ü> が連なる場合、頭位では合体字  となり、中位・末位では合体字  となる。「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる合体字が一致するため、ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。


例：


頭位の例： kümün(33:4) 「人」

 köge=jö(10:7) 「追って」

中位の例： čidkür(8:5) 「鬼」

 ire=küle(30:7) 「来るなら」

末位の例： ögkü(33:8) 「与える」

 kür=kü(15:7) 「到着する」

語頭位置の kü が  の字形を取る例が「文書 A」には 2 回現れる (kü' と転写する)。「文

書 B」、「文書 C」に1回ずつ現れる。

「文書 A」に現れる例：

**kü'**r=tügei (3:5) 「至るがよい」 **kü'**cü+ben(12:5) 「力を」

「文書 B」に現れる例：

**Kü'**cün (38:36) 「クチュンを」

「文書 C」に現れる例：

**kü'**kü(10:16) 「フフ (人名)」

子音字<k>において、三つの文献は殆ど一致する。特徴的なのは母音字<ü>との合体字の頭位形には現代モンゴル文語と違った形 である。

#### (7) 子音字<g>の字形

子音字 <g> の頭位形と中位形は子音字<k>と同じ形で、それらを表記で区別することはできない。中位形では、子音字<k>と違って、子音字の前でも現れる。「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<g>の頭位形と中位形は、一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

頭位形の例：

**ger**(15:14) 「家」 **Gegen**(4:2) 「ゲゲン (ハーン)」

中位形の例：

**dege1**(7:3) 「衣服」 **Činggis'**(42:1) 「チンギス (ハーン)」


子音字の前の例：


**tegsi**(4:2) 「平らか」 **ki=gsen**(15:23) 「した」

なお、子音字 <g> は女性語（母音字 <e> <ö> <ü> を含む語）に使われるが、男性語（母音字 <a> <o> <u> を含む語）にも使われている場合がある。そのような場合、ローマ字転写では[!]の記号を付した。





「文書 A」に現れる例：

 čag+tu[!](2:2) 「時に」


 γ'agča[!](33:17) 「一つ」



「文書 B」に現れる例：

 abta=gsan[!](57:2) 「取られた」


 alagda=qa+r[!](38:29) 「殺されると」


「文書 C」に現れる例：


 Age[!](29:72) 「アゲ(人名)」(満洲語の影響を受けたと考えられる)


子音字<g>に母音字 <ö> <ü> が連なる場合、頭位では合体字  となり、中位・末位では合体字  となる。「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<g>と母音字 <ö> <ü>との合体字が一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

頭位の例：


 Güyeng(5:6) 「グイエン (人名)」


 güiče=gsen(2:5) 「成し遂げた」


頭位には  の形を取る 1 例が「文書 B」に現れる。

 gü'm(47:7) 「すべて」







中位・末位の例：




 bügüde(24:2) 「すべて」





 kegüked(30:7) 「子供達」


 degü(2:4) 「弟」

末位形：

古典式モンゴル文語における子音字<g>の末位形は、 である。子音字<g>の末位形において、「文書 A」、「文書 B」には、幾つかの字体が現れる。その中に先古典式モンゴル文語に現れる末位形 () の形と同じ形(「文書 A」の③ 、「文書 B」の④ ) が使われている。「文書 C」の末位形() の形は現代モンゴル文語の子音字<g>の末位形() と一致する。


「文書 A」に現れる字形：① 、② 、③ 


「文書 B」に現れる字形：① 、② 、③ 、④ 


「文書 C」に現れる字形：

例：


「文書 A」に現れる例：


 bičig(27:1) 「文書」


 jüg(38:29) 「方向」


 beleg(40:11) 「贈物」

「文書 B」に現れる例：


 bičig(1:5) 「文書」


 jüg(11:4) 「群」

 bičig(44:2) 「文書」

 bičig(43:3) 「文書」

「文書 C」に現れる例：


 beleg(29:1) 「贈り物」

 beleg(30:1) 「贈り物」

子音字 <g> は女性語（母音字 <e> <ö> <ü> を含む語）に使われるが、男性語（母音字 <a> <o> <u> を含む語）にも使われている場合がある。




子音字 <g> の末位形は「文書 A」に男性語に付き 1 回現れる。

例：



 jarlig[!] (1:1) 「命令」

### (8) 子音字<m>の字形

子音字<m>は、ačuy（アチョグ）の右側に水平から下に向かう字画を加えた形である。頭位形と中位形は同じ形とみなされる。末位形は語中スペースの前にも書かれる。

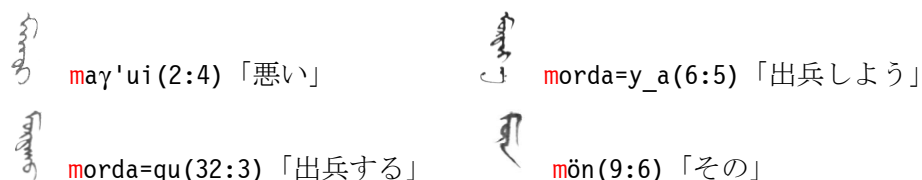
古典式モンゴル文語の子音字<m>の頭位形は 、中位形は 、末位形は  である。次はモンゴル語檔案文書に現れる子音字 <m>の頭位形、中位形、末位形である。


頭位形：① 、② 、③ 、④ 、⑤ 

頭位形には ačuy（アチョグ）の書き出しの部分の曲がった形の字形が多く現れる(① , ②)。これは現代モンゴル文語の子音字<m>の頭位形の字形()と一致する。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<m>の頭位形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

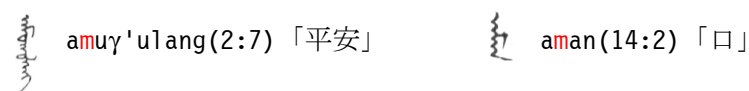
例：






中位形： 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<m>の中位形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：



末位形はループの形によって次のようにいくつかの字体が見られるが、古典式モンゴル文語の字形とほとんど変りがない：① 、② 、③ 、④ 、⑤ 、⑥ 、⑦ 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<m>の末位形は殆ど一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：









次の例では語中スペースの前に末位形が書かれている：





### (9) 子音字<l>の字形

子音字<l>は、ačuy (アチョグ) の右側に水平から上にハネる字画を加えた形である。頭位形と中位形は同じ字形とみなされる。末位形は語中スペースの前にも書かれる。


古典式モンゴル文語の子音字<l>の頭位形は 、中位形は 、末位形は  である。次はモンゴル語檔案文書に現れる子音字 <l>の頭位形、中位形、末位形である。


頭位形： ① 、② 、③ 


頭位形には、数多く現れる形は ačuy (アチョグ) の書き出しの部分が曲がった形である(② )。これは、現代モンゴル文語の子音字<l>の頭位形の字形(  )と一致する。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<l>の頭位形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

「文書 A」に現れる例：


 labda(22:2) 「確かに」


 lang(37:8) 「両」

中位形：

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<l>の中位形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：


 do<sup>l</sup>uy'an(24:7) 「七」


 a<sup>l</sup>a=(8:2) 「殺せ」

末位形：①、②、③、④

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<l>の末位形は一致する。「文書 A」、「文書 B」では、語中スペースの前に末位形が書かれる。「文書 C」には、語中スペースの前では末位形が現れない。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。


例：


 dege<sup>l</sup>(7:3) 「服」


 n'igü<sup>l</sup>(2:5) 「災い」

次の例では語中スペースの前に末位形が書かれている：

 gete<sup>l</sup>\_e(4:4) 「そういったも」




 bayi=ta<sup>l</sup>\_a(12:5) 「～あるのに」



 orki=<sup>l</sup>\_ügei(13:4) 「捨てずに」

 ya<sup>l</sup>\_a(4:5) 「罪」

#### (10) 子音字<s>の字形

子音字の<s>の頭位形と中位形は同形とみなすことができる。

古典式モンゴル文語に現れる子音字の<s>の頭位形と中位形は、末位形はとである。次はモンゴル語檔案文書に現れる子音字<s>の頭位形、中位形、末位形である。



頭位形・中位形：①、②

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<s>の頭位形と中位形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。




頭位形の例：

 sayin(4:4) 「よい」       Sečen(21:5) 「セチェン (ハーン)」

中位形の例：




 esergüle=be(4:7) 「抵抗した」       bos=ču(30:10) 「蜂起して」

末位形には2種類の字形がある。それらはいずれも語中スペースの前に現れる。

末位形 1) : ① 、② 、③ 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<s>の末位形 1)は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。ローマ字転写では、末位形 1)の字形を 's' と転写する。

例：




 ulus'(14:3) 「人々」       ulus'(31:9) 「人々」       es'\_e(15:3) 「(否定詞)」

末位形 2) : 



末位形 2)は、「文書 A」と「文書 B」に現れ、「文書 C」に現れない。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

 jobkis(1:1) 「方位」       es\_e(2:5) 「(否定詞)」

子音字<s>において、「文書 A」、「文書 B」の子音字<s>の末位形には二つの字形  と  が現れ、古典式モンゴル文語と一致する。「文書 C」では、一貫して字形  が現れる。

### (11) 子音字<š>の字形

古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語では、子音字<š>は文字の右側に2つの点を付すことによって子音字<s>と区別される。古典式モンゴル文語の子音字<š>の頭位形と中位形は 、末位形は  である。


モンゴル語檔案文書では、子音字<š>の頭位形と中位形は1)点を持つ字形と、2)点がなく、子音字<s>と同じ形が現れる。モンゴル語檔案文書には末位形が現れない。

「文書 A」の頭位形はすべて2)の点がなく、子音字<s>と同じ形で現れる。中位形は1回だけ点が付される形で現れる。

「文書 B」はすべて点がなく、子音字<s>と同じ形で現れる。


「文書 C」の頭位形と中位形はすべて点を持つ字形で現れる。


頭位形：


1)点を持つ字形：

例：


「文書 C」に現れる例：


 šürü(7:2) 「珊瑚」

 šatu(14:20) 「梯子」


2)点がなく子音字<s>と同じ形：


「文書 A」に現れる例：

 š'asin(42:7) 「宗教」

 š'ajin-i(39:5) 「宗教を」


「文書 B」に現れる例：

 š'abi+n'ar(34:8) 「生徒達」


 Š'amba(38:1) 「シャンバ(人名)」

「文書 C」現れない。

中位形：は右側に 2 つの点を持つ字形で現れる：


1)点を持つ字形：


「文書 A」に現れる例：


 Tangšai(29:01) 「タンシャイ (人名)」

「文書 B」に現れない。


「文書 C」に現れる例：

 Qošau(48:39) 「ホシヨ(人名)」

 Yegšü(14:18) 「イエクシュ(人名)」

2)点がなく子音字<s>と同じ形：




「文書 B」に現れる例：

 boš'uy\_tu(47:14) 「ボシヨグト (人名)」

子音字<š>において、「文書 A」では二つの形、一つは点を持たない形、も一つは点を持つ形が現れる。「文書 B」ではすべて点を持たない形で現れる。「文書 C」では子音字<š>は現代モンゴル文語の形と同じく、すべて点を持つ形で現れる。

(12) 子音字<t>の字形

子音字 <t> は、音節頭（母音字の前）にのみ現れ、末位形はない。


古典式モンゴル文語に現れる子音字<t>の頭位形は 、中位形は 、末位形は  である。N.Poppe(1954)は、子音字<t>と<d>は、同じ字形を持つとしている。次はモンゴル語檔案文書に現れる子音字<t>の頭位形、中位形である。


頭位形：① 、② 

右の字体は、「文書 A」に現れ、満洲文字の字形を思わせる。tere「その」という語に多く見られる。


例：


「文書 A」に現れる例：

 tngri(4:3)「天」


 tere(33:21)「その」


「文書 B」に現れる例：

 tngri(3:3)「天」


 tere(18:10)「その」

「文書 C」に現れる例：



 tosu(5:13)「油」

 Tümed (17:7)「トメド(地名)」



中位形：① 、② 、③ 、④ 

これらの字体の中では、④  は、「文書 B」に現れる形であり、先古典式モンゴル文語の字形と一致する。


「文書 A」に現れる例：

 itegeltü(4:11)「信頼すべき」  ab=tuγ'ai(38:17)「取るがよい」



「文書 B」に現れる例：



 itegeltü(13:7)「信頼される」  abta=ju (19:24)「取られて」

「文書 C」に現れる例：



 qota(1:5)「城」  uy'uta (5:3)「袋」











接尾辞頭の字形とローマ字転写：

1)形容詞形成語尾   のローマ字転写

名詞に接尾辞 tu/tü がついて「～をもつ」という意味の形容詞がつくられる。この語尾は語幹から離して書かれる場合（分綴）には   という形で、語幹に連ねて書かれる場


合（連続）には  という形で現れる。


形容詞形成語尾（「～をもつ」の意）が分綴される場合、ローマ字転写では、字形を区別するために、 を \_tu/\_tü と転写し、 を \_t'u/\_t'ü と転写する。ローマ字転写で「\_」（アンダースコア）を用いるのは、これが曲用語尾でなく、ひとつの単語を「語中スペース」で分けて綴っているとみなしていることによる。


「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」には、 \_tu/\_tü と  \_t'u/\_t'ü の二つの字形が現れる。「文書 A」には  \_tu/\_tü は 25 回、 \_t'u/\_t'ü は 4 回現れる。「文書 B」には  \_tu/\_tü は 52 回、 \_t'u/\_t'ü は 14 回現れる。「文書 C」には  \_tu/\_tü は 22 回、 \_t'u/\_t'ü は 318 回現れる。「文書 A」、「文書 B」には、 \_tu/\_tü の字形が多く現れ、「文書 C」には  \_t'u/\_t'ü の字形が多く現れる。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。


例：


 の例：

 sedkil\_tü (4:2) 「心を持つ」




 yala\_tu (15:9) 「罪ある」


 の例：

 tamay'\_a\_t'u (41:3) 「印璽を持つ」


 emegel\_t'ü (41:6) 「鞍を持つ」


## 2) 与位格語尾 のローマ字転写


与位格語尾（「～に、～へ、～で」の意）は、古典式モンゴル文語および現代モンゴル語の規範に準じて、子音字 <b> <d> <g> <γ> <r> <s> で終わる語幹に付く場合は、接尾辞頭の子音は <t> とみなす。<t> の文字が  の字形である時は <t> で転写し、 の字形である時は <t'> で転写する。「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」には共通して、与位格語尾 


   が現れる。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。


例：


 γ'aġar-tu (4:11) 「地に」


 ger-tü (15:15) 「戸に」

 ulus'-tur (43:7) 「国に」




 jüg-tür (38:31) 「方角に」



 qon'uγ-t'u (41:4) 「宿泊に」

 čerig-t'ü (12:6) 「軍に」




 ulus'-t'ur (43:2) 「国に」



子音字<t>において、「文書 A」と「文書 B」の頭位形と中位形の字体に幾つかの形が現れる。「文書 B」には先古典式モンゴル文語と同じ字形  が使われている。「文書 C」の頭位形と中位形には殆ど 、 が現れる。

形容詞形成語尾の字形では、「文書 A」と「文書 B」には  の形が多く現れるが、「文書 C」には  の形が多く現れる。

### (13) 子音字<d>の字形

古典式モンゴル文語では、子音字<d>は子音字<t>と同じ字形を持ち、頭位形は 、中位形は 、末位形は  である。次はモンゴル語檔案文書に現れる子音字<d>の頭位形、中位形、末位形の字形である。

頭位形： ()、










()は、「文書 A」に現れ、満洲文字の字形を思わせる。dügüreng と Dung という語（いずれも人名）に使われる。 は「文書 B」と「文書 C」に現れ、いずれも人名に使われる。 は古典式モンゴル文語で頭位形に現れない。表 13 に示したように現代モンゴル文語と一致する。


表 13. 子音字<d>の頭位形の比較

古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書	現代モンゴル文語
	 	 



例：

「文書 A」に現れる例：

 **Dung**<sup>^</sup>dayičing(30:2) 「ドン・ダイチン (人名)」


 **do**luy'an(21:3) 「七」


「文書 B」に現れる例：


 **Sün**<sup>^</sup>dügüreng(20:24) 「スンドグレン(人名)」  **dergede** (19:30) 「傍」


 **do**luy'an(24:7) 「七」  **D'**asi(51:10) 「ダシ(人名)」

「文書 C」に現れる例：






 **do**luy'an(5:8) 「七」

 **da**qu(5:5) 「革製コート」


 Dorji (17:6) 「ドルジ(人名)」


 D'iwa (49:1) 「ディワー(人名)」


中位形には、1)音節頭（母音字の前）に現れる字形と 2)音節末（母音字の後、子音字の前）に現れる字形がある。



中位形 1)は、音節頭（母音字の前）に現れる：① 、② 、③ 。字体③ は、「文書 B」に現れる形であり、先古典式(ウイグル式)モンゴル文語に現れる字形()と一致する。そのほかの字形は、「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に共通して現れる字形である。ここでは、「文書 B」に現れる例を示す。

例：


 adali (61:10) 「同じ」


 degedü (43:12) 「上の」


 dergede (19:30) 「傍」

中位形 2)は、子音字の前に現れる。gedesü (ゲデス) と ačuy (アチョグ) が連なった形と中位形 1)と同じ形が現れる：① 、② 。前者は、「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に共通して現れる形であり、後者は「文書 B」に 3 回現れる。ここでは、「文書 B」に現れる例を示す。


例：

 üdter (47:12) 「直ちに」

 sedkil (43:10) 「心」


 teDkü= (43:18) 「援助せよ」


末位形には 2 種類の字形がある。


末位形 1) : 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる末位形 1)は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：


 qad (4:2) 「ハーン達」

 n'oyad (16:3) 「ノヤン達」


末位形 2)は少数の単語に書かれる字形である：

この字形は古典式モンゴル文語に現れない字形である。末位形 2)は D (大文字) で転写する。


「文書 A」に現れる例：


 eD(43:7) 「財」

「文書 B」に現れる例：

 eD(5:17) 「財」

「文書 C」に現れる例：

 eD(10:16) 「財」

 deD(17:9) 「副」








子音字<d>の末位形の字形を表 14 に示したように、頭位形には、古典式モンゴル文語にない字形が現れる。この字形は現代モンゴル文語に現れる()と一致する。


表 14. 子音字<d>の末位形の古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語との対応

古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書	現代モンゴル文語
		


与位格語尾頭の字形とローマ字転写：


与位格語尾  のローマ字転写


与位格語尾（「～に、～へ、～で」の意）は、古典式モンゴル文語および現代モンゴル語の規範に準じて、母音字および子音字 <l> <m> <n> <ng> で終わる語幹に付く場合、接尾辞頭の子音は <d> であるとみなす。<d> の文字が  の字形である時は、<d> で転写し、 の字形である時は <d'> で転写する。「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」には共通して、


与位格語尾  が現れる。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：



 morin-du(41:7) 「馬に」

 qay'an-d'u(4:10) 「ハーンに」



 Qalq\_a-dur(46:3) 「ハルハに」



 Jjaq\_a-d'ur 「境界に」

#### (14) 子音字<č>の字形



現代モンゴル文語と古典式モンゴル文語では、子音字 <č> の頭位形と中位形は、左側の字画が角ばっていて ()、子音字 <j> の中位形は、左側の字画に角が無い () ことが二つの文字を区別する「弁別的特徴」となっている。



子音字 <č> は音節頭（母音字の前）にのみ現れ、末位形はない。次はモンゴル語檔案文書に現れる字形である。

頭位形と中位形には 、 両方の形が現れる。

「文書 A」では、 は 33 回現れ、子音字 č の 6% を占め、 は 555 回現れ、子音字

č の 94%を占める。

「文書 B」におけるモンゴル語檔案文書では  č は 34 回現れ子音字 č の 3%を占め、 č' は 1135 回現れ、子音字 <č> の 97%を占める。

「文書 C」では  č は 486 回現れ、子音字 <č> の 54%を占め、 č' は 421 回現れ、子音字 <č> の 46%を占める。












三つの文献での二つの字形  č と  č' の現れる回数と占める割合を表で示せば、表 15 のようであり、「文書 A」と「文書 B」ではの  č の形が僅かである。「文書 C」では二つの形が半分半分を占め、 č の形が多く現れ、子音字 <j> との区別が生じていることが分かる。




表 15. 「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の子音字 <č> の字形

	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
 č	33 回 6%	34 回 3%	486 54%
 č'	555 回 94%	1135 回 97%	421 46%





頭位形と中位形の字体：① 、② 、③ 、④ 、⑤ 、⑥ 、⑦ 

頭位形の例：


「文書 A」に現れる例：

 č'erig(4:8) 「軍」  č'erig(26:9) 「軍」  čay'aġa(38:3) 「法」

「文書 B」に現れる例：





 č'erig(4:8) 「軍」  č'erig(26:9) 「軍」  
 č'aqar(6:7) 「チャハル(地名)」  č'aqar(6:12) 「チャハル(地名)」

「文書 C」に現れる例：



 č'erig(9:8) 「軍」  č'erig(15:1) 「軍」

中位形の例：



「文書 A」に現れる例：

 bič'ig(47:2) 「文書」  bič'ig(31:1) 「文書」  
 Qorč'in(5:1) 「ホルチン(地名)」  Qarač'in(30:4) 「ハラチン(地名)」

「文書 B」に現れる例：

 Jürčed(24:16) 「ジュールチェド(部族名)」  
 bič'ig(28:2) 「文書」

「文書 C」に現れる例：

 bič'igtü(20:15) 「ビチグト(人名)」  bičigtü(26:9) 「文字を持つ」

### (15) 子音字<j>の字形

子音字 <j> は、音節頭（母音字の前）にだけ現れる。語中スペースの前に現れるのは j\_a 「～だろう」という 1 語だけである。

頭位形は 2 種類の形で現れる： ① と ④。④ は「文書 C」に 3 回現れる。ここでは、④ を j' と転写する。

例：




「文書 A」に現れる例：

 Jarlay(38:1) 「命令」  jil-ün(16:1) 「年の（属格形）」

「文書 B」に現れる例：







 Jarlay(23:1) 「命令」  jil (10:1) 「年」

「文書 C」に現れる例：

 Jarlay(17:2) 「命令」  jil (1:1) 「年」  
 j'es(3:7) 「銅」


中位形は子音字 <č> の中位形と同じだが、左側の字画が角ばっている字体は少ない：


① 、② 、③ 、④ 、⑤ 、⑥  j'。


「文書 A」では⑤  と⑥  j' の形は見られる、「文書 B」には⑤  と⑥  j' の形が見られる、「文書 C」では⑥  が見られる。中位形に現れる⑤  は j' で転写する。


例：

「文書 A」に現れる例：


 üj<sub>e</sub>=be(46:1) 「見た」


 kelelče=jü(12:7) 「話し合って」


 ire=jü(10:9) 「来て」


 olja(38:37) 「獲物」


「文書 B」に現れる例：


 üj<sub>e</sub>=jü(54:4) 「見て」

 kelelče=jü(12:12) 「話し合って」


 ire=jü(23:16) 「来て」


 ge=ji(18:7) 「～して」

 a=j'am(56:12) 「～である？」


 ge=ji(52:15) 「～して」

「文書 C」に現れる例：

 üj<sub>e</sub>=jü(48:9) 「見て」


 Dorji(17:7) 「ドルジ(人名)」


末位形：① 、② 

左側の字体は、子音字 <y> の末位形と同形であるが、②  は子音字 <j> の頭位形が中断しているように見える。「文書 A」と「文書 B」に現れ、「文書 C」に現れない。


例：


「文書 A」に現れる例：

 j\_a(44:3) 「～だろう」



 j\_a(28:4) 「～だろう」

「文書 B」に現れる例：

 j\_a(13:40) 「～だろう」



 j\_a(51:13) 「～だろう」



「文書 C」に現れない。

子音字<j>において、中位形では、「文書 A」の子音字<j>の字形は  であり、「文書 B」、「文書 C」では少数だが、字形  も使われる。

### (16) 子音字<y>の字形





子音字 <y> は、語中スペースの前に現れる場合は末位形となる。

古典式モンゴル文語の子音字<y>の頭位形と中位形は 、末位形は  である。

頭位形は2種類の字形が見られる。ひとつは、silbi (シルビ) で、もうひとつはその先端が上にハネている形である：① 、② .




右の形は「文書 A」、「文書 C」に現れ、「文書 B」に現れない。それは、現代モンゴル文語の字形と一致する。表 16 は古典式モンゴル文語、モンゴル語檔案文書、現代モンゴル文語の子音字 <y> の頭位形の比較である。

表 16. 子音字 <y> の頭位形の比較

古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書	現代モンゴル文語
	 	

例：

「文書 A」に現れる例：


 yay'aki=qu(5:1) 「どうする」  yal\_a(4:5) 「罪」  yala(38:19) 「罪」

「文書 B」に現れる例：

 yay'un(13:13) 「何」  yeke(22:5) 「大きい」

「文書 C」に現れる例：


 n'oyan(14:15) 「ノヤン」  yay'un(36:33) 「何」

中位形は頭位形と同形であるが、先端がハネている字体は見られない：

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字 <y> の頭位形、中位形は一致する。ここでは「文書 A」に現れる例を示す。

例：

 n'oyan(38:16) 「ノヤン」  eyin(39:8) 「このように」



末位形は、語中スペースの前に書かれる：

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字 <y> の末位形は一致する。ここでは「文書 A」に現れる例を示す。


例：

 bey\_e(38:17) 「体」  yabu=y\_a(39:8) 「行こう」

### (17) 子音字<r>の字形

古典式モンゴル文語の子音字<r>の頭位形と中位形は 、末位形は  である。


子音字<r>の語頭形、中位形、末位形が現れる。末位形は語中スペースの前にも現れる。

頭位形：

「文書 A」、「文書 B」には頭位形が現れない。「文書 C」には現れる。

例：



「文書 C」に現れる例：



 Rabjamba(19:16) 「ラブジャムバ (人名)」

中位形：① 、② 、③ 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<r>の中位形は一致する。ここでは「文書 A」に現れる例を示す。

例：

 bari=ju(38:14) 「捕えて」       jarlay(38:1) 「命令」

末位形：① 、② 、③ 

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<r>の末位形は一致する。ここでは「文書 A」に現れる例を示す。



例：






 qoyar(38:21) 「二」       qoyar(9:1) 「二」  
 ür\_e(3:3) 「子供」       γ'ajar-a(9:4) 「土地に」

最後の 2 例では、語中スペースの前に末位形が書かれている。

### (18) 子音字<ng>の字形




子音字 <ng> の字形は子音字<n>と子音字<g>の連なった形である。音節頭 (母音字の前) には立たず、頭位形はない。

古典式モンゴル文語の子音字<ng>の中位形は 、末位形は  である。次はモンゴル語檔案文書に現れる子音字<ng>の中位形と末位形の字形である。





中位形には 2 種類の形が現れる：① 、② 。①  は「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に共通して現れる形であり、②  は「文書 B」に見られる形である。 は ng" で転写する。ここでは、「文書 B」に現れる例を示す。










例：





 möngke(1:2) 「永遠」     
  tengri(43:9) 「天」  
 Geng"ge1(33:15) 「ゲンゲル(人名)」

末位形には文献によって様々な字形が見られる。

「文書 A」に現れる字形：① 、② 、③ 、④ 



「文書 B」に現れる字形：① 、② 、③ 、④ 、⑤ 、⑥ 

「文書 C」に現れる字形：

「文書 A」と「文書 B」には、様々な変型(variant)が現れ、「文書 B」には先古典式モンゴル文語と近い字形⑤ も使われる。「文書 C」には一つの形 が現れ、これは現代モンゴル文語 ()や古典式モンゴル文語に近い()。

例：


「文書 A」に現れる例：

 amuy'u1ang(39:1) 「平和」     
  Dung^dayiç'ing(30:2) 「ドン・ダイチン(人名)」


「文書 B」に現れる例：

 amuy'u1ang(39:1) 「平和」     
  Qung(37:4) 「ホン(人名)」


 tabunang(44:2) 「額駙」     
  Qung(17:5) 「ホン(人名)」

 tabun^ung"(33:4) 「額駙」

「文書 C」に現れる例：

 tabun'ung(17:4) 「額駙」     
  wang(18:8) 「王」

### (19) 子音字<w>の字形

古典式モンゴル文語の子音字<w>の頭位形と中位形は  であり、末位形はない。

モンゴル語檔案文書の子音字<w>には頭位形、中位形、末位形が現れる。末位形は語中スペースの前にも現れる。

頭位形と中位形の字形は同じ字形で現れる：

頭位形は「文書 C」に現れ、「文書 A」と「文書 B」に現れない。

頭位形の例：

「文書 A」に現れない。

「文書 B」に現れない。

「文書 C」に現れる例：

wang(18:8) 「王」

Wandan(28:32) 「ワンダン(人名)」

中位形の例：

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる中位形は一致する。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

tawar(43:7) 「財」

suwasdi(39:1) 「繁栄」

末位形はであり、「文書 B」と「文書 C」に現れ、「文書 A」に現れない。「文書 C」では語中スペースの前に現れる。

例：

「文書 B」に現れる例：

irw(43:9) 「予兆」

「文書 C」に現れる例：


Diw\_a(49:1) 「ディワー(人名)」

「文書 C」では子音字<w>は頭位形、中位形、末位形が現れ、その字形は現代モンゴル文語の字形と一致する。現代モンゴル文語の子音字<w>の頭位形と中位形はであり、末位形はである。表 17 に示したように、古典式モンゴル文語には末位形が現れないが、モンゴル語檔案文書には、現代モンゴル文語のように末位形が現れる。



表 17. 子音字<w>の末位形の比較

古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書	現代モンゴル文語
なし		

(20) 子音字<ḡ>の字形

古典式モンゴル文語の子音字<ḡ>の頭位形と中位形は  である。

モンゴル語檔案文書の子音字 <ḡ> の字形は、子音字 <k> <g> の字形と同じ字形とそれと違う形の 2 種類が現れる。頭位形と中位形が現れる。

頭位形・中位形：  (ḡa)、 (ḡa)












「文書 A」と「文書 B」には  (ḡa) が現れ、 (ḡa) が現れない。「文書 C」には  (ḡa) と  (ḡa) の両方が現れ、 (ḡa) の形がより多く現れる。表 18 は子音字<ḡ>の「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる比較である。


表 18. 子音字<ḡ(ḡa)>の「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる字形

「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
		 


「文書 C」に現れる  (ḡa) は古典式モンゴル文語と異なり、現代モンゴル文語の子音字<ḡ>の字形 ()<sup>11</sup>と一致す。

頭位形の例：


「文書 A」に現れる例：



 ḡaḷab' (42:7) 「劫」

「文書 B」に現れる例：

 ḡaḷab' (12:10) 「劫」


「文書 C」に現れる例：

 ḡarm\_a (12:2) 「ガルマ(人名)」

 ḡabju (20:15) 「ガブジョ(人名)」  ḡarm\_a (21:2) 「ガルマ(人名)」


中位形の例：

「文書 A」に現れる例：


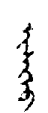
 mangḡalam (40:11) 「マンガラム (吉祥成就)」

<sup>11</sup> 《蒙汉词典》(1999) 1410 頁。




「文書 B」に現れる例：

 mangġalam(50:8) 「マンガラム (吉祥成就)」

「文書 C」に現れる例：


 Dusġar(32:79) 「ドスカル (人名)」       Isġab(32:78) 「イスカブ(人名)」

### (21) 子音字<f>の字形

古典式モンゴル文語には子音字<f>が現れない。現代モンゴル文語の子音字<f>の頭位形、中位形は  である。母音字<o><u><ö><ü>と合体字になる場合は  (末位形の母音字<ö><ü>と合体字は  )である。


モンゴル語檔案文書には、子音字<f>の頭位形と中位形が現れる。これらの字形は子音字<w>の頭位形と中位形と同じ形で現れる。

子音字<f>は「文書 C」に現れ、「文書 A」と「文書 B」に現れない。


頭位形：




例：

 fila(45:17) 「皿」       fü(17:4) 「府」

中位形：

例：

 efü(1:5) 「額駙」

モンゴル語檔案文書に現れる子音字<f>の頭位形と中位形は古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語に現れない字形である。この字形は満洲文字の影響を受けたと考えられる。満洲文字には  fi  fo  fo がある。

子音字<f>は、「アリガリ(alı ġali)」文字にあり、現代モンゴル文語と同じ形を持つ。モンゴル語檔案文書はまだ、その影響を受けていないことが分かる。

## 2.3 まとめ

本章では、古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書の字形を比較すると、モンゴル語檔案文書には、古典式モンゴル文語の字形と異なる母音字と子音字の字形が多く現れる。その古典式モンゴル文語と異なる母音字と子音字の字形は、少数の先古典式モンゴル文語の字形と一致する字形があるほか、大多数の字形は現代モンゴル文語の字形と一致する。

これにより、モンゴル語檔案文書に使われたモンゴル文語は古典式モンゴル文語ではないと考えられる。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の三つの檔案文書のモンゴル文字の字形を比較することにより、いずれも政治的やり取りの中で作成された檔案文書であるが、清国が成立以後の行政機関に作成された檔案文書には、古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範に近い字形が見られ、規範化が進んでいることが分かった。しかし、「文書 C」は、『蒙古学百科全書(語言文字卷)』(2004)に述べているように、その中で使われたモンゴル文語は「古典式モンゴル文語」が用いられたとは言いがたい。なぜなら、子音字<p>と<f>は「アリガリ(a li ya li)」文字にあるが、その字形ではなく、満洲文字で表記されている。

母音字の頭位形において、母音字<a> <e> <i> <o> <u> <ö> <ü>の頭位形は、 ačuy (アチョグ) に他の字画を付け加えた形である。モンゴル語檔案文書には、ačuy (アチョグ) の書き出しの部分が曲がっているかどうか、また、曲がる度合いによって様々な字体が見られる。古典式モンゴル文語の頭位形の ačuy (アチョグ) はこの 字体であり、現代モンゴル文語の頭位形の ačuy (アチョグ) の書き出しの部分が曲がっている字体()である。モンゴル語檔案文書には、古典式モンゴル文語の字形と一致する字形が現れるほか、現代モンゴル文語と一致する字形が現れる。

母音字<a><e>の分離形には、様々な変型(variant)が現れ、「文書 A」と「文書 B」の字形には先古典式モンゴル文語の字体()と同じ字体が見られるが、「文書 C」に現れない。

子音字の古典式モンゴル文語と異なる字形は、子音字<n>、<m>、<l>の頭位形、子音字<b>の末位形、子音字<γ>、子音字<k><g>の頭位形、子音字<g>の末位形、子音字<d>の頭位形と末位形、子音字<y>、子音字<ng>の末位形、子音字<w>の末位形、子音字<ğ>に現れる。この中では、子音字<γ>の字形は、先古典式モンゴル文語と一致し、点を持たない字形で現れる。そのほかはの古典式モンゴル文語の字形と異なる形は現代モンゴル文語と一致する。例えば、モンゴル語檔案文書に現れる子音字<n>の頭位形は古典式モンゴル文語の()と比べて、ačuy (アチョグ) の書き出しの部分が曲がっている字体が多く現れる。これは現代モンゴル文語の子音字<n>の頭位形の字形と一致する。子音字<m>、<l>の頭位形にもこれと同じ現象がある。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の子音字の字形を比較すると「文書 C」には、古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範に近い。例えば、子音字<n>の頭位形において、「文書 A」では点を持つ形 は 12%を占め、点を持たない形 は 88%を占める。「文書 B」では点を持つ形 は 5%を占め、点を持たない形 は 95%を占める。この二つの文献では点を持たない形が圧倒的に多く現れる。「文書 C」には母音字の前で点を持つ形が 40%、点を持たない形が 60%である。「文書 C」には、上の二つの文献と比べると点を持つ形がよ

り多く使われていることが分かる。また、子音字<ᠰ>の字形は、「文書 C」では、すべて点を持つ形で現れ、古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語と一致する。

### 第3章 モンゴル語檔案文書の文法的語尾の特徴

#### 3.1 問題の所在

古典式モンゴル文語の文法的語尾とモンゴル語檔案文書の文法的語尾を比較すると、モンゴル語檔案文書には、古典式モンゴル文語の規範からはずれる文法的語尾が現れる。本章では、これらの古典式モンゴル文語の規範からはずれた語尾はどんな語尾であり、それらの語尾が現れた原因を検討する。

古典式モンゴル文語は N.Poppe の *Grammar of Written Mongolian*(1954) を参考にし、現代モンゴル文語は清格爾泰の『蒙古語語法』を参考にする。

「文書 A」に現れる文法的語尾の特徴を投稿論文『満文原檔』所収モンゴル語文書の文法的語尾の特徴にて、検討している。ここでは、それに、「文書 B」、「文書 C」に現れる文法的語尾を付け加えて、モンゴル語檔案文書の文法的特徴を明らかにする。

#### 3.2 名詞の曲用語尾

古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書の名詞の曲用語尾を比較すると、格語尾と所属語尾に相違点が多く現れる。表 19 は古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる名詞の曲用語尾の比較である。モンゴル語檔案文書の格語尾において、属格、対格、与位格、造格、奪格、共同格には、古典式モンゴル文語にない語尾、あるいは語幹末字の種類による使い分けが異なる語尾が現れる(表では網かけをした箇所)。モンゴル語檔案文書の所属語尾において、再帰所属語尾と人称所属語尾に古典式モンゴル文語と異なる語尾が現れる(表では網かけをした箇所)。

表 19. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書の名詞の曲用語尾の比較

		語幹末字	古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書
格語尾	属格	子音字<n>		-u/-ü (+u/+ü)
			なし	-I(+I), -nai/-nei (-n'ai/-n'ei)
		<n>以外の子音字		-un/-ün
			なし	-Yin, +din, -n'i
		母音字		-yin (+yin)
			なし	-ni
	対格	母音字		-yi
			なし	+yi+gi
			なし	-i, -gi
		子音字		+i_yi, +i_gi
なし	-yi			
			-ni/-n'i	

				-i	
与位格	子音字 b、g、γ、r、s、d		-tur/-tür	ᠲᠦ(-tu/-tü, -d'u/-d'ü) ᠲᠦ(-t'u/-t'ü, -du/-dü)	
		母音字と子音字 n、m、l、ng	-dur/-dür	ᠳᠦ(-tur/-tür, -d'ur/-d'ür) ᠳᠦ(-t'ur/-t'ür, -dur/-dür)	
造格	母音字		-bar/-ber	(+bar/+ber)	
	子音字		-iyar/-iyer		
奪格	語幹末字と関係ない			-ača/-eče <sup>12</sup>	
		なし		+ča/+če、-n'asa、 -teče/-t'eče/+teče、+γ'ača、+se	
共同格	語幹末字と関係ない		-luγ_a/-lüge	-luγ'_a/-luγ'a	
		なし		-la/-le(+la/+le)、 -tai/-tei(-t'ai/-t'ei)	
再帰所属語尾	語幹末字と関係ない			-yuγan(-yuγ'an)	
		-yügen		なし	
	母音字			-ban/-ben	(+ban/+ben)
		なし			-gen、-iyan/-iyen
子音字			-iyan/-iyen	(+iyan、+yan)	
所属語尾	第1人称	単数		minü(min'ü)	
			なし		mini/min'i
		複数		manü	なし
			なし		biden-ü、 biden-I(biden'+I)、man'+I
	第2人称	単数		činü(čin'ü)	
			なし		čin'i/čini
		複数		tanu(tan-u)	
			なし		tan'+I/tan+I/tan-I
第3人称	単数		inü	ni/n'i、an'u、in'ü	
	複数		anu		

次に、モンゴル語檔案文書の格語尾と所属語尾に古典式モンゴル文語と異なる語尾、あるいは異なる語幹末字の種類による使い分けを持つ語尾が現れた原因について検討する。

<sup>12</sup> 名詞の曲用語尾と動詞の活用語尾によって、子音字<č>を含む語尾を便宜のため、すべてčで転写する。字形の区別を例にだけ示すようにした。



### 3.2.1 格語尾

#### (1) 属格語尾

古典式モンゴル文語の属格語尾には語尾-u/-ü、-un/-ün、-yin の3種類がある。子音字<n>で終わる語幹に語尾-u/-ü が付き、<n>以外の子音字で終わる語幹に語尾-un/-ün が付き、母音字で終わる語幹に語尾-yin が付く。この使い分けは、現代モンゴル文語の正書法の規範としても確立している。

モンゴル語檔案文書の属格語尾には、-u/-ü、-un/-ün、-yin、-i、-nai/-nei (-n'ai/-n'ei)、+din、-ni/-n'i の7種類の語尾が現れる。この中では語尾-u/-ü、-un/-ün、-yin は古典式モンゴル文語に現れる属格語尾と同じ形の語尾であり、語尾-i、-nai/-nei (-n'ai/-n'ei)、+din、-ni/-n'i は古典式モンゴル文語に無い語尾である。

モンゴル語檔案文書に現れる属格語尾の-u/-ü、-un/-ün、-yin は古典式モンゴル文語の属格語尾と同じ形を持つ語尾であるが、使われる状況は古典式モンゴル文語の使い方と違うところがある。

-u/-ü は古典式モンゴル文語と同じ使い方を持ち、子音字<n>で終わる語幹に付く。

-un/-ün はまた古典式モンゴル文語と同じ使い方を持ち、<n>以外の子音字で終わる語幹に付く。



-yin は古典式モンゴル文語と違って、母音字で終わる語に付く場合があれば、語尾-un/-ün と同じく<n>以外の子音字で終わる語に付く場合もある。即ち、<n>以外の子音字で終わる語幹に語尾-un/-ün と語尾-yin が区別なく使われる。なお、「文書C」には語尾-un/-ün は子音字<m>と<ng>で終わる語幹に付かなく、専ら語尾-yin が付く。-yin は子音字で終わる語幹に付く場合-Yin と転写する。ここでは、「文書A」に現れる例を示す。

例：

語尾-u/-ü の例：


 kümün-ü (39:8) 「人の」       qay'an-u (7:1) 「皇帝の」


語尾-un/-ün の例：


 ayil-un (15:13) 「戸の」       čaqaar-un (3:1) 「チャハルの」


語尾-yin の例：

母音字で終わる語幹に付く(語幹と連ねて書かれる場合がある。この場合+yin と転写する。以下同じ。)例：


 tngri-yin(4:1) 「天の」


 manju-yin(4:10) 「満洲の」

 sara-yin(19:5) 「月の」

 törü-yin(40:6) 「政道の」

子音字で終わる語幹に付く例：

 ayil-Yin(38:21) 「戸の」

 Č'aqar-Yin(31:3) 「チャハルの」

モンゴル語檔案文書には古典式モンゴル文語に現れない属格語尾 -i、  
-nai/-nei(-n'ai/-n'ei)、+din、-n'i が現れる。


-i は子音字<n>で終わる語幹に付く。この場合は対格語尾の -i と区別して、-I と転写する。代名詞に付く場合は語幹と連ねて書かれる場合が多い。この場合は+I に転写する。語尾 -I(+I) の使い方は語尾 -u/-ü の使い方と同じ。しかし、三つの檔案文書にわたって語尾 -I(+I) の出現回数は語尾 -u/-ü の出現回数よりはるかに上回る。その比較は表 20 の通りである。


表 20. モンゴル語檔案文書に現れる語尾 -u/-ü と語尾 -I(+I) の出現回数：


		「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
子音字<n>に終わる	-u/-ü(+u/+ü)	47 回	92 回	53 回(1 回)
語幹に付く属格語尾	-I(+I)	129 回(16 回)	224(62 回)	463(1 回)


ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

 kümün-I(17:3) 「人の」

 qayan-I(18:1) 「皇帝の」

 man'+I(5:6) 「我らの」

 tan'+I(13:3) 「汝らの」

-nai/-nei(-n'ai/-n'ei) は子音字<n>で終わる語幹に付く。-nai/-nei は子音字<n>に点が付く形、-n'ai/-n'ei は子音字<n>に点が無い形である。-nai/-nei(-n'ai/-n'ei) が語幹に連ねて書かれる場合は、+nai/+nei(+n'ai/+n'ei) と転写する。また、kegüken'ei 「子供の」、manai 「我々の」、qosiy'unai 「旗の」、gegesin'ei 「価値がないものの」という語が現れる。これらの語の語幹はそれぞれ、kegüken 「子供」、man 「我々」、qosiy'un 「旗の」、gegesin 「価値がないもの」であるため、語尾 -nai/-nei(-n'ai/-n'ei) の<n>は脱落したと見なし、それぞれ、kegüken'+(n)ei、man+(n)ai、qosiy'un+(n)ai、gegesin+(n)'ei と転写する。

例：

「文書 A」に現れない。

「文書 B」に現れる例：

kegüken+(n')ei (58:18) 「子供の」

man+(n)ai (47:3) 「我々の」

qosiy'un+(n)ai (60:14) 「旗の」

qay'an-nai (17:23) 「ハーンの」

gegesi n' +(n)ei (56:10) 「価値がないものの」

「文書 C」に現れる例：

qatun-nai (5:14) 「夫人の」

Tülügen-nei (13:9) 「トルゲンの」

+din は「文書 B」に子音字 d で終わる語幹に付き、1 回現れる。

例：

köbegüd+din (17:17) 「子供達の」

-ni は「文書 A」と「文書 C」に 1 回ずつ現れ、1 回は子音字 <r> で終わる語幹に付き、も 1 回は母音字 <i> で終わる語幹に付く。

例：

「文書 A」に現れる例：

namur+n'i (40:8) 「秋の」

「文書 C」に現れる例：

Ač'i-ni (7:16) 「アチの」

このほかに「文書 A」に子音字 <n> で終わる語幹に -yin が付く例が 1 回現れる。ここに使われた語尾 -yin は誤字の可能性がある。満洲語の訳<sup>13</sup>を見ると Činon bira-i 「チノン河の」であり、「文書 A」に現れるのは Činon-yin youl-yin 「チノン河の」である。Činon に付く -yin は満洲語訳に反映されていない。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の三つの檔案文書に現れる属格語尾を表で示せば、表

<sup>13</sup> 満文老檔研究会訳注 (1961) 509 頁。

21 の通りである(古典式モンゴル文語と違った特徴的語尾は網掛けをした箇所)。

表 21. 「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる属格語尾及び出現回数

	語幹末字の種類	語尾	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
属格	子音字 <n>	-u/-ü(+ü)	47	92	53(1)
		<u>-I(+I)</u>	129(6)	224(62)	463(1)
		<u>-nai/-nei(-n'ai/-n'ei)</u>	なし	5	2
		-yin(誤記)	1	なし	なし
	<n> 以外の子音字	-un/-ün	59	127	182
		<u>-Yin</u>	47	60	436
		+din	なし	1	なし
		+n'i	1	なし	なし
	母音字	-yin(+yin)	95(5)	150(3)	940(2)
		<u>-ni</u>	なし	なし	1

属格語尾において、三つの文献が共通して、子音字<n>で終わる語幹に語尾-u/-ü(+ü)の他に古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語にない語尾-I(+I)と-nai/-nei(-n'ai/-n'ei)が付く。<n>以外の子音字で終わる語幹に語尾-un/-ün 以外に古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の使い方と違う語尾-Yinが使われる。このほかに、+din と+n'i/n'i が現れる。

これらの古典式モンゴル文語の属格語尾と異なる語尾や異なる使い方をもつ語尾をすべて口語の露出であると見なすことができる。

清格尔泰(1991)によれば、「現代モンゴル口語では属格語尾は [i:n] 或いは[næ:]、[ne:] によって発音される (蒙古语的领格在口语里或者是[i:n], 或者是[næ:][ne:][æ:]、[e:] 和前边的 n 连在一起)」<sup>14</sup>。

モンゴル語檔案文書に現れた語尾-Yin と+din(+din の子音字<d>は子音字<d>で終わる語幹に付き、介入した可能性がある)は現代モンゴル口語の[i:n]に対応する。

子音字<n>で終わる語幹に付く -nai/-nei(-n'ai/-n'ei)は現代モンゴル口語の[næ:]、[ne:]に対応する。

子音字<n>で終わる語幹に語尾-I が数多く付くのは、当時の口語の露出であると考えられる。現代のハルハ方言では、子音 n で終わる語に付く語尾は[-i:]である。例えば、[nɔjɔn (主格) ~nɔjɔni: (属格)]「ノヤンが~ノヤンの」、[xɑ:n (主格) ~xɑ:ni: (属格)]「皇

<sup>14</sup> 清格尔泰(1991) 150 頁。

帝が～皇帝の」。<sup>15</sup>。

M.H 奥尔洛夫斯卡娅は、『黄金史』に現れる対格語尾-i が属格語尾の意味を表わした例が現れたことから、対格語尾と属格語尾の大本が同じだったという推測が確信できる<sup>16</sup>としている。これを引用して、斯琴高娃氏(2007)は、『十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』に現れる属格語尾と対格語尾は同じ語尾-i を用いた<sup>17</sup>としている。しかし、古い文献の中では、対格語尾-i が属格語尾の意味を表わした例は、幾つかしか現れなかった。対格語尾と属格語尾は、既に先古典式モンゴル文語から区別されていることから、モンゴル語檔案文書には、子音字<n>で終わる語幹に数多く用いられる語尾-I は対格語尾と属格語尾の大本が同じから現れたことではなく、口語の露出であると考えられる。

## (2) 対格語尾

古典式モンゴル文語の対格語尾には語尾-yi と-i がある。語尾-yi は母音字で終わる語幹に付き、語尾-i は子音字で終わる語幹に付く。この使い分けは、現代モンゴル文語の正書法の規範としても確立している。

モンゴル語檔案文書には、これと同様の傾向がみられるが、母音字で終わる語幹には、それ以外にも  $\text{ᠠ-gi}$ 、および語幹に接続した  $\text{ᠠ+i}$ 、それらの組み合わせがある。モンゴル語檔案文書に現れる対格語尾は次の 7 種類の語尾が現れる(「+」(プラス)は語尾が語幹と連続されている場合に用いる記号である。「\_」(アンダースコア)は語尾が分綴されている場合に用いる記号である。):

$\text{ᠠ-yi}$ 、 $\text{ᠠ-i}$ 、 $\text{ᠠ-gi}$ 、 $\text{ᠠ+i_yi/-i_yi}$ 、 $\text{ᠠ+i_gi}$ 、 $\text{ᠠ+yi+gi}$ 、 $\text{ᠠ-ni}$ 、 $\text{ᠠ-n'i}$ 、 $\text{ᠠ+tei}$

「文書 A」に現れる対格語尾は  $\text{ᠠ-yi}$ 、 $\text{ᠠ-i}$ 、 $\text{ᠠ-gi}$ 、 $\text{ᠠ+i_yi/-i_yi}$ 、 $\text{ᠠ+i_gi}$ 、 $\text{ᠠ-ni}$ 、 $\text{ᠠ+tei}$  である。ここでは語尾  $\text{ᠠ-yi}$ 、 $\text{ᠠ-gi}$ 、 $\text{ᠠ+i_yi}$ 、 $\text{ᠠ+i_gi}$  が同じ語幹 yala に付いて、区別なく使われていることが特に注目に値する。

「文書 B」に現れる対格語尾は  $\text{ᠠ-yi(-Yi)}$ 、 $\text{ᠠ-i(+i)}$ 、 $\text{ᠠ-gi}$ 、 $\text{ᠠ+i_yi}$ 、 $\text{ᠠ+yi+gi}$ 、 $\text{ᠠ-n'i}$  である。


「文書 C」に現れる対格語尾は  $\text{ᠠ-yi}$ 、 $\text{ᠠ-i}$ 、 $\text{ᠠ+i_yi}$  である。

<sup>15</sup> N.Poppe (1951) 59 頁。



<sup>16</sup> M.H 奥尔洛夫斯卡娅 著 郭守祥 译(2004) 20 頁。


<sup>17</sup> 斯琴高娃(2007) 43 頁。

「文書 A」に現れる対格語尾及びそれらの現れる状況と例：


3-yi 母音字で終わる語幹に付き 45 回現れる。例： yala-yi (15:7) 「罪を」

7-i/+i 分綴される場合は子音字で終わる語幹に付き、140 回現れる。連続される場合は母音字と子音字で終わる語幹に区別なく使われ、10 回現れる。例：


 qoyar-i (15:11) 「二人を」  tegün'+i (5:1) 「これを」


 ama+i (37:7) 「口を」

7-gi 母音字で終わる語幹に付き、33 回現れる。例： yala-gi (15:7) 「罪を」


 may'u-gi (32:10) 「悪いを」

3-i\_yi 母音字と子音字で終わる語幹のどちらにも付き、4 回現れる。

母音字で終わる語幹に付く例： yala+i\_yi (12:7) 「罪を」


子音字で終わる語幹に付く例： tan-i\_yi (10:7) 「汝等を」

7-i\_gi 母音字と子音字で終わる語幹のどちらにも付き、7 回現れる。

母音字で終わる語幹に付く例： yala+i\_gi (38:38) 「罪を」



子音字で終わる語幹に付く例： man+i\_gi (32:7) 「我らを」

7-ni 子音字 n で終わる語幹に付き、1 回現れる。例： tegün-ni (8:2) 「その者を」


3+ei 子音字で終わる語幹に付き 1 回現れる。例： degel+ei (40:9) 「服を」

「文書 B」に現れる対格語尾及びそれらの現れる状況と例：

ㄅ-yi (-Yi) 母音字で終わる語幹に付き 150 回現れる。例：

 qur\_a-yi(2:3) 「雨を」  törü-yi(18:8) 「道を」



ㄅ-yi (-Yi) は子音字で終わる語幹に付き 3 回現れる。この場合は -Yi と転写する。例：

 Gingger-Yi(48:19) 「ギンゲルを」  č'erig-Yi+n'\_i(8:9) 「彼(ら)の軍を」



ㄆ-i/+i 子音字で終わる語幹に付き 171 回現れる。語幹と連ねて書かれる場合は母音字で終わる語幹にも付き、21 回現れる。例：

 kümün-i(5:4) 「人を」  alba+i(19:23) 「貢物を」


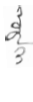

ㄆ-i は母音字で終わる語幹に付き 3 回現れる。例：

 bügüde-i(5:11) 「すべてを」  ügei-i(36:8) 「言葉を」


ㄆ+i\_yi 語尾+i\_yi は語幹末字が母音字、子音字に問わず 22 回使われている。例：


 törü+i\_yi(37:7) 「道を」  man'+i\_yi(7:13) 「我等を」

ㄆ-gi すべて母音字で終わる語幹に付き 12 回現れる。例：


 tayiji-gi(1:22) 「タイジを」  qota-gi(38:24) 「城を」  
 bey\_e-gi+n'i(29:26) 「彼(ら)の体を」


ㄆ+yi+gi 母音字で終わる語幹に付き、1 回現れる。例：


 tusa+yi+gi(56:7) 「役割を」

ㄆ-n'i 語尾ㄆは子音字 n で終わる語幹に付き。例： qon'in-n'i(17:18) 「羊を」

「文書 C」に現れる対格語尾及びそれらの現れる状況と例：

ㄆ-yi 母音字で終わる語幹に付き、90 回現れる例： yala-yi(9:14) 「罪を」

フ-i 子音字で終わる語幹に付き、94 回現れる。例： beleg-i (7:25)「贈り物を」

フ+i\_yi 母音字で終わる語幹に付き、1 回現れる。例： nama+i\_yi (14:21)「私を」

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の三つの文献に現れる対格語尾を表で示せば、表 22 の通りである(古典式モンゴル文語と異なる語尾は網掛けをした箇所)。

表 22. 「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる対格語尾

語幹末字	語尾	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
母音字	フ-yi	45	150	90
	フ-i	なし	3	なし
	フ-gi	33	12	なし
	フ+i_yi	2	7	なし
	フ+i_gi	4	なし	なし
	フ+yi+gi		1	なし
子音字	フ-i	140	171	94
	フ-yi	なし	3	なし
	フ+i_yi	2	15	1
	フ+i_gi	3	なし	なし
	フ-ni/フ-n'i	1	1	なし
	フ+tei	1	なし	なし

「文書 A」、「文書 B」に古典式モンゴル文語と異なる語尾-gi、+i\_yi、+i\_gi、+yi+gi、-ni/-n'i、tei が現れる。

ここでは「文書 A」の対格語尾の例をあげて検討する。

「文書 A」では対格語尾-yi、-gi、+i\_yi、+i\_gi という 4 種類の形が同じ語幹 yala「罪」に付き、区別なく使われている。

第 1 に、yala-yi「罪を」という形は古典式モンゴル文語の規範と一致する。

第 2 に、yala-gi「罪を」の語尾-gi は語尾-yi の読み方と関係している。19 世紀の前半に書かれた『蒙文詮釈』では、「語尾-yi は母音字で終わる語幹に付き、gi で発音される」としている(-yi üsüg-i a ai au ene yurban toloyai-yin üsüg-üd-ün door-a bičijü



kereglemüi. …edeger-i čöm gi kemen dayudamui. 「語尾-yi は a ai au の字頭に付く、つまり語幹末が母音字の語に付く。…これらはすべて gi と読む」)<sup>18</sup>。ここで現れたの yala-gi 「罪を」の-gi は、語尾-yi の読み方で表記されたと考えられる。なぜなら、yala+i\_gi 「罪を」という口語の露出が現れる。

第3に、yala+i\_gi 「罪を」は、口語の影響を受けた形と考えられる。現代モンゴル口語では語尾-yi と-i は[gi:/gi:] 或いは[i:g/i:g]によって発音される<sup>19</sup>。現代モンゴル口語では語幹末が長母音、複合母音の場合は[gi:/gi:]によって発音され、語幹末が子音の場合は[i:g/i:g]によって発音される。現代モンゴル口語では yala 「罪」が[jal]と発音される。現代モンゴル口語で yala 「罪」は子音で終わる語であり、それに付く対格語尾は[i:g]である。従ってモンゴル語檔案文書に現れた語尾+i\_gi は当時の口語的の発音を反映した表記である可能性がある。

第4に、yala+i\_yi 「罪を」の+i\_yi は上に述べた語尾+i\_gi の gi を yi に書き換えたものである。これは、口語的要素を文語に書き換えたものと考えられる。このような例は、「文書 A」では、他にも現れる。例えば、man+i\_yi (24:4) 「我等を」と man'+i\_gi (23:3) 「我等を」。

語尾-gi はまた、例に挙げたように、語幹 mayu 「悪い」に付いて、2回現れる。現代モンゴル口語では mayu 「悪いこと」は[mu:]であり、語幹末が長母音であり、それに付く対格語尾は[gi:]である。現代モンゴル口語の発音から見れば、mayu-gi 「悪いを」の-gi は口語の露出である。

この他に、語尾 <sup>ᠠ</sup>-ni / <sup>ᠤ</sup>-n'i が子音字<n>で終わる語幹に2回現れる。これもまた、口語の影響で、子音字<n>が、介入した可能性がある。語尾+ei は1回現れ、誤記の可能性がる。

対格語尾において、「文書 A」、「文書 B」には口語的要素が多く露出している。「文書 C」には口語的要素が少なく、古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範と一致する。

「文書 B」には語尾<-i>が母音字で終わる語幹に付き、語尾<-yi>が子音字で終わる語幹に付き、3回ずつ現れる。その原因は不明であり、誤記の可能性も考えられる。









### (3) 与位格語尾

古典式モンゴル文語の与位格語尾は-tur/-tür、-dur/-dūr である。古典式モンゴル文語の与位格語尾の <sup>ᠲ</sup>t (-tur/-tür 等) で始まる語尾は語幹末が子音字<b>、<g>、<γ>、<r>、<s>、<d>で終わる語に付く。 <sup>ᠳ</sup>d (-dur/-dūr 等) で始まる語尾は語幹末が母音字と子音字<n>、

<sup>18</sup> 嘎拉桑(1979) 139-165 頁。

<sup>19</sup> 清格爾泰(1991) 153 頁。

<m>、<l>、<ng>で終わる語に付く。

モンゴル語檔案文書には語尾 、、、 の4つの形が現れる。これらの語尾は語幹末字の種類によって区別されない。 は語幹末が子音字<b>、<g>、<γ>、<r>、<s>、<d>で終わる語に付く場合、-tu/-tü と転写し、語幹末が母音字と子音字<n>、<m>、<l>、<ng>で終わる語に付く場合、-d'u/-d'ü と転写する。同じく、 は-tur/-tür、或いは-d'ur/-d'ür と転写する。 は語幹末が母音字と子音字<n>、<m>、<l>、<ng>で終わる語に付く場合、-du/-dü と転写し、語幹末が子音字<b>、<g>、<γ>、<r>、<s>、<d>で終わる語に付く場合、-t'u/-t'ü と転写する。同じく、 は-dur/-dür、或いは-t'ur/-t'ür と転写する。





「文書 A」には  (-tu/-tü/-d'u/-d'ü) の出現回数が最も多く、147 回現れる。  
(-du/-dü/-t'u/-t'ü) は 33 回、 (-tur/-tür/-d'ur/-d'ür) は 15 回、  
 (-dur/-dür/-t'ur/-t'ür) は 3 回現れる。語幹末字による出現回数は表 23 の通りである。

表 23. 「文書 A」に現れる与位格語尾

語尾	語幹末文字		合計
	子音字<b>、<g>、<γ>、<r>、<s>、<d>	母音字と子音字<n>、<m>、<l>、<ng>	
	-tu/-tü 35 回	-d'u/-d'ü 112 回	147 回
	-t'u/-t'ü 5 回	-du/-dü 28 回	33 回
	-tur/-tür 7 回	-d'ur/-d'ür 8 回	15 回
	-t'ur/-t'ür 1 回	-dur/-dür 2 回	3 回








「文書 B」にはまた  (-tu/-tü/-d'u/-d'ü) の出現回数が多く、305 回現れる。  
(-du/-dü/-t'u/-t'ü) は 41 回、 (-tur/-tür/-d'ur/-d'ür) は 37 回、  
 (-dur/-dür/-t'ur/-t'ür) は 2 回現れる。語幹末字による出現回数は表 24 の通りである。

表 24. 「文書 B」に現れる与位格語尾

語尾	語幹末文字		合計
	子音字<b>、<g>、<γ>、<r>、<s>、<d>	母音字と子音字<n>、<m>、<l>、<ng>	
	-tu/-tü 69 回	-d'u/-d'ü 236 回	305 回
	-t'u/-t'ü 14 回	-du/-dü 27 回	41 回
	-tur/-tür 10 回	-d'ur/-d'ür 27 回	37 回
	なし	-dur/-dür 2 回	2 回

「文書 C」には、 (-du/-dü/-t'u/-t'ü) は最も多く、102 回現れる。  
(-tu/-tü/-d'u/-d'ü) は 66 回、 (-tur/-tür/-d'ur/-d'ür) は 9 回、

𐰉(-dur/-dür/-t'ur/-t'ür)は8回現れる。語幹末字による出現回数は表 25 の通りである。

表 25. 「文書 C」に現れる与位格語尾

語尾	語幹末文字		合計
	子音字<b>、<g>、<γ>、<r>、<s>、<d>	母音字と子音字<n>、<m>、<l>、<ng>	
𐰉	-tu/-tü 10回	-d'u/-d'ü 56回	66回
𐰊	-t'u/-t'ü 10回	-du/-dü 92回	102回
𐰋	なし	-d'ur/-d'ür 9回	9回
𐰌	なし	-dur/-dür 8回	8回

ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：

語尾 𐰉 の例：

𐰉 tus-tu(18:1) 「当主に」

𐰉 may'u-d'u(38:20) 「悪いことに」

語尾 𐰊 の例：

𐰊 qay'an-du(39:3) 「皇帝に」

𐰊 egün-dü(30:4) 「これに」

𐰊 qon'uγ-t'u(41:4) 「宿泊に際して」

語尾 𐰋 の例：

𐰋 tabar-tur(43:4) 「物に」

𐰋 egün-d'ür(16:6) 「これに」

語尾 𐰌 の例：


𐰌 Qalq\_a-dur(46:2) 「ハルハに」


𐰌 ulus-t'ur(43:2) 「国に」

このほかに、「文書 A」と「文書 B」に語尾 𐰉 と 𐰊 は語幹と連ねて書かれる場合と出現回数が少ない先古典式モンゴル文語に現れる語尾 𐰍、𐰎 が現れる。「文書 C」にはこれらの語尾が現れない。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。


例：


語尾-tu/-tü の例：

 čag+tu(2:2) 「時に」


 tus+tu(4:11) 「当主に」





語尾  の例：




 ežen-d'e(8:4) 「主人に」





 jëgün-d'e(26:8) 「東に」



語尾  の例：

 jëgün-de(17:1) 「東に」

与位格語語尾において、三つの文献に共通して多く現れるのは、 (-tu/-tü、-d'u/-d'ü)、 (-t'u/-t'ü、-du/-dü)であり、これらは語幹末字による区別がない。「文書 A」と「文書 B」のモンゴル語檔案文書には (-tu/-tü、-d'u/-d'ü)の形が数多く現れる。「文書 C」には、 (-t'u/-t'ü、-du/-dü)の形が数多く現れ、102回現れるうち、92回は母音字と子音字<n><m><l><ng>で終わる語幹に付く。これは、現代モンゴル文語の規範と一致する。

「文書 A」と「文書 B」の与位格語尾には -tu/-tüの形が数多く使われている。先古典式モンゴル文語の与位格語尾には -tur/-tür(-dur/-dür)の形が使われていた<sup>20</sup>。接尾辞頭に t(d)形が使われる状況は先古典式モンゴル文語の表記の規範が引き継がれている可能性がある。

モンゴル語檔案文書に現れる -tu/-tü(-d'u/-d'ü)の形は先古典式モンゴル文語の -tur/-tür(-d'ur/-d'ür)と違って末尾の子音字 r が無い。末尾の r が脱落したのは口語の影響を受けたことによると考えられる。より古い時代の口語にも-du/-dü、-tu/-tüの形があった。古い口語が記されているといわれる文献資料であるムカッディマト・アル・アダブには-du/-dü、-tu/-tüの記載がある<sup>21</sup>。例えば次の例に-du/-dü、-tu/-tüが使われている。amandu「口に」[H.H Понпе1939:100]、ügedü「言葉に」[H.H Понпе1939:128]、jarliqtu「命令に」[H.H Понпе1939:381]、gertü「家に」[H.H Понпе1939:110]。従って、モンゴル語檔案文書に数多く現れた与位格語尾 -tu/-tü(-d'u/-d'ü)と -du/-dü(-t'u/-t'ü)は当時の口語の露出であると考えられる。

モンゴル語檔案文書の与位格語尾には古典式モンゴル文語と違った語尾が現れたのは、当時の口語的要素が含まれるからである。当時の口語の現れと思われる語尾 -tu/-tüと -du/-düは現代モンゴル語で文語の形として定着している。

<sup>20</sup> 栗林均(1999) 127 頁。

<sup>21</sup> 舍・羅布蒼旺丹 勒・宝魯特(1991) 204 頁。

#### (4) 造格語尾

古典式モンゴル文語には造格語尾-bar/-ber と-iyar/-iyer が使われる。-bar/-ber は母音字で終わる語幹に使われ、-iyar/-iyer は子音字で終わる語幹に使われる。いずれも語幹と離して書かれる。

モンゴル語檔案文書の造格には語尾-bar/-ber、-iyar/-iyer が現れる他、語幹と連ねて書かれる+bar/+ber が現れる。

「文書 A」には-bar/-ber が 15 回、+bar/+ber が 6 回、-iyar/-iyer が 16 回現れる。



「文書 B」には、-bar/-ber が 20 回、+bar/+ber が 16 回、-iyar/-iyer が 28 回現れる。

「文書 C」には、-bar/-ber が 20 回、+bar/+ber が 2 回、-iyar/-iyer が 27 回現れる。


ここで現れる語幹と連ねて書かれる+bar/+ber は、先古典式モンゴル文語の表記方法が引き継がれている可能性がある。ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

例：



語尾-bar/-ber の例：

 č'ay'aĵa-bar (15:6) 「法で」  küč'ü-ber(14:3) 「力で」

語尾+bar/+ber の例：

 yosu+bar(32:12) 「道を」  č'ay'aĵa+bar(37:03) 「法で」

語尾-iyar/-iyer の例：

 ĵarlay-iyar(10:2) 「命令で」  sedkil-iyer(4:3) 「心で」

「文書 C」には語尾-bar/-ber が語幹と連ねて書かれる例が少ない。古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語の規範に近い。

#### (5) 奪格語尾

古典式モンゴル文語には奪格語尾-ača/-eče が使われる。

モンゴル語檔案文書には語尾-ača/-eče、+ča/+če、-n'asa、-teče/-t'eče/+teče、+γ'ača、+se が現れる<sup>22</sup>。

「文書 A」には語尾-ača/-eče、+ča、-n'asa、-teče が現れる。-ača/-eče は 89 回、+ča は 2 回、-n'asa は 1 回、-teče は 1 回現れる。

「文書 B」には語尾-ača/-eče、+ča/+če、+γ'ača、-t'eče、+se が現れる。-ača/-eče は

<sup>22</sup> 子音字<č>の字形の区別による転写 č 或いは č' を例の中だけに示すようにした。

81回、+ča/+če は5回、+γ'ača は1回、-t'eče は1回、+se は1回現れる。


「文書 C」には語尾-ača/-eče と+teče が現れる。-ača/-eče は109回、+teče は1回現れる。古典式モンゴル文語と三つの檔案文書の比較を示せば、表 26 の通りである(古典式モンゴル文語と異なる語尾は網掛けをした箇所)。


表 26. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる奪格語尾の比較

古典式モンゴル文語	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
-ača/-eče	-ača/-eče 89 回	-ača/-eče 81 回	-ača/-eče 109 回
なし	+ča/+če 2 回	+ča/+če 5 回	なし
なし	-n'asa 1 回	なし	なし
なし	-teče 1 回	-t'eče 1 回	+teče 1 回
なし	なし	+γ'ača 1 回	なし
なし	なし	+se 1 回	なし


「文書 A」に現れる例：

語尾-ača/-eče の例：


 saču=γsan-ač'a(4:1) 「撒いたから」

 ečige-eč'e(2:2) 「父から」


語尾+ča の例：

 qola+č'a(44:3) 「遠くから」

語尾-n'asa の例：


 tan-n'asa(10:6) 「汝らから」


語尾-teče の例：

 ger-teč'e(37:1) 「家から」


「文書 B」に現れる例：


語尾-ača/-eče の例：

 γ'ar-ač'a(17:7) 「手から」


 erten-eč'e(29:31) 「昔から」

語尾+ča/+če の例：


 tende+č'e(2:6) 「そこから」

 qoyin'a+č'a(29:14) 「後ろから」


語尾+γ'ača の例 :

 urida+γ'ač'a(57:11) 「昔から」

語尾-t'eče の例 :


 ger-t'eč'e(49:27) 「家から」

語尾+se の例 :


 eč'i=kü+se(4:6) 「行くことから」

「文書 C」に現れる例 :

語尾-ača/-eče の例 :

 ulus-ač'a(11:10) 「庶民の」       deger-eč'e(11:4) 「上から」

語尾+teč'e の例 :

 gen+teč'e+gen(15:4) 「自分の家から」

奪格語尾においては、モンゴル語檔案文書には古典式モンゴル文語に現れない語尾 +ča/+če、-n'asa、-teče/-t'eče/+teče、+γ'ača、+se が使われる。数少なく現れる語尾+ča/+če、-n'asa、-teče/-t'eče/+teče は先古典式モンゴル文語に使われていた語尾である。

語尾+se は口語の露出の可能性はある。現代モンゴル文語の奪格語尾-ača/-eče は口語では[a:s]/[ə:s]/[ɔ:s]/[o:s]によって発音される<sup>23</sup>。語尾+se は現代モンゴル口語の[ə:s]に対応すると考えられる。

語尾+γ'ača の γ'a は長母音[a:]を表わすために書かれたと考えられる。現代モンゴル口語では文語の a+γa の組み合わせは、長母音[a:]に発音される場合がある<sup>24</sup>。ここでは、長母音[a:]を文語的に表記するために γ'a が書かれ、語尾+γ'ača になったと考えられる。

「文書 A」、「文書 B」には語尾-ača/-eče のほか、先古典式モンゴル文語に現れる語尾や口語的要素が現れる。「文書 C」にほとんど-ača/-eče であり、+teč'e は1回だけ現れる。これにより、「文書 C」は、古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範に近いことがわかる。

## (6) 共同格語尾

古典式モンゴル文語の共同格語尾には語尾-luγ<sub>a</sub>/-lüge が使われる。語尾-luγ<sub>a</sub> は男性語に付き、-lüge は女性語に付く。

<sup>23</sup> 清格爾泰(1991) 155 頁

<sup>24</sup> 清格爾泰(1991) 19 頁

モンゴル語檔案文書には共同格語尾-luγ'\_a(-luγ'a)、-la/-le(+la/+le)、  
-tai/-tei(-t'ai/-t'ei)が現れる。

「文書 A」の共同格語尾には語尾-luγ'\_a が 3 回現れ、語幹の男性女性に区別がなく使われる。

「文書 B」の共同格語尾には-luγ'\_a(-luγ'a)が 13 回現れ、男性語女性語に区別なく使われる。  
-la/-le(+la/+le)が 6 回、-tai/-tei(-t'ai/-t'ei)が 10 回現れる。

「文書 C」の共同格語尾には-luγ'\_a が 5 回現れ、すべて男性語に付く。古典式モンゴル文語と三つの文献に現れる共同格語尾の比較を表で示せば、表 27 の通りである(古典式モンゴル文語と異なる語尾は網掛けをした箇所)。




表 27. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書の共同格語尾の比較

古典式モンゴル文語	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
-luγ'_a/-lüge	-luγ'_a 3 回 (男性語女性語に区別なく使われる)	-luγ'_a(-luγ'a) 13 回 (男性語女性語に区別なく使われる)	-luγ'_a 5 回
なし	なし	-la/-le(+la/+le) 6 回	なし
なし	なし	-tai/-tei(-t'ai/-t'ei) 10 回	なし

例：



「文書 A」に現れる例：

語尾-luγ'\_a の例：



 abay'\_a-luγ'\_a(27:7) 「アバガと」
  qalq'\_a-luγ'\_a(4:12) 「ハルハと」  
 ür\_e-luγ'\_a(3:3) 「子供と」

「文書 B」に現れる例：

語尾-luγ'\_a の例：

 č'aqar-luγ'\_a(14:9) 「チャハルと」
  tegün-luγ'\_a(29:8) 「彼と」

語尾-la/-le の例：

 č'aqar-la(19:26) 「チャハルと(地名)」
  elč'i-le(19:19) 「使者と」



語尾+la/+le の例：

elč'i+le(45:8) 「使者と」

語尾-tai/-tei(-t'ai/-t'ei)の例：

Ĵayatan-tai(47:13) 「ジャガタンと」

Qalq\_a-t'ai 「ハルハ(地名)と」

「文書 C」に現れる例：

語尾-luy'\_a の例：

č'im\_a-luy'\_a(14:19) 「汝と」

共同格語尾において、モンゴル語檔案文書には語尾-luy'\_a(-luy'a)が男性語女性語に区別なく使われ、古典式モンゴル文語の女性語に付く-lüge が現れない。

数少なく現れる語尾-la/-le(+la/+le)は古い口語の露出であると考えられる。古い口語が記されているといわれる文献資料であるムカッディマト・アル・アダブには共同格語尾-lā/-lē<sup>25</sup>が現れる。例えば、bidanlā「我等と」[H.H Понне 1939:118]、tedenlē「彼らと」[H.H Понне 1939:180]など。これにより、モンゴル語檔案文書に現れる語尾-la/-le(+la/+le)は古い口語の露出であると考えられる。

語尾-tai/-tei(-t'ai/-t'ei)は10回現れる。現代モンゴル文語の共同格語尾は-tai/-teiであり、発音は、[tæ:]、あるいは [te:]である。このような発音は、モンゴル語檔案文書にあった可能性があり、表記に現れたと考えられた。

### 3.2.2 所属語尾

所属語尾には再帰所属語尾と人称所属語尾がある。

#### (1) 再帰所属語尾

古典式モンゴル文語の再帰所属語尾には語尾-yuγan/-yügen、-ban/-ben、-iyan/-iyen が使われる。語尾-yuγan/-yügen は語幹末の音に関わりなくすべての名詞に付く。語尾-ban/-ben は母音字で終わる語幹に付き、語尾-iyan/-iyen は子音字で終わる語幹に付く。

モンゴル語檔案文書の再帰所属語尾には語尾-yuγ'an、-ban/-ben(+ban/+ben)、-iyan/-iyen(+iyan、+yan/+yen)、-gen(+gen)が現れる。

「文書 A」の再帰所属語尾には、-yuγ'an が2回現れ、2回とも女性語に付く。-ban/-ben は母音字で終わる語幹に付き、21回現れる。この中では-ban/-ben が母音字で終わる語幹と連続される例が11回現れる。この場合は+ban/+ben と転写する。語尾-iyan/-iyen は子

---

<sup>25</sup> ā と ē は長母音を表わす。

音字で終わる語幹に付き、19回現れる。+yen は1回現れる。

「文書 B」の再帰所属語尾には-yuy'an が2回現れ、2回とも男性語に付く。語尾-ban/-ben は母音字で終わる語幹に付き、22回現れる。+ban/+ben は母音字で終わる語幹に連続され、22回現れる。語尾-ian/-iyen は子音字で終わる語幹に付き、53回現れ、母音字で終わる語幹に付き、15回現れる。+iyen は2回現れ、母音字と子音字で終わる語幹に1回ずつ付く。+yan は母音字で終わる語幹に付き、1回現れる。-gen は母音字で終わる語幹に付き、1回現れる。

「文書 C」の再帰所属語尾に-ban/-ben は母音字で終わる語幹に付き、4回現れる。+ban/+ben は母音字で終わる語幹に付き、1回現れる。-ian/-iyen は子音字で終わる語幹に付き、9回現れる。-gen は母音字で終わる語幹に付き、1回現れる。これらの語尾を表で示せば、表 28 の通りである(網かけをした箇所は古典式モンゴル文語と異なる語尾)。

表 28. 古典式モンゴル文語とモンゴル語文書の再帰所属語尾

	古典式モンゴル文語	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
母音字	-ban/-ben	21回	22回	4回
	なし	+ban/+ben 11回	22回	1回
	なし	+yan/+yen 1回	1回	なし
	なし	なし	+iyen 1回	なし
	なし	なし	+gen 1回	-gen 1回
	なし	なし	-ian/-iyen 15回	なし
子音字	-ian/-iyen	19回	53回 +iyen 1回	9回
語幹末字と関係なし	-yuyan/-yügen	なし	-yuy'an 2回	なし
		-yuy'an 2回	なし	なし


「文書 A」に現れる例：


語尾-yuy'an の例：

elči-yuy'an(39:8) 「自分の使者を」


mendü-yuy'an(42:8) 「互いの平安を」


語尾-ban/-ben の例 :

 ayta-ban(23:2) 「自分の馬を」


 degü-ben(34:4) 「自分弟を」


語尾+ban/+ben の例 :

 aduγ'u+ban(15:12) 「自分の馬を」


 üge+ben(4:11) 「自分の言葉を」

語尾-ian/-iyen の例 :

 n'utuγ-ian(27:2) 「自分の牧地を」


 köbegün-iyen(6:3) 「自分の子供を」

語尾+yen の例 :


 üre+yen(2:1) 「自分の子供を」


「文書 B」に現れる例 :

語尾-yuγ'an の例 :

 ayta-yuγ'an(8:17)


語尾-ban/-ben の例 :

 dotur\_a-ban(24:16) 「自分の心の中で」


 n'er\_e-ben(27:12) 「自分の名前を」

語尾+ban/+ben の例 :


 degü+ben(28:5) 「自分の弟を」

 baray'a+ban(28:6) 「自分の姿を」


語尾-ian/-iyen の例 :

 mal-ian(24:14) 「自分の家畜を」


語尾+iyen の例 :

 n'ere+iyen(1:9) 「自分の名前を」

語尾+yan の例 :



 morida=qu+yan(57:11) 「自分の出発するのを」

語尾-gen の例 :


 degütei-gen(48:26) 「弟と共に」

「文書 C」に現れる例 :

語尾-ban/-ben の例 :

 abay'\_a-ban(48:26) 「自分叔父さんを」  bey\_e-ben(14:24) 「自分自身を」


語尾+ban の例 :

 qosiy'u+ban(18:11) 「自分の旗を」

語尾-iyān/-iyen の例 :

 čerig-iyen(9:8) 「自分の軍を」  öber-iyen(48:27) 「自分で」

語尾+gen の例 :

 ger+teč'e+gen(15:4) 「自分の家から」

再帰所属語尾において、モンゴル語檔案文書には語尾-yuγ'an は男性語にも、女性語にも付く。これは N.Poppe(1954) の -yuγān/-yügen に関する「語幹末の音に関わりなくすべての名詞に付く (All nouns, regardless of the final sound of the stem, can take the suffix -yuγān/-yügen)」という解釈と一致する。

語尾+ban/+ben は語幹と連ねて書かれる場合が現れる。これは、先古典式モンゴル文語に見られる表記の特徴である。「文書 B」に現れる語尾-iyān/-iyen は 15 回母音字で終わる語幹に付き、語幹末字による使い方は古典式モンゴル文語と異なるがここで、現れた経緯については不明である。

語尾-gen/+gen が現れるのは口語の露出であると考えられる。現代モンゴル口語では [gə:n] に発音される場合がある<sup>26</sup>。現代モンゴル口語の発音を考慮に入れれば、語尾 -gen/+gen は口語の露出であることが分かる。

## (2) 人称所属語尾

古典式モンゴル文語には人称代名詞と人称所属語尾が区別なく同じ語が使われていた。

第 1 人称： 単数：minü 複数：manu

<sup>26</sup> 清格爾泰(1991) 179 頁。

第2人称： 単数：čīnū 複数：tanu

第3人称： 単数：inū 複数：anu

### 1) 第1人称所属語尾

モンゴル語檔案文書の第1人称所属語尾には単数語尾にはmin'üとmini/min'iが現れる。複数語尾にはbiden-ü、biden-I(biden'+I)、man'+Iが現れる。

「文書A」の第1人称の単数語尾にはmin'üが1回、miniが2回現れる。複数語尾には、biden-üが4回、biden-I(biden'+I)が4回現れる。

「文書B」には1人称所属の単数語尾min'iが12回現れ、min'üが26回現れる。複数語尾biden-Iは17回、biden-üは3回現れる。man'+Iが5回現れる。

「文書C」には1人称所属の単数語尾miniが2回現れ、複数語尾biden-Iが1回現れる。

古典式モンゴル文語と三つの文献に現れる第1人称所属語尾の比較を表で示せば、表29の通りである(古典式モンゴル文語と異なる語尾は網掛けをした箇所)。

表 29. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書の第1人称所属語尾の比較

	古典式モンゴル文語	「文書A」	「文書B」	「文書C」
単数語尾	minü	min'ü 1回	min'ü 26回	
	なし	mini 2回	min'i 12回	mini 2回
複数語尾	manu	なし	なし	なし
	なし	biden-ü 4回	biden-ü 3回	なし
	なし	biden-I(biden'+I) 4回	biden-I 17回	biden-I 1回
	なし	なし	man'+I 5回	なし

例：

「文書A」に現れる例：

単数語尾min'üの例：

üge min'ü(32:7) 「私の言葉」

単数語尾miniの例：

sidar mini(40:10) 「私の身近」 elč'i-yin mini(40:11) 「私の使者」

複数語尾biden-üの例：

ür\_e biden-ü(4:15) 「我々の子供」

複数語尾biden-I(biden'+I)の例：

ügen-dü biden-I(9:7) 「我々の言に」

「文書 B」に現れる例：

単数語尾 min'i の例：

ire=gsen min'i(17:8) 「私の来たのは」

単数語尾 min'ü の例：

üge-yi min'ü(3:17) 「私の言葉」

複数語尾 biden-I の例：

ür\_e biden-I(7:16) 「我々の子供」

複数語尾 biden-ü の例：

č'erig biden-ü(54:10) 「我々の軍」

複数語尾 man'+I の例：

nasun man'+I(7:10) 「我々の寿命」

「文書 C」に現れる例：

単数語尾 mini の例：

qačar mini(14:22) 「私の顔」

複数語尾 biden-I の例：

mori biden-I(15:2) 「私達の馬」

モンゴル語檔案文書の第 1 人称所属語尾に現れた、古典式モンゴル文語と異なる単数語尾 mini/min'i、複数語尾 biden-I(biden'+I)、man'+I は口語の露出である可能性がある。現代モンゴル口語では、minü（人称代名詞）は[mini:]によって発音される<sup>27</sup>。このような発音はモンゴル語檔案文書が書かれた当時もあった可能性があり、表記にゆれが生じた可能性がある。同様に、複数語尾の biden-I(biden'+I) と man'+I はそれぞれ、biden-ü と manu の口語の露出である。

## 2) 第 2 人称所属語尾

モンゴル語檔案文書の第 2 人称所属には単数語尾と複数語尾が現れる。

単数には語尾 čin'i/čini と čin'ü/činü が現れる。複数には語尾 tan'+I/tan+I/tan-I と

---

<sup>27</sup> 『蒙漢詞典』(1999) 1469 頁。

tan-u が現れる。

「文書 A」の単数には、語尾 čin'i/čini が 2 回現れ、語尾 čin'ü/činü は 3 回現れる。複数には tan'+I/tan+I/tan-I が 6 回現れ、tan-u が 2 回現れる。

「文書 B」の単数には、語尾 čin'ü が 24 回、語尾 čin'i が 8 回現れる。複数には、語尾 tan-I/tan'+I が 13 回、tan-u が 1 回現れる。語尾 čin'ü が 6 回、語尾 čin'i が 2 回、語尾 tan-I(tan'+I) が 16 回、語尾 tan-u が 2 回現れる。

「文書 C」の単数には čin'ü が 1 回現れる。複数語尾が現れない。古典式モンゴル文語と三つの文献の第 2 人称所属語尾の比較を表で示せば、表 30 の通りである(古典式モンゴル文語と異なる語尾は網掛けをした箇所)。

表 30. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書の第 2 人称所属語尾の比較

	古典式モンゴル文語	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
単数	činü	čin'ü/činü 3 回	čin'ü 24 回	čin'ü 1 回
	なし	čin'i/čini 2 回	čin'i 8 回	なし
複数	tanu	tan-u 2 回	tan-u 2 回	なし
	なし	tan'+I/tan+I/tan-I 6 回	tan-I(tan'+I) 16 回	なし

例：

「文書 A」に現れる例：

単数語尾 čin'i/čini の例：

üge č'in'i(35:3) 「汝の言葉」      yabu=qu č'ini(32:3) 「汝の行くこと」

単数語尾 čin'ü/činü の例：

bičig-i č'in'ü(44:2) 「汝の書を」

複数語尾 tan'+I/tan+I/tan-I の例：

yabudał tan'+I (32:5) 「汝らのこと」 törül tan+I(34:1) 「汝らの親戚」  
yabu=γsan-i tan-I(汝らの行ったことを)

複数語尾 tan-u の例：

üge tan-u(43:02) 「汝らの言葉」

「文書 B」に現れる例：

単数語尾 čin'ü の例：

n'er\_e čin'ü(6:8) 「汝の名前」

単数語尾 čin'i の例：

ög=gü=gšen čin'i(17:13) 「汝の与えたのは」

複数語尾 tan-I/tan'+I の例：

ab=qu tan-I(23:16) 「汝らの取るのは」

nasun tan'+I(17:14) 「汝らの寿命」

複数語尾 tan-u の例：

mori-yi tan-u(58:10) 「汝らの馬を」

「文書 C」に現れる例：

単数語尾 čin'ü の例：

gerečile=kü č'in'ü(14:25) 「汝の証言すること」

モンゴル語檔案文書に現れた第 2 人称所属単数語尾 čin'i/čini と複数語尾 tan'+I/tan+I/tan-I は、口語の露出である可能性がある。現代モンゴル口語では činü (人称代名詞) の発音は [tʃini:] である。このような口語の発音は当時も存在していた可能性があり、表記にゆれが生じたと考えられる。同様に、複数語尾 tan'+I/tan+I/tan-I は tan-u の口語の露出である。

### 3) 第 3 人称所属語尾

モンゴル語檔案文書の第 3 人称所属には、単数と複数に区別されない語尾 ni/n'i、anu/an'u、inü/in'ü が現れる。

「文書 A」の第 3 人称所属語尾には語尾 ni/n'i が 12 回現れる。ni は子音字 n に点を持つ形、n'i は子音字 n に点を待たない形である。語幹と繋げて書かれている場合の語尾+n'\_i は 1 回現れ、語尾 in'ü が 1 回現れる。次はそれぞれの語尾の例である。

「文書 B」の第 3 人称所属語尾には語尾 ni/n'i が 32 回、an'u が 1 回、in'ü が 23 回現れる。第 3 人称所属語尾 ni は子音字 n で終わる語幹に連続された i が付いた形で現れる。この場合は+n'\_i と転写する。+n'\_i は 5 回現れる。

「文書 C」の第 3 人称所属語尾には inü/in'ü が 128 回現れ、anu/an'u が 4 回現れる。

古典式モンゴル文語と三つの文献の第 3 人称所属語尾の比較を表で示せば、表 31 の通りである(古典式モンゴル文語と異なる語尾は網掛けをした箇所)。



表 31. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書の第 3 人称所属語尾の比較

	古典式モンゴル文語	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
単数	inü	ni/n'i 12回	ni/n'i 32回	inü/in'ü 128回
		+n'_i 10回	+n'_i 5回	anu/an'u 4回
複数	anu	in'ü 1回	an'u 1回	
			in'ü 23回	

例：

「文書 A」に現れる例：

語尾 ni/n'i の例：


qar\_a bey\_e ni(33:9) 「その单身」


mal-i ni(33:11) 「彼の家畜を」

türültai-n'i(15:16) 「彼の親族とともに」

borbi n'i(37:7) 「彼の踵」

語尾+n'\_i の例：

 qayās-i+n'\_i(33:6) 「その半分を」

 noya(n)+n'\_i (33:3) 「彼のノヤン」

語尾 in'ü の例：

üre in'ü(14:8) 「彼に子供」

「文書 B」に現れる例：

語尾 ni/n'i の例：

ulus' n'i(19:33) 「彼らの民が」


語尾 an'u の例：


uqay'an an'u(43:8) 「彼らの知恵は」

語尾 in'ü の例：

uč'ir in'ü(19:20) 「その原因は」

語尾+n'\_i(ni?)の例：

 abta=qu+n'\_i(19:24) 「やられたのは」

 ire=gč'i+n'\_i(29:24) 「来る人は」

「文書 C」に現れる例：

語尾 inü/in'ü の例：

beleg inü(28:1) 「彼の贈り物は」

語尾 anu(an'u) の例：

bosu-yi an'u(19:9) 「その他の物を」

「文書 A」、「文書 B」の、第 3 人称には n'i(ni) が大多数を占めるが「文書 C」には n'i(ni) がなく、inü(in'ü)、anu(an'u) が現れる。「文書 A」、「文書 B」に現れた n'i(ni) は口語の露出の可能性はある。

モンゴル語檔案文書に、古典式モンゴル文語にない人称所属語尾が現れたのは口語の露出であると考えられる。この口語の露出は現代モンゴル語では文語として定着した可能性はある。現代モンゴル文語の人称所属語尾は、第 1 人称の単数は mini、複数は mani、第 2 人称の単数は čini、複数は tani、第 3 人称は ni (単数複数の区別がない) である。

### 3.3 動詞の活用語尾

古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書の動詞の活用語尾を比較すると、相違点が多く現れる。表 32 は古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる名詞の曲用語尾の比較である。モンゴル語檔案文書の命令形の第 1 人称と第 3 人称、終止形の現在未来語尾、過去語尾及び条件、譲歩、並列、目的を表わす副動詞形語尾に、古典式モンゴル文語にない語尾、あるいは使われる頻度が異なる語尾が現れる(表では網かけをした箇所)。古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる形動詞形語尾と連合、分離、限界、継続、随伴を表わす副動詞形語尾の使い方に目立つ違いは認められない。

表 32. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書の動詞の活用語尾の比較

		古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書
命令形	第 1 人称	=y_a/=y_e	
		=suγai/=sügei	なし
		なし	=su/=sü
	第 2 人称	=∅(ゼロ)	
		=γtun/=gtün	なし
	第 3 人称	=tuγai/=tügei(=tuγ'ai)	
		=γasai/=gesei	=gesei
			=usai、=sai/=sei、=güsei
		=γuǰai/=güǰei	=γ'uǰai、=γ'uǰin
終止形	現在未来語尾	=mui/=müi	

			=nam/=nem(通常現れない)	=nam/=nem (多く使われる)	
			=yu/=yü		
		なし		=m, =mu	
		なし			
	過去語尾		=ba/=be		
			=bai/=bei	なし	
			=luya/=lüge		
		なし		=la/=le, =jam/=jem, =bam	
		=juqui/=jüküi (=čuqui/=čüküi)	=či		
形動詞 形語尾	行為 主	単数	=γči/=gči		
		複数	=γčin/=gčin		
		予定	=qu/=kü, =qui/=küi		
		完了	=γsan/=gsen		
副動詞 形語尾	条件		=basu/=besü		
		なし		=sa, =qula/=küle	
	譲歩		=baču/=bečü	なし	
		なし		=bači/=beči, =ba	
	並列		=ju/=jü		
			=ču/=čü		
		なし		=ji, =či	
		連合	=n		
		分離	=γad/=ged		
		限界	=tala/=tele		
		継続	=γsayar/=gseger		
		随伴	=qul, =qula/=küle		
	目的		=r_a/=r_e		
		なし		=qar	

### 3.3.1 命令形語尾

古典式モンゴル文語には第1人称の主語に呼応する語尾=y\_a/=y\_e、=suyai/=sügei が使われ、第2人称の主語に呼応する語尾=Ø(ゼロ)、=γtun/=gtün が使われ、第3人称の主語に呼応する語尾=tuyai/=tügei、=γasai/=gesei、=γužai/=güžei が使われる。

#### (1) 第1人称に呼応する命令形語尾

モンゴル語檔案文書の第1人称に呼応する命令形語尾には=y\_a/=y\_e と=su/=sü が現れる。「文書A」には、=y\_a/=y\_e が25回、=sü が1回現れる。

「文書 B」には、=y\_a/=y\_e が 76 回、=su/=sü が 6 回現れる。

「文書 C」には、=y\_a/=y\_e が 3 回現れる。古典式モンゴル文語と「文書 A」「文書 B」「文書 C」に現れる第 1 人称に呼応する命令形語尾比較を表で示せば、表 33 の通りである（古典式モンゴル文語と異なる語尾は網掛けをした箇所）。

表 33. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる第 1 人称に呼応する命令形語尾の比較

古典式モンゴル文語	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
=y_a/=y_e	=y_a/=y_e 25 回	=y_a/=y_e 76 回	=y_a/=y_e 3 回
=suyai/=sügei	なし	なし	なし
なし	=sü 1 回	=su/=sü 6 回	なし

例：

「文書 A」に現れる例：

語尾=y\_a/=y\_e の例：

morda=y\_a(6:5) 「出征しよう」      ög=gü=y\_e(11:3) 「与えよう」

語尾=sü の例：

ire=sü(35:1) 「来よう」

「文書 B」に現れる例：

語尾=y\_a/=y\_e(\_y\_e) の例：

jöly'alč'a=y\_a(40:10) 「互いに合おう」      ög=gü=y\_e(44:12) 「与えよう」

kele=\_y\_e(42:5) 「言おう」

語尾=su/=sü の例：

morda=su(47:12) 「出征しよう」      kelelč'e=sü(33:10) 「話合おう」

「文書 C」には現れる例：

語尾=y\_a/=y\_e の例：

ala=y\_a(10:6) 「殺そう」      üje=y\_e(15:5) 「見よう」

モンゴル語檔案文書の第 1 人称に呼応する命令形語尾には、古典式モンゴル文語にない語尾=su/=sü が現れる。語尾=su/=sü は先古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語に使われる語尾である。N.Poppe(1954)は口語と見なし、古典式モンゴル文語から除外された可能性がある。

(2) 第 3 人称に呼応する命令形語尾

古典式モンゴル文語の第 3 人称に呼応する命令形語尾は=tuγai/=tügei、=γasai/=gesei、=γuǰai/=güǰei である。

モンゴル語檔案文書の第 3 人称に呼応する命令形語尾には=tuγ'ai/=tügei、=usai、=sai/=sei、=gesei、=güsei、=γ'uǰai、=γ'uǰin が現れる。

「文書 A」には語尾=tuγ'ai/=tügei が 45 回、=usai、=gesei、=güsei は 1 回ずつ現れる。

「文書 B」には=tuγ'ai/=tügei が 24 回、=sai/=sei が 5 回、=gesei、=güsei、=γ'uǰai、=γ'uǰin がそれぞれ 1 回ずつ現れる。

「文書 C」に現れない。

古典式モンゴル文語と「文書 A」「文書 B」に現れる第 3 人称に呼応する命令形語尾比較を表で示せば、表 34 の通りである(古典式モンゴル文語と異なる語尾は網掛けをした箇所)。

表 34. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる第 3 人称に呼応する命令形語尾の比較

古典式モンゴル文語	「文書 A」	「文書 B」
=tuγai/=tügei	=tuγ'ai/=tügei 45 回	=tuγ'ai/=tügei 24 回
=γasai/=gesei	=gesei 1 回、 <u>=güsei</u> 1 回	=gesei 1 回、 <u>=güsei</u> 1 回
=γuǰai/=güǰei	なし	=γ'uǰai 1 回、 <u>=γ'uǰin</u> 1 回
なし	<u>=usai</u> 1 回	なし
なし	なし	<u>=sai/=sei</u> 5 回

例：

「文書 A」に現れる例：

語尾=tuγ'ai/=tügei の例：

yabu=tuγ'ai(41:4)「行くがよい」      ög=tügei(38:16)「与えるがよい」

語尾=usai の例：

ab=usai(6:3)「取るがよい」

語尾=gesei の例：

ög=gesei(11:4)「与えるがよい」

語尾=güsei の例：

ög=güsei(5:2)「与えるがよい」

「文書 B」に現れる例：

語尾=tuγ'ai/=tügei の例：

yabu=tuγ'ai (46:6) 「行くがよい」      ög=tügei (58:11) 「与えるがよい」

語尾=sai/=sei の例：

morda=sai (21:17) 「出征するといいな」      ög=gü=sei (47:6) 「与えればいいな」

語尾=gesei の例：

ile=gesei (55:8) 「派遣するといいな」

語尾=güsei の例：

ög=güsei (58:10)

語尾=γ'uǰai の例：

ala=γ'uǰai (13:29) 「殺されないように」

語尾=γ'uǰin の例：

bol=γ'uǰin (29:40) 「させないように」

「文書 C」に現れない。

モンゴル語檔案文書の第 3 人称に呼応する命令形語尾には、古典式モンゴル文語にない語尾=usai、=sai/=sei、=güsei、=γ'uǰin が現れる。

語尾=usai と=sai/=sei は口語の露出の可能性はある。現代モンゴル口語では、文語の語尾=γasai/=gesei は[a:sæ:] [ə:sæ:] [o:se:] など母音調和によって発音される。モンゴル語檔案文書が書かれる当時の口語ではこのような発音があった可能性がある。これにより、モンゴル語檔案文書には、表記のゆれが生じた可能性がある。語尾=usai と=sai/=sei は口語の露出の可能性はある。

語尾=güsei は、また口語の影響で、母音調和によって発生したと考えられる。「文書 A」と「文書 B」に 1 回ずつ現れ、両方の語幹は ög=「あげなさい」であり、第一音節の円唇母音の影響で、=gesei ではなく、=güsei が書かれたと考えられる。

語尾=γ'uǰin は、1 回現れる。これは、従来の文法書には、滅多に言及されていない語尾である。服部四郎によれば、「語尾=γuǰai/=güjei の代わりに、=γuǰin/=güǰin という形が用いられることもある」<sup>28</sup>としている。

---

<sup>28</sup> 服部四郎(昭和六十二) 297 頁。

### 3.3.2 終止形語尾

終止形語尾は、文の述語になり文を終止させる動詞に付く語尾を言う。時制によって、現在未来語尾と過去語尾に分けられる。

#### (1) 現在未来語尾

古典式モンゴル文語には=**mui**/**müi**、=**nam**/**nem**、=**yu**/**yü** の 3 種類の語尾が使われる。N.Poppe(1954)によれば、「語尾=**mui**/**müi** と語尾=**yu**/**yü** が多く使われるが、語尾=**nam**/**nem** は通常使われない語尾である」<sup>29</sup>。

モンゴル語檔案文書には、=**m**、=**mu**、=**müi**、=**yü**、=**nam**/**nem**(=**n'am**/**n'em**)の 5 種類の語尾が現れる。

「文書 A」に現れる現在未来形語尾の内、数多く現れるのは語尾=**nam**/**nem**(=**n'am**/**n'em**)であり、40 回現れる。数少なく現れるのは=**müi** であり、1 回しか現れない。そのほかに先古典式モンゴル文語に使われていた語尾=**m** は 7 回、=**mu** は 2 回現れる。

「文書 B」には=**m** が 25 回、=**mu**/**mü** が 12 回、=**mui**/**müi** が 2 回、=**yü** が 1 回、=**n'am** (=nam)/=**n'em**(=nem)が 170 回使われる。

「文書 C」には=**m** が 1 回、=**n'am** (=nam)/=**n'em**(=nem)が 3 回現れる。

古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる現在未来語尾の比較は表 35 の通りである(古典式モンゴル文語と異なる語尾は網掛けをした箇所)。

表 35. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる現在未来語尾の比較

古典式モンゴル文語	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
= <b>mui</b> / <b>müi</b>	= <b>müi</b> 1 回	= <b>mui</b> / <b>müi</b> 2 回	なし
= <b>nam</b> / <b>nem</b> (通常現れない)	= <b>nam</b> / <b>nem</b> (= <b>n'am</b> / <b>n'em</b> ) 40 回	= <b>nam</b> / <b>nem</b> (= <b>n'am</b> / <b>n'em</b> ) 170 回	= <b>nam</b> / <b>nem</b> (= <b>n'am</b> / <b>n'em</b> ) 3 回
= <b>yu</b> / <b>yü</b>	なし	= <b>yü</b> 1 回	なし
なし	= <b>m</b> 7 回	= <b>m</b> 25 回	= <b>m</b> 1 回
なし	= <b>mu</b> 2 回	= <b>mu</b> / <b>mü</b> 12 回	なし

例：

「文書 A」に現れる例：

語尾=**m** の例：

ire=**m**(36:1)「来る」

語尾=**mu** の例：

san'a=**mu**(36:3)「思う」

<sup>29</sup> N.Poppe(1954) 92 頁。

語尾=*müi* の例 :

*öč'i=müi* (4:3) 「捧げる」

語尾=*nam/=nem(=n'am/=n'em)* の例 :

*amałda=n'am* (4:11) 「誓う」

*ge=nem* (26:4) 「そうだ」

「文書 B」に現れる例 :

語尾=*m* の例 :

*öjegde=m* (28:6) 「見られる」

*eč'i=m* (29:35) 「行く」

語尾=*mu/=mü* の例 :

*törü=mü* (40:8) 「生じる」

*ayıl ad=du=mu* (48:29) 「仰る」

語尾=*mui/=müi* の例 :

*ayıl adqa=mui* (20:2) 「上奏する」

*öč'i=müi* (7:3) 「言う」

語尾=*yü* の例 :

*kemegde=yü* (43:10) 「言われている」

語尾=*n'am (=nam)/ =n'em(=nem)* の例 :

*bayi=nam* (18:9) 「ある」

*yabu=n'am* (29:8) 「行く」

「文書 C」に現れる例 :

語尾=*m* の例 :

*γ'ar=u=m* (14:11) 「出る」

語尾=*n'am (=nam)/ =n'em(=nem)* の例 :

*ǰobay'a=nam* (14:1) 「苦しめる」

*yay'ara=n'am* (15:5) 「急ぐ」

*kelelč'e=n'em* (18:8) 「話す」

モンゴル語檔案文書に使われている現在未来語尾=*m* の現れる回数は語尾=*müi* と=*mu* の現れる回数より多い。また、古典式モンゴル文語に通常使われない=*nam/=nem* は、モンゴル語檔案文書に数多く使われるのは当時の口語の露出であると考えられる。

終止形の現在未来語尾=*m* はモンゴル系の言語である保安語とモンゴル語に使われてい



る。また、モゴール語には、語尾=m と=nam/=nem が使われている<sup>30</sup>。

語尾=nam/=nem は連合副動詞語尾-n と a-mu<a-mui との連合と見なしている<sup>31</sup>。小沢によれば、語尾=nam/=nem は 17 世紀以後の文献に見られる現在未来語尾であるとしている<sup>32</sup>。しかし、先古典期モンゴル口語資料と言われるムカッディマト・アル・アダブ(Мукаддимат ал-адаб)にも語尾=m と=nam/=nem が現れる。例えば: abunam「取る」[H.H Poppe 1939 : 457]、üiledünem「～をし合う」[H.H Poppe 1939 : 376]、kürüm「着く」[H.H Poppe 1939 : 160]。

これによって考えられるのは、語尾=m と=nam/=nem はより古い時代から口語として使われていた可能性があるということである。N.Poppe によれば、「古典式モンゴル文語の文法は口語の要素が除去され、すべての矛盾が取り除かれた (the grammar of the written language was purged of colloquial elements, and all inconsistencies were eliminated)」<sup>33</sup>。そのため、古典式モンゴル文語では口語的要素の=m が排除されたと考えられる。

## (2) 過去語尾

古典式モンゴル文語の終止形の過去語尾には=ba/=be、=bai/=bei、=luγ\_a/=lüge、=juqui/=jüki (=čuqui/=čüki)がある。

モンゴル語檔案文書の過去形語尾には=ba/=be、=bei、=la/=le、=lüge、=či、=bam、=jam/=jem が現れる。

「文書 A」には、=ba/=be が 89 回、=la/=le が 7 回、=lüge が 1 回、=či が 1 回、=bam が 1 回、=jam/=jem が 4 回現れる。

「文書 B」には、=ba/=be が 257 回、=bei が 1 回、語尾=la/=le(=l\_a)が 17 回、=jam/=jem が 7 回、このほかに=b に疑問詞 üü が付いた形=b+üü が 1 回現れる。

「文書 C」には、=ba/=be が 141 回、=jam が 1 回現れる。

古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる過去語尾の比較は表 36 の通りである(古典式モンゴル文語と異なる語尾は網掛けをした箇所)。

<sup>30</sup> 舍・羅布蒼旺丹勒・宝魯特(1991) 412 頁。

<sup>31</sup> M.H. 奥尔洛夫斯卡娅著 郭守祥译(2004) 92 頁。

<sup>32</sup> 小沢重男(1997) 133 頁。

<sup>33</sup> N.Poppe (1954) 3 頁。

表 36. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる過去語尾の比較

古典式モンゴル文語	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
=ba/=be、=bai/=bei	=ba/=be 89回	=ba/=be 257回 =bei 1回 =b+üü 1回	=ba/=be 141回
=luγa/=lüge	=lüge 1回	なし	なし
=juqui/=jüki (=čuqui/=čüki)	なし	なし	なし
なし	=la/=le 7回	=la/=le(=l_a) 17回	なし
なし	=či 1回	なし	なし
なし	=bam 1回	なし	なし
なし	=jam/=jem 4回	=jam/=jem 7回	=jam 1回

例：

「文書 A」に現れる例：

語尾=ba/=be の例：

dobtul=ba 「攻撃した」      ire=be 「来た」      kelelče=be 「協議した」

語尾=la/=le の例：

yabu=la 「行った」      ire=le 「来た」

語尾=lüge の例：

bö=lüge 「…である」

語尾=či の例：

ab=č'i 「取った」

語尾=bam の例：

ab=u=bam(25:3) 「取ったのか」

語尾=jam/=jem の例：

bol=jam(32:8) 「～になった」      ire=jem(34:2) 「来た」

jarla=jam(8:3) 「命令した」

「文書 B」に現れる例：

語尾=ba/=be の例：

bari=ba(43:3) 「捧げた」      ilege=be(45:3) 「派遣した」

語尾=*bei* の例 :

öč'i=*bei* (43:17) 「言った」

語尾=*la/=le(=l\_a)* の例 :

morda=*la* (47:09) 「出征した」      ge=*le* (53:13) 「～と言った」

語尾=*b+üü* の例 :

i lege=*b+üü* (19:14) 「派遣したか」

語尾=*jam/=jem* の例 :

γ'uyu=*jam* (52:19) 「請求した」      eč'i=*jem* (58:19) 「行った」

「文書 C」に現れる例 :

語尾=*ba/=be* の例 :

ab=*u=ba* (17:10) 「取った」      ög=*be* (48:25) 「与えた」

語尾=*jam* の例 :

baγ'u'lγ'a=*jam* (48:4) 「下した」

モンゴル語檔案文書に現れる過去形語尾=*ba/=be* と=*bei* は古典式モンゴル文語の=*ba/=be* と=*bai/=bei* に対応し、語尾=*la/=le* と=*lüge* は古典式モンゴル文語の語尾=*luγa/=lüge* に対応する。語尾=*či* は古典式モンゴル文語の=*čuqui/=čüküi* (= *juqui/=jüküi*) に対応する。

古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる動詞の終止形の過去語尾の対応を表で示せば、表 37 の通りである。

表 37. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる過去語尾の対応

古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書
= <i>ba/=be</i> 、= <i>bai/=bei</i>	= <i>ba/=be</i> 、= <i>bei</i>
= <i>luγa/=lüge</i>	= <i>la/=le</i> 、= <i>lüge</i>
= <i>juqui/=jüküi</i> (= <i>čuqui/=čüküi</i> )	= <i>či</i>

現代モンゴル文語では、過去語尾に=*ji/=či*、=*jai/=jei* (= *čai/=čei*)、=*ba/=be* が使われる。=*ji/=či* はその後に助詞や別の動詞が後続する場合に用いられ、[-*dʒ*]/[-*tʃ*]と発音される。=*jai/=jei* (= *čai/=čei*) は文末で使う形であり、[-*dʒe:*] (-*tʃe:*)と発音される。=*ba/=be*

は文語的な形であり、口語では使われず疑問や物語を叙述する場合に使われる<sup>34</sup>。

モンゴル語檔案文書に現れた語尾=*či* は現代モンゴル文語の過去語尾=*ji/=či* に対応する。モンゴル語檔案文書に現れる過去語尾=*či* は後ろに動詞 *genem* 「～と言う」が付く形で現れている。現代モンゴル文語と同じ使い方を持つ。17世紀前半の口語では過去語尾[-*dʒ*]/[-*tʃ*]があった可能性がある。そのため、文語では古典式モンゴル文語と違った語尾=*ji/=či* が書かれたと考えられる。この表記が現代モンゴル文語に定着した可能性がある。

現代モンゴル文語では動作の始まる場合と終わる場合を表わす動詞語尾=*la/=le* があり、母音調和によって[-*laː*, -*ləː*, -*loː*, -*loː*]と発音される。モンゴル語檔案文書に現れた過去語尾=*la/=le* は現代モンゴル文語の過去語尾=*la/=le* に対応する。17世紀前半の口語では過去語尾[-*laː*, -*ləː*, -*loː*, -*loː*]があった可能性がある。そのため、文語では古典式モンゴル文語と違った語尾=*la/=le* が書かれたと考えられる。この表記が現代モンゴル文語に定着した可能性がある。

古典式モンゴル文語に現れない語尾=*bam* と=*jam/=jem* があり、「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の三つの文献において、語尾=*bam* は1回現れ、=*jam/=jem* は計12回現れる。

#### 語尾=*bam* について

語尾=*bam* は従来の文法書に取上げられていない語尾である。語尾=*bam* は過去語尾=*ba* に疑問を表わす助詞 *m* がついた形であると考えられる。例：*ab=u=bam*(25:3)

*ab=u=bam* は次の文に現れる：*qoyar olbuy qoyar n'umu\_tai-yi ab=či ge=n'em čay'aǰa n'ige\_tü ulus bayi=tal\_a yay'un-d'u ab=u=bam..* 「二領の綿甲、二張の弓を取ったという。法度が一つの国でありながら、何で奪ったのか。」

#### 語尾=*jam/=jem* について

語尾=*jam/=jem* について、M.H. Орловская(1984)は=*mǰa* の音韻転換で生じたとしている。=*m* は現在未来を表わすため、現在未来を表わすはずだが、モンゴル語檔案文書では、過去を表している。「文書 A」に現れる例では満洲語の傍訳に過去を表わす訳が付されている。例えば：

*ǰarla=jam*(8:3) :

*ǰarla=jam* は次の文に現れる。*oruy'ul=u=γsan ulus-un yay'un amitai-yi buliya=ǰu tata=ǰu yabu=qula tegün-ni ala= ge=ǰü ǰarla=jam..* 「降伏させた人々の何ら命あるものを奪い取って行くなれば、その者を殺せと命じた」

*ǰarla=jam* は満洲語の傍訳は *henduhebi* 「命令した」である。

*ire=jem*(34:2) :

*ire=jem* は次の文に現れる：*Čaqar-Yin qay'an törü=gseñ törül-iyen güñ ala=ǰu üle=gseñ*

<sup>34</sup> 清格爾泰(1991) 260-265頁。

törül tan+I Ğarm\_a.. törül-d'egen n'eyile=y\_e ge=jü ire=jem bisi+ü.. 「チャハルのハーンは（自分の）肉親をすべて殺して、残った親戚（←汝らの）ガルマは、（自分の）親戚と一緒になろうとやって来たのではないか。」

ire=jem bisi+ü の満洲語の傍訳は jihebikai 「来たのだ」である。

### 3.3.3 副動詞形語尾

副動詞形語尾の条件副動詞語尾、譲歩副動詞語尾、並列副動詞語尾、目的副動詞語尾には古典式モンゴル文語にない語尾が使われる。

#### (1) 条件副動詞語尾

古典式モンゴル文語には語尾=basu/=besü =bala/=bele が現れる。

モンゴル語檔案文書の条件副動詞には語尾=basu/=besü、=sa、=qula/=küle(=qu<sub>l</sub>\_a/=kü<sub>l</sub>\_e)、=gesü が現れる。語尾=sa はすべて語幹 bol に付き、間に介母音 u が入る。

「文書 A」には=basu/=besü は 9 回、=sa は 17 回、=qula/=küle(=qu<sub>l</sub>\_a/=kü<sub>l</sub>\_e) は 134 回現れる。

「文書 B」には=basu/=besü は 8 回、=sa は 34 回、=qula/=küle(=qu<sub>l</sub>\_a/=kü<sub>l</sub>\_e) は 121 回現れる。

「文書 C」には=gesü は 1 回現れる。古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる条件副動詞語尾の比較を表で示せば、表 38 の通りである(古典式モンゴル文語と異なる語尾は網かけをした箇所)。

表 38. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる条件副動詞語尾の比較

古典式モンゴル文語	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
= <u>basu/=besü</u> = <u>bala/=bele</u>	= <u>basu/=besü</u> 9 回	= <u>basu/=besü</u> 8 回	なし
なし	= <u>sa</u> 17 回	= <u>sa</u> 34 回	なし
なし	= <u>qula/=küle(=qu<sub>l</sub>_a/=kü<sub>l</sub>_e)</u> 134 回	= <u>qula/=küle(=qu<sub>l</sub>_a/=kü<sub>l</sub>_e)</u> 121 回	なし
なし	なし	なし	= <u>gesü</u> 1 回

「文書 A」に現れる例：

語尾=basu/=besü の例：

yabu=basu(3:7) 「行けば」

jaruyda=basu(1:2) 「遣わされれば」

語尾=**sa** の例 :

**bol**=**u**=**sa**(10:2) 「～になれば」

語尾=**qula**/**küle**(=**qul\_a**/**kül\_e**)の例 :

**yabu**=**qula**(3:4) 「行けば」      **köge**=**küle**(13:3) 「追い立てるならば」

**morda**=**qul\_a**(15:3) 「出征するならば」      **ebde**=**kül\_e**(4:16) 「破るならば」

「文書 B」に現れる例 :

語尾=**basu**/**besü** の例 :

**bol**=**basu**(43:13) 「～になれば」

**ol**=**basu**(58:20) 「見つければ」

語尾=**sa** の例 :

**bol**=**u**=**sa**(14:9) 「～になれば」

語尾=**qula**/**küle**(=**qul\_a**/**kül\_e**)の例 :

**morda**=**qula**(49:36) 「出征すれば」

**ire**=**küle**(49:40) 「到着すれば」

「文書 C」に現れる例 :

語尾=**gesü** の例 :

**bü**=**gesü**(9:21) 「～ならば」

特徴的なのは、「文書 A」と「文書 B」では一番多く現れるのは語尾=**qula**/**küle** である。また語尾=**sa** が動詞 **bol**=だけに付いて現れる。

語尾=**sa** はモンゴル語檔案文書では語幹 **bol**=だけに付き、介入母音-**u**-が入り、**bolusa**「～ならば」になっている。M.H.奥尔洛夫斯卡娅によれば、「17 世紀に書かれたモンゴル年代記である『黄金史』に幾つかの例外を除けば語尾=**sa** は、すべて語幹 **bol**=に限って使われる」<sup>35</sup>。先古典期モンゴル口語資料とも言われる『元朝秘史』では、語幹 **bol**=に付く条件副動詞語尾は=**asu** であり、介入母音が入り、**boluasü** になっている<sup>36</sup>。語尾=**sa** は現代モンゴル語に無い形である。語尾=**sa** と関係があると考えられる条件副動詞語尾がモンゴル系の言語であるダグル語(-**a:s**, -**e:s**, -**ə:s**, -**o:s**)、東郷語(-**se**)、保安語(-**sə**)に見られる。これにより、語尾=**sa** は口語の露出の可能性があり、古典式モンゴル文語では口語的要素の語尾=**sa** が除外されたと考えられる。

語尾=**qula**/**küle** はモンゴル語檔案文書の中では最も多く使われる語尾であり、意味的には他の語尾=**basu**/**besü**、=**sa** と区別がない。語尾=**qula**/**küle** に関して、N.Poppe(1954)

<sup>35</sup> M.H.奥尔洛夫斯卡娅著 郭守祥译 (2004) 167 頁。

<sup>36</sup> 栗林均(2009) 75 頁。

によれば、古典式モンゴル文語では、語尾=*qula*/*küle* は随伴副動詞語尾として使われ、時には条件副動詞語尾として使われていた。それは古典式モンゴル文語に存在しない典型的な口語形である」<sup>37</sup>としている。確かに、「文書 A」では語尾=*qula*/*küle* は条件副動詞語尾(「～すれば」)以外に随伴副動詞語尾(「～してから、～したらすぐ」としても読み取れる例が現れる。例えば：

tabun n'oyad *ire=küle* jöble=küi-yin tulada.. qay'an-du elči yay'ara=ju jaru=y\_a..  
 「五人のノヤン達が到着したら、相談するために、ハーンに使者を急いで遣わそう。」

以上のことから、モンゴル語檔案文書に古典式モンゴル文語にない条件副動詞語尾が現れるのは口語的要素が含まれるからであると考えられる。

## (2) 譲歩副動詞語尾

古典式モンゴル文語の譲歩副動詞には語尾=*baču*/*bečü* が現れる。

モンゴル語檔案文書の譲歩副動詞語尾には語尾=*bači*/*beči* のほか、終止形の過去語尾=*ba* で譲歩の意味を表す場合がある<sup>38</sup>。「文書 A」には=*bači* と=*ba* がそれぞれ 2 回現れる。「文書 B」には、=*bači* が 10 回現れる。「文書 C」には譲歩副動詞が現れない。古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる譲歩副動詞語尾の比較を表で示せば、表 39 の通りである(古典式モンゴル文語と異なる語尾は網かけをした箇所)。

表 39. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる譲歩副動詞語尾の比較

古典式モンゴル文語	「文書 A」	「文書 B」
= <i>baču</i> / <i>bečü</i>	なし	なし
なし	= <i>bači</i> 2 回	= <i>bači</i> 10 回
なし	= <i>ba</i> 2 回	なし

「文書 A」に現れる例：

語尾=*bači* の例：

oru=*bač'i* (31:9) 「投降しても」 čida=*bač'i* (39:6) 「出来ても」

終止形の過去語尾=*ba* で譲歩を表す例：

bide+*č'i* bol=*ba* (10:7) 「我等でも」

<sup>37</sup> N.Poppe (1954) 98 頁。

<sup>38</sup> 子音字<č>の字形の区別による転写と或いはč'を例の中だけに示すようにした。

「文書 B」に現れる語尾=**bači**/**beči** の例:

yabu=**bač**'i (51:17) 「行っても」      ög=**beč**'i (56:10) 「与えても」

譲歩副動詞語尾において、「文書 A」と「文書 B」には古典式モンゴル文語と違った語尾=**bači**/**beči** が現れる。

現代モンゴル文語の譲歩副動詞語尾は古典式モンゴル文語と同様に=**baču**/**bečü** である。現代モンゴル口語では語尾=**baču**/**bečü** の発音は[-**btʃ**]である<sup>39</sup>。現代モンゴル口語では語尾末の母音字が脱落し、発音されない。17世紀前半の口語でも、語末の母音が明瞭に発音されなく、現代モンゴル口語の[-**btʃ**]と近い音で発音されていた可能性がある。こうして、語尾に=**bači**/**beči** という形が書かれたものと推定することができる。

つまり、モンゴル語檔案文書に古典式モンゴル文語と違った語尾=**bači**/**beči** が現れたのは当時の口語的要素が反映されたものであると考えられる。

### (3) 並列副動詞語尾

古典式モンゴル文語の並列副動詞には語尾=**ju**/**jü**、=**ču**/**čü** が現れる。

モンゴル語檔案文書の並列副動詞には語尾=**ju**/**jü**、=**ji**、=**ču**/**čü**、=**či** が現れる。モンゴル語檔案文書の子音字<j>、<č>の字形は区別なく使われるが、本論文では、子音字 n、m、l、ng と母音字で終わる語幹に付く副動詞語尾は=**ju**/**jü** と=**ji** と転写する。子音字 b、g、γ、r、s、d で終わる語幹に付く副動詞語尾は=**ču**/**čü** と=**či** と転写する。

「文書 A」には=**ju**/**jü** は 231 回、=**ji** は 30 回、=**ču**/**čü** は 34 回、=**či** は 24 回現れる。

「文書 B」には=**ju**/**jü** は 447 回、語尾=**ji** は 235 回、=**ču**/**čü** は 71 回現れ、=**či** は 38 回現れる。

「文書 C」には=**ju**/**jü** は 153 回、語尾=**ji** は 2 回、語尾=**ču**/**čü** は 11 回、=**či** は 7 回現れる。古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書の並列副動詞語尾の比較を表で示せば、表 40 の通りである(古典式モンゴル文語と異なる語尾は網かけをした箇所)。

表 40. 古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる並列副動詞語尾の比較

古典式モンゴル文語	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
= <b>ju</b> / <b>jü</b>	= <b>ju</b> / <b>jü</b> 231 回	= <b>ju</b> / <b>jü</b> 447 回	= <b>ju</b> / <b>jü</b> 153 回
= <b>ču</b> / <b>čü</b>	= <b>ču</b> / <b>čü</b> 34 回	= <b>ču</b> / <b>čü</b> 71 回	= <b>ču</b> / <b>čü</b> 71 回
なし	= <b>ji</b> 30 回	= <b>ji</b> 235 回	= <b>ji</b> 2 回
なし	= <b>či</b> 24 回	= <b>či</b> 38 回	= <b>či</b> 7 回

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる並列副動詞語尾の種類が一致ため、ここでは、「文書 A」に現れる例を示す。

<sup>39</sup> 清格爾泰(1991) 282 頁。



例：

語尾= $\text{j}u/\text{j}ü$  の例：

$\text{bari}=\text{j}u(2:6)$  「持つて」       $\text{üje}=\text{j}ü(3:5)$  「見て」

語尾= $\text{j}i$  の例：

$\text{qari}=\text{j}i(5:5)$  「帰つて」       $\text{ire}=\text{j}i(6:2)$  「来て」

語尾= $\text{č}u/\text{č}ü$  の例：

$\text{ab}=\text{č}'u(7:4)$  「取つて」       $\text{ög}=\text{č}'ü(15:11)$  「与えて」

語尾= $\text{č}i$  の例：

$\text{kür}=\text{č}'i(20:4)$  「着いて」       $\text{ab}=\text{č}'i(22:2)$  「与えて」

語尾= $\text{j}i$  は語尾= $\text{j}u/\text{j}ü$  の口語の現われであり、語尾= $\text{č}i$  は語尾= $\text{č}u/\text{č}ü$  の口語の現われであると考えられる。N.Poppe(1954)でも「語尾= $\text{j}i$  と= $\text{č}i$  は非古典式モンゴル語 (non-classical language) に使われ、これらの語尾が現れたのは口語の影響を受けた」<sup>40</sup>としている。

現代モンゴル文語の並列副動詞語尾は古典式モンゴル文語と同じく= $\text{j}u/\text{j}ü$ 、= $\text{č}u/\text{č}ü$  である。現代モンゴル口語での発音はそれぞれ[- $\text{dʒ}$ ]と[- $\text{tʃ}$ ]であり、語尾末の母音が脱落している。現代モンゴル口語の発音から推測すれば、17世紀前半の口語でも語末の母音は明瞭に発音されていなかった可能性がある。従って、これらは当時の口語の露出であると考えられる。

「文書 A」、「文書 B」には口語的要素である語尾= $\text{j}i$ 、= $\text{č}i$  が数多く現れるが、「文書 C」には文語的表記である= $\text{j}u/\text{j}ü$  が 153 回現れるに対し、口語的要素の現われである= $\text{j}i$  が 2 回しか現れない。

#### (4) 目的副動詞語尾

古典式モンゴル文語の目的副動詞語尾には= $\text{r}_a/\text{r}_e$  がある。

モンゴル語檔案文書には、語尾= $\text{r}_a/\text{r}_e$  の他、= $\text{qar}$  が現れ、1 回現れる。これは、「文書 B」に現れる語尾であり、「文書 A」と「文書 C」に現れない。

例：

「文書 B」に現れる例：

$\text{alagda}=\text{qar}(38:29)$  「殺されるため」

---



<sup>40</sup> N.Poppe (1954) 96 頁。

現代モンゴル文語の目的を表わす副動詞語尾は=qar/=kerである。現代モンゴル口語では[xa:r]、[xə:r]などに母音調和によって発音される。ここで現れた目的副動詞語尾=qarは口語的要素の可能性があると考えられる。


### 3.4 まとめ

本章では、古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書に現れる文法的語尾を比較することにより、モンゴル語檔案文書には古典式モンゴル文語にない文法的語尾が多く含まれることが分かった。これらの語尾の中には、先古典式モンゴル文語に使われていた語尾があるほか、多くの語尾は口語的な要素と見なすことができる語尾である。この口語的要素は先古典期モンゴル語の口語資料に現れる文法的語尾と対応するほか、多くの場合には現代モンゴル口語と対応する。「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の文法的語尾を比較すると「文書 C」には、口語的な要素が少なく、古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範に近い。

名詞の曲用語尾の中では、古典式モンゴル文語の語尾と異なり、先古典式モンゴル文語に現れる文法的語尾と考えられるのは、造格語尾+bar/+ber、奪格語尾+ča/+če、-n'asa、-teče/-t'eče/+teče、再帰所属語尾+ban/+benである。

先古典期モンゴル語の口語資料に現れる文法的語尾と対応すると考えられるのは、与位格語尾に数多く現れる語尾 -tu/-tü(-d'u/-d'ü)、 -du/-dü(-t'u/-t'ü)、共同格語尾に現れる語尾-la/-le(+la/+le)である。

現代モンゴル口語と対応すると考えられる、モンゴル語檔案文書に現れる古典式モンゴル文語と異なる文法的語尾は、格語尾の属格、対格、奪格、共同格に現れる。所属語尾の再帰所属語尾、人称所属語尾の第1人称、第2人称、第3人称のすべてに現れる。

モンゴル語檔案文書である「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる名詞の曲用語尾を比較すると、与位格語尾の -du/-dü(-t'u/-t'ü)が「文書 C」に多く使われ、現代モンゴル文語の規範と近いことがわかった。また、「文書 A」、「文書 B」の対格語尾、奪格語尾には数多くの口語的要素が現れるが「文書 C」には現れない。

動詞の活用語尾の中では、古典式モンゴル文語と異なり、先古典式モンゴル文語に現れる文法的語尾が使われていると考えられるのは、命令形の第1人称に呼応する語尾=su/=sü、終止形の現在未来語尾=muである。

先古典期モンゴル語の口語資料に現れる文法的語尾と対応すると考えられる、モンゴル語檔案文書に現れる文法的語尾は、終止形の現在未来語尾=nam/=nem(=n'am/=n'em)、=mである。

現代モンゴル口語と対応すると考えられる、モンゴル語檔案文書に現れる古典式モンゴル文語と異なる文法的語尾は、命令形の第3人称に呼応する語尾、終止形の過去語尾、副動詞形の条件、譲歩、並列、目的を表わす副動詞語尾に現れる。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の動詞の活用語尾を比較すると、終止形の過去語尾において、「文書 A」「文書 B」には共通して口語的要素が現れるが、「文書 C」には口語的要素が現れない。また、並列副動詞において、「文書 C」には口語的要素が「文書 A」、「文書 B」より少なく現れる。

## 結 論

本研究では、17 世紀前半に書かれたモンゴル語檔案文書(以下、モンゴル語檔案文書)である『満文原檔』と『十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』におけるモンゴル語檔案文書を研究対象にして言語学的研究を行った。

『満文原檔』は、台湾の国立故宮博物院より、2005 年に出版された清太祖、太宗時代の檔案文書の写真版による複写資料集である。『満文原檔』は、ほとんどが満文(満洲語)による檔案文書であるが、一部にモンゴル語および漢語で書かれた檔案文書が含まれ、満洲モンゴルの交渉に関わるモンゴル語檔案文書が 47 件ある。これらを【1】～【47】とした。その中で、文書【1】から文書【42】までは清朝成立以前、つまり、1635 年までの檔案文書であり、文書【43】から文書【47】までは清朝成立年、つまり、1636 年以降の檔案文書である。本論では、『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書を「文書 A」とした。

『十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』は、中国第一歴史檔案館に所蔵される清朝成立以前から清朝初期にかけての対モンゴル交渉、統治に関わるモンゴル語檔案文書計 111 件を写真版で収めた資料集である。この文献は大きく 2 部に分かれる：第 1 部は、"manju mongγul-un qarilčayan-u teüken-dü qolbuγda=qu bičig debter"(満洲-モンゴル交渉の歴史に関する文書・檔案)であり、ほとんど 1636 年以前のモンゴル語檔案文書であり、61 件収録されている。第 2 部は、"dayičing ulus-un γadaγadu mongγul-un törü-yi jasa=qu yabudal-un yamun-u temdegle=gsen debter"(大清国の理藩院の記した檔案)であり、理藩院による記録が 50 件収録されている。第 1 部の内容は、清国成立前に満洲側がモンゴル側に送った文書の草稿、あるいは写し、およびモンゴル側が満洲側に送った文書の原本、あるいは写しである。第 2 部は、清朝成立後の行政機関である理藩院が、モンゴル各部からの貢品、或いは清朝からモンゴル各部への下贈品を列記したものである。本論では、第 1 部を「文書 B」とし、第 2 部を「文書 C」とした。

モンゴル語檔案文書の言語学的研究を行うことによって、その特徴を次の三つにまとめることができる。

(1) 『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書と『十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』におけるモンゴル語檔案文書の第 1 部、第 2 部の関連文献を考察することにより、これらの若干のモンゴル語檔案文書が共通して後の檔案や史書に満洲語で翻訳されていた。その翻訳過程で生じた、語句の誤った翻訳から、幾つかの檔案文書の原文はモンゴル語であったことを確認することができた。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に関する関連文献を検討した結果、それらは共通して、後の時代の檔案や史書を編纂する際に参考にされていたことがわかった。その際に、モンゴル語檔案文書が満洲語に翻訳されている。

「文書 A」の【1】は、従来の研究では見落とされていた檔案文書であり、本研究で新しく報告する文書である。

「文書 A」と「文書 B」の中の若干の檔案文書は、「満文原檔」が乾隆時代に「満文老檔」として重鈔された際に、満洲語に翻訳されて収録されている。「文書 A」では、47 件のうちの 30 件が「満文老檔」に収録されている。「文書 B」では、61 件のうちの 6 件が「満文老檔」に収録されている。

「文書 A」と「文書 B」には、同じ内容のモンゴル語檔案文書が含まれている。それは、「文書 A」の【15】と「文書 B」の【16】である。「文書 A」の【15】は、「文書 B」の【16】より内容が多く。「文書 A」の【15】の方は、そのまま満洲語に翻訳され、「満文老檔」に収録されている。







「文書 A」と「文書 B」の若干のモンゴル語檔案文書を「満文老檔」における満洲語訳と対照することによって、翻訳過程で生じた誤りから、モンゴル語檔案文書が原文である（満洲語から翻訳したものではない）ことを確認することができた。例えば、「文書 A」の【15】では、*mori ton'uy*「馬や道具」を満洲語で *morin i ton*「馬の数」と翻訳している。ここでの満洲語訳は文脈に合わない。「文書 B」の【25】は、満洲側がモンゴル側に送った文書であり、モンゴル語の *būri*「毎」を満洲語で *burtei*「全て」と翻訳している。それは、モンゴル語の *būri*「毎」を *būr*「全て」と誤ったためと考えられる。

(2) モンゴル語檔案文書の字形と文法的語尾を古典式モンゴル文語の字形と文法的語尾と比較するとモンゴル語檔案文書には、古典式モンゴル文語にない字形や文法的語尾が現れる。モンゴル語檔案文書の古典式モンゴル文語と異なる字形は、現代モンゴル文語と一致するのが多く、先古典式モンゴル文語の字形と一致する字形が少数である。古典式モンゴル文語と異なる文法的語尾は、現代モンゴル口語に対応するものが多い。つまり、現代モンゴル語の字形の基本な特徴は、モンゴル語檔案文書の字形に現れているほか、現代モンゴル語の口語的な特徴はモンゴル語檔案文書の文語中に露出する口語的な要素に現れている。







従来の研究では、16 世紀後半からのモンゴル語は、モンゴル語史において、近代モンゴル語とし、この頃のモンゴル語は「古典式モンゴル文語」によって記録されていたとみなされている。しかし、17 世紀前半に書かれたモンゴル語檔案文書の字形と文法的語尾の特徴から、それは、古典式モンゴル文語で書かれたものではないことを確認できる。

古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書の字形を比較すると、モンゴル語檔案文書には古典式モンゴル文語と一致する字形があるほか、異なる字形もある。その古典式モンゴル文語と異なる字形の大多数は、現代モンゴル文語の字形と一致し、少数は、先古典式モンゴル文語と一致する。ここでは、現代モンゴル文語と一致する字形の例を示す。

例1：母音字の頭位形







モンゴル文字の母音字<a> <e> <i> <o> <u> <ö> <ü>の頭位形は古典式モンゴル文語では、<a>、<e>、<i>、<o><u>、<ö> <ü><sup>41</sup>であり、 ačuy (アチョグ) に、他の字画を付け加えた字体である(母音字<e>の字形は ačuy (アチョグ) のみ)。

モンゴル語檔案文書の母音字の頭位形には古典式モンゴル文語と近い字形が現れる他、現代モンゴル文語に近い字形が現れる。


現代モンゴル文語の母音字の字形は、<a>、<e>、<i>、<o><u>、<ö> <ü>であり、ačuy (アチョグ) の書き出しの部分が曲がった字形()である。

母音字<a>の頭位形を見ると「文書 A」と「文書 B」には、ačuy (アチョグ) の書き出しの部分の曲がっているかどうか、また、曲がる度合いによって様々な字体が現れる。「文書 C」にはこういう変形(variant)が少ない。

母音字<a>の頭位形：

「文書 A」に現れる頭位形：① 、② 、③ 、④ 、⑤ 、⑥ 

「文書 B」に現れる頭位形：① 、② 、③ 、④ 、⑤ 

「文書 C」に現れる頭位形：① 、② 

上記の「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の母音字<a>の頭位形の古典式モンゴル文語及び現代モンゴル文語との対応を示せば、表 41 の通りである。

表 41. 母音字<a>の頭位形



























古典式モンゴル文語の字形		
現代モンゴル文語の字形		
「文書 A」	⑥ 	①  、②  、③  、④  、⑤ 
「文書 B」	④  、⑤ 	①  、②  、③ 
「文書 C」	② 	① 

表 41 に示したように、母音字<a>の頭位形では、「文書 A」の⑥ 、「文書 B」の④ 、⑤ 、「文書 C」の② は、古典式モンゴル文語に近い字形である。その他の、「文書 A」の① 、② 、③ 、④ 、⑤ 、「文書 B」の① 、② 、③ 、「文書 C」の① は、現代モンゴル文語に近い字形である。つまり、「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に共通して母音字<a>の頭位形には、古典式モンゴル文語に近い字形があれば、現代モンゴル文語に近い字形もある。

<sup>41</sup> 母音字<o>と<u>、母音字<ö>と<ü>は同じ字形を持つ。

例 2 : 子音字<n>の頭位形

古典式モンゴル文語の子音字<n>の頭位形は .ᠨ ( ᠨ ačuy (アチヨグ) に点が付いた形) である。モンゴル語檔案文書には、古典式モンゴル文語と同じ形が現れるほか、異なる形が現れる。その異なる形は、現代モンゴル文語と一致する。現代モンゴル文語の子音字<n>の頭位形は ᠨ であり、 ᠨ ačuy (アチヨグ) の書き出しの部分が曲がった形である。モンゴル語檔案文書の子音字<n>の字形には、点を持つ字形と点を持たない字形が現れるが、ここでは、点を持つ字形をあげる。

子音字<n>の頭位形の点をもつ字形：

- 「文書 A」に現れる字形：① ᠨ、② ᠨ
- 「文書 B」に現れる字形：① ᠨ、② ᠨ、③ ᠨ
- 「文書 C」に現れる字形：① ᠨ、② ᠨ、③ ᠨ

上記の「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の子音字<n>の頭位形の点を持つ形と古典式モンゴル文語、および現代モンゴル文語との対応を示せば、表 42 の通りである。

表 42. 子音字<n>の頭位形の点を持つ字形

古典式モンゴル文語の字形	.ᠨ	
現代モンゴル文語の字形		ᠨ
「文書 A」		① ᠨ ② ᠨ
「文書 B」	① ᠨ ② ᠨ ③ ᠨ	
「文書 C」	② ᠨ	① ᠨ ③ ᠨ





表 42 に示したように、「文書 B」の① ᠨ、② ᠨ、③ ᠨ、「文書 C」の② ᠨは古典式モンゴル文語と一致する形であり、それに対して「文書 A」の① ᠨ、② ᠨ、「文書 C」の① ᠨ、③ ᠨは現代モンゴル文語の子音字<n>の頭位形 ᠨ と一致する。つまり、子音字<n>の頭位形の点を持つ形には、古典式モンゴル文語の字形と一致する形もあれば、現代モンゴル文語の字形と一致する形もある。

同様に、モンゴル文語の ᠨ ačuy (アチヨグ) の書き出しの部分が曲がった形は、子音字<m>と<l>の頭位形<sup>42</sup>にもある。

- 子音字<m>の頭位形：① ᠮ、② ᠮ、③ ᠮ、④ ᠮ、⑤ ᠮ
- 子音字<l>の頭位形：① ᠯ、② ᠯ、③ ᠯ

現代モンゴル文語の子音字<m>の頭位形は ᠮ、子音字<l>の頭位形は ᠯ である。

42 「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に共通して現れる、子音字<m><l>の頭位形の字形

モンゴル語檔案文書に現れる子音字<m>の頭位形① 、② 、および子音字<l>の頭位形① 、② は現代モンゴル文語と一致する形である。

例 3：子音字<b>の末位形



古典式モンゴル文語では、子音字<b>の末位形は  である。モンゴル語檔案文書には、これと同じ字形の他、現代モンゴル文語で使われている字形  も現れる。「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に現れる子音字<b>の末位形の古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語との対応を示せば、表 43 の通りである。

表 43：子音字<b>の末位形




















古典式モンゴル文語の字形		
現代モンゴル文語の字形		
「文書 A」		
「文書 B」		
「文書 C」	なし	

表 43 で示したように、「文書 A」、「文書 B」には、二つの形  と  が現れる。 は、古典式モンゴル文語に現れる字形と一致する。 は、現代モンゴル文語に現れる字形と一致する。「文書 C」には  のみが現れ、 が現れない。ここから、モンゴル語檔案文書の子音字<b>の末位形には古典式モンゴル文語だけではなく、現代モンゴル文語の字形も現れていることがわかる。

例 4：子音字<d>の頭位形と末位形

古典式モンゴル文語では、子音字<d>の頭位形は、 d であり、末位形は、 d である。

モンゴル語檔案文書の子音字<d>の頭位形は、 (  )<sup>43</sup>d と  d' の二つの字形で現れ、末位形は、 d と  d' の二つの字形で現れる。
















現代モンゴル文語の子音字<d>の頭位形は、 d と  d' の二つの字形であり、末位形は、 d と  d' の二つの字形である。モンゴル語檔案文書の子音字<d>の頭位形と末位形の古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語との対応を示すと表 44 の通りである。

表 44. 子音字<d>の頭位形と末位形

	古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書 (文書 A、B、C)	現代モンゴル文語
頭位形		 (  ) 	 
末位形		 	 


<sup>43</sup>  は「文書 A」に現れる形であり、満洲文字の影響を受けたと考えられる。



表 44 からモンゴル語檔案文書の子音字<d>の頭位形と末位形は現代モンゴル文語の頭位形と末位形と一致していることが分かる。

例 5：子音字<y>の頭位形





子音字<y>の頭位形は、古典式モンゴル文語では、y である。モンゴル語檔案文書には二つの形、とが現れる。現代モンゴル文語では、y である。モンゴル語檔案文書に現れる子音字<y>の頭位形の古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語との対応を示せば、表 45 の通りである。

表 45. 子音字 <y>の頭位形





古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書 (文書 A、B、C)	現代モンゴル文語
	 	

表 45 からモンゴル語檔案文書には、古典式モンゴル文語と一致する字形が現れるほか、現代モンゴル文語と一致する字形も現れていることが分かる。

例 6：子音字<w>の末位形



子音字<w>の末位形は、古典式モンゴル文語に現れない。モンゴル語檔案文書には末位形w が現れ、現代モンゴル文語と同じ形(w)である。その対応を示せば、表 46 の通りである。

表 46. 子音字<w>の末位形



古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書 (文書 A、B、C)	現代モンゴル文語
なし		

表 46 からモンゴル語檔案文書には、古典式モンゴル文語に現れない子音字<w>の末位形が現れ、それは現代モンゴル文語と対応していることが分かる。

以上の例から、モンゴル語檔案文書に現れる、古典式モンゴル文語と異なるモンゴル文字の字形は、現代モンゴル文語の字形と一致することが分かる。これにより、現代モンゴル語の字形の基本的特徴は、モンゴル語檔案文書に現れていたことが分かる。

モンゴル語檔案文書には古典式モンゴル文語と一致する文法的語尾が多く用いられているが、古典式モンゴル文語にない文法的語尾も含まれる。それらの古典式モンゴル文語と

異なる文法的語尾の中には、先古典式モンゴル文語に使われていた語尾があるほか、多くの語尾は当時の、口語的要素と見なすことができる語尾である。その口語的要素は先古典期モンゴル語の口語資料に現れる文法的語尾に対応するほか、多くの場合は、現代モンゴル口語に対応する。次は、モンゴル語檔案文書に現れる、先古典期モンゴル語の口語資料に現れる文法的語尾に対応する例および現代モンゴル口語に対応する幾つかの例をあげる。

モンゴル語檔案文書に現れる、先古典期モンゴル語の口語資料に現れる文法的語尾に対応する語尾の例：

#### 例 1：与位格語尾

モンゴル語檔案文書には、古典式モンゴル文語にない与位格語尾  $\text{ᠲᠦ}-tu/-tü(-d'u/-d'ü)$ 、 $\text{ᠲᠦ}-du/-dü(-t'u/-t'ü)$  が多く現れる。これに関連して、古い口語が記されている文献資料であるムカッディマト・アル・アダブ(Мукаддимат ал-адаб)には  $-tu/-tü$ 、 $-du/-dü$  の記載がある<sup>44</sup>。例えば次の例に  $-tu/-tü$ 、 $-du/-dü$  が使われている。ᠵᠠᠷᠯᠢᠭᠲᠦ「命令に」[H.H Поппе1939:381]、ᠭᠡᠲᠦ「家に」[H.H Поппе1939:110]、ᠠᠮᠠᠨᠳᠦ「口に」[H.H Поппе1939:100]、ᠤᠭᠡᠳᠦ「言葉に」[H.H Поппе1939:128]等。モンゴル語檔案文書に数多く用いられる与位格語尾と先古典期モンゴル語の口語資料に現れる文法的語尾との対応を示せば、表 47 の通りである。

表 47. 与位格語尾の先古典期モンゴル語の口語資料に現れる文法的語尾との対応

古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書	ムカッディマト・アル・アダブ
ない	$\text{ᠲᠦ}-tu/-tü(-d'u/-d'ü)$ $\text{ᠲᠦ}-du/-dü(-t'u/-t'ü)$	$-tu/-tü$ $-du/-dü$

その対応から、モンゴル語檔案文書に数多く現れた与位格語尾  $\text{ᠲᠦ}-tu/-tü(-d'u/-d'ü)$  と  $\text{ᠲᠦ}-du/-dü(-t'u/-t'ü)$  は当時の口語の露出であると考えられる。

#### 例 2：共同格語尾

モンゴル語檔案文書には古典式モンゴル文語にない共同格語尾  $-la/-le(+la/+le)$  が現れる。それは、先古典期モンゴル口語資料と言われるムカッディマト・アル・アダブの共同格語尾  $-lā/-lē$ <sup>45</sup> に対応する。例えば、ᠪᠢᠳᠠᠨᠯᠠ「我等と」[H.H Поппе 1939:118]、ᠲᠡᠳᠡᠨᠯᠡ「彼らと」[H.H Поппе 1939:180]。モンゴル語檔案文書に現れる共同格語尾  $-la/-le(+la/+le)$  と先古典期モンゴル語の口語資料の文法的語尾との対応を示せば、表 48 の通りである。

<sup>44</sup> 舍・羅布蒼旺丹 勒・宝魯特(1991) 204 頁。

<sup>45</sup> 語尾  $-lā/-lē$  の  $ā$  と  $ē$  は長母音である。

表 48. 共同格語尾の先古典期モンゴル語の口語資料の文法的語尾との対応

古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書	ムカッディマト・アル・アダブ
ない	-la/-le(+la/+le)	-lā/-lē

その対応から、語尾-lā/-lē(+lā/+lē)は、モンゴル語檔案文書の書かれた当時もこのような口語があった可能性があり、その口語の露出した形と考えられる。

例 3 : 終止形の現在未来語尾

モンゴル語檔案文書には古典式モンゴル文語と異なって現在未来語尾=m と =nam/=nem(=n'am/=n'em)が数多く使われる。語尾=nam/=nem は古典式モンゴル文語には通常使われない語尾であり、語尾=m は、古典式モンゴル文語に現れない。先古典期モンゴル口語資料と言われるムカッディマト・アル・アダブには語尾=m と =nam/=nem が現れる。例えば: abunam「取る」[H.H Понпе 1939: 457]、üledünem「～をし合う」[H.H Понпе 1939: 376]、kürüm「着く」[H.H Понпе 1939: 160]等。その対応を示せば表 49 の通りである。

表 49. 終止形の現在未来語尾の先古典期モンゴル語の口語資料の文法的語尾との対応

古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書	ムカッディマト・アル・アダブ
なし	=m	=m
=nam/=nem(通常使われない)	=nam/=nem(=n'am/=n'em)	=nam/=nem

語尾=m と =nam/=nem は、先古典期モンゴル口語資料に現れる文法的語尾のほか、保安語、モンゴル語、モゴール語などモンゴル系の言語にも使われていることから口語の露出であると考えられる。

モンゴル語檔案文書に現れる、現代モンゴル口語に対応する文法的語尾の例：

例 1 : 属格語尾

古典式モンゴル文語の属格語尾には語尾-u/-ü、-un/-ün、-yin の 3 種類がある。子音字 n で終わる語幹に語尾-u/-ü が付き、n 以外の子音字で終わる語幹に語尾-un/-ün が付き、母音字で終わる語幹に語尾-yin が付く。この使い分けは、現代モンゴル文語の正書法の規範としても確立している。

モンゴル語檔案文書では、子音字<n>で終わる語幹に語尾-u/-ü(+ü)の他に古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語にない語尾-I(+I)と-nai/-nei(-n'ai/-n'ei)が付く。現代のハルハ方言では、子音[n]で終わる語に付く属格語尾の発音は[-i:]である。例えば、[nɔjn (主格) ~nɔjni: (属格)]「ノヤンが～ノヤンの」、[xɑ:n (主格) ~xɑ:ni: (属格)]「皇帝が～皇帝の」。清格爾泰(1991)によれば、属格語尾は[i:n]、あるいは[næ:]、[ne:]によって

発音される<sup>46</sup>。子音字<n>で終わる語幹に付く -nai/-nei (-n'ai/-n'ei) は現代モンゴル口語の [næ:]、[ne:] に対応すると考えられる。

<n> 以外の子音字で終わる語幹には、語尾 -un/-ün 以外に古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の使い方と違う語尾 -Yin が付く。現代モンゴル口語では属格語尾は [i:n] 或いは [næ:]、[ne:] によって発音される。語尾 -Yin は現代モンゴル口語の [i:n] に対応すると考えられる。モンゴル語檔案文書に現れる属格語尾のうち、古典式モンゴル文語と異なるものの現代モンゴル口語との対応を示せば、表 50 の通りである。

表 50. モンゴル語檔案文書の属格語尾の現代モンゴル口語との対応

	古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書	現代モンゴル口語
子音字<n>で終わる語幹	なし	-I(+I)	[-i:]
	なし	-nai/-nei(-n'ai/-n'ei)	[næ:]、[ne:]
<n> 以外の子音字で終わる語幹	なし	-Yin	[i:n]

表 50 に示した、モンゴル語檔案文書に現れた古典式モンゴル文語と異なる属格語尾は、現代モンゴル口語と対応することから、それは、当時の口語の露出であると考えられる。

## 例 2 : 対格語尾

モンゴル語檔案文書には古典式モンゴル文語にない対格語尾 -gi , +i\_gi が現れる。現代モンゴル口語の [gɪ:/gi:]、[ɪ:g/i:g] に対応する。例えば、「文書 A」に現れる例 may'u-gi (32:10) 「悪いことを」に対応する現代モンゴル口語の発音は、[mu: (語幹) ~ mu:gɪ: (対格)] 「悪いこと ~ 悪いことを」。また、「文書 A」に現れる例 yala+i\_gi (38:38) 「罪 ~ 罪を」に対応する現代モンゴル口語の発音は、[jal (語幹) ~ jalɪ:g (対格)] 「罪を」である。その対応を示せば、表 51 の通りである。

表 51. モンゴル語檔案文書の対格語尾の現代モンゴル口語との対応

古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書	現代モンゴル口語
なし	-gi	[gɪ:/gi:]
なし	+i_gi	[ɪ:g/i:g]

表 51 に示した、モンゴル語檔案文書に現れた古典式モンゴル文語と異なる語尾は、現代モンゴル口語と対応することから、それは、当時の口語の露出であると考えられる。

モンゴル語檔案文書には、語尾 -gi は、多くの場合、口語の露出であるが、古典式モンゴ

<sup>46</sup> 清格尔泰(1991) 150 頁。

ル文語の規範と一致する対格語尾-yi の読み方として用いられている例もある。例えば、「文書 A」現れる ya1a-gi (15:7) 「罪を」。それと逆に、口語的要素である+i\_gi を文語的な表記で表わすために現れたと考えられる古典式モンゴル文語にない語尾+i\_yi もある。例えば、「文書 A」現れる ya1a+i\_yi (12:7) 「罪を」。

### 例 3：終止形の過去語尾

モンゴル語檔案文書の過去語尾には古典式モンゴル文語にない語尾=či と=1a/=1e が現れる。

語尾=či は現代モンゴル文語の過去語尾=jji/=či に対応する。現代モンゴル文語の語尾=jji/=či はその後に助詞や別の動詞が後続する場合に用いられ、口語では[-dʒ]/[-tʃ]と発音される。モンゴル語檔案文書に現れる過去語尾=či は後ろに動詞 genem 「～と言う」が付く場合に現れている。

語尾=1a/=1e は現代モンゴル文語の過去語尾=1a/=1e に対応する。現代モンゴル文語では動作の始まる場合と終わる場合を表わす動詞語尾=1a/=1e があり、母音調和によって [-laɪ, -ləɪ, -loɪ, -loɪ] と発音される。その対応を表で示せば、表 52 の通りである。

表 52. モンゴル語檔案文書の過去語尾の現代モンゴル口語との対応

古典式モンゴル文語	モンゴル語檔案文書	現代モンゴル口語
なし	=či	[-tʃ]
	=1a/=1e	[-laɪ, -ləɪ, -loɪ, -loɪ]

表 52 に示した、過去語尾の対応から、17 世紀前半の口語では過去語尾 [-dʒ]/[-tʃ] や [-laɪ, -ləɪ, -loɪ, -loɪ] があつた可能性がある。そのため、文語では古典式モンゴル文語と違った語尾=či と=1a/=1e が書かれたと考えられる。そしてこの表記が、現代モンゴル文語に定着した可能性がある。

以上の例から、モンゴル語檔案文書に現れる、古典式モンゴル文語にない文法的語尾は、当時の口語的要素と見なすことができる語尾である。少数の先古典期モンゴル口語の資料に現れる文法的語尾に対応するほか、大多数が現代モンゴル口語に対応することから、現代モンゴル口語の特徴は当時も現れていたことが分かる。



(3) 清朝が成立以前の檔案文書と清朝が成立以降の行政機関で作成された記録と比較すると後者は字形や文法には、古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範と近く、規範化が進んでいる。


「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の三つの檔案文書における字形を比較すると「文書 C」が古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範に近いことが分かった。次に幾つかの例をあげる。

**例 1：母音字の前の子音字<n>の字形**

古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語の規範では、子音字<n>は母音字の前で点を持つ。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」では共通して、子音字<n>は母音字の前で点を持つ形も点を持たない形も現れるが、それぞれの文書によってその割合は違っている。

「文書 A」では子音字<n>の点を持つ形(  n)は母音字の前の子音字<n>の 12%を占め、点を持たない形(  n')は 88%を占める。

「文書 B」では子音字<n>の点を持つ形(  n)は母音字の前の子音字<n>の 5%を占め、点を持たない形(  n')は 95%を占める。




「文書 C」では母音字の前で点を持つ形(  n)は 40%、点を持たない形(  n')は 60%である。表 53 は「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の母音字の前における子音字<n>の字形の比較である。

表 53. 「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」における母音字の前の子音字<n>の字形の比較

	「文書 A」		「文書 B」		「文書 C」	
点を持つ形	55 回	12%	59 回	5%	973 回	40%
点を持たない形	389 回	88%	1070 回	95%	1434 回	60%

表 53 から、「文書 C」には、母音字の前の子音字<n>の点を持つ字形が多く現れ、古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範に近いことが分かる。

**例 2：子音字<š>の字形**

古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語では、子音字<š>の頭位形と中位形は二つの点を持つ形(  )である。

「文書 A」には点を持つ形が 1 回現れ、点を持たない形が 4 回現れる。

「文書 B」には点を持つ形がなく、点を持たない形が 6 回現れる。

「文書 C」には子音字<š>は、41 回現れ、すべて点を持つ形で現れる。「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」における子音字<š>の字形の比較を示せば、表 54 の通りである。

表 54. 「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の子音字<š>の字形の比較

	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
点を持つ形	1 回	なし	41 回
点を持たない形	4 回	6 回	なし

これによって、「文書 C」は、「文書 A」と「文書 B」と異なり、子音字<š>は全て点を持つ形で現れる。これは、古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範と一致する。

### 例 3：子音字<č>の字形

古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語では、子音字<č>は左側の字画が角ばっていて (𐠵)、子音字 <j> の中位形は、左側の字画に角が無い (𐠶)。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の三つの文献には、共通して二つの形 𐠵 č (左側の字画が角ばっている) と 𐠶 č' (左側の字画が角ばっていない) が現る。

「文書 A」では、𐠵 č は、6%を占め、𐠶 č' は、94%を占める。

「文書 B」では、𐠵 č は、3%を占め、𐠶 č' は、97%を占める。

「文書 C」では、「文書 A」、「文書 B」と違って、𐠵 č は半分以上の 54%を占め、𐠶 č' は 46%を占める。その比較は表 55 の通りである。

表 55. 「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」における子音字<č>の字形の比較

	「文書 A」		「文書 B」		「文書 C」	
𐠵č	33 回	6%	34 回	3%	486 回	54%
𐠶č'	555 回	94%	1135 回	97%	421 回	46%

表 55 から、「文書 C」に現れる子音字<č>の字形は古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範と近く、規範化が進んでいることが分かる。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の文法的語尾を比較すると、「文書 C」は、古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範に近いことが分かった。次に幾つかの例をあげる。

### 例 1：並列副動詞語尾

「文書 A」、「文書 B」には口語的要素である並列副動詞語尾 =ji, =či が数多く現れる。

「文書 C」には文語的語尾 =ju/=jü が 153 回現れるに対し、口語的要素の =ji が 2 回しか現れない。その比較を示せば、次の通りである。

表 56. 「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の並列副動詞の出現回数の比較

語尾	「文書 A」	「文書 B」	「文書 C」
=ju/=jü	231 回	447 回	153 回
=ji	30 回	235 回	2 回

表 56 から「文書 C」には、古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範と近く、規範化が進んでいることが分かる。

例 2 : 与位格語尾

「文書 A」、「文書 B」には与位格語尾  $\text{᠋}$  (-tu/-tü, -d'u/-d'ü) の形が数多く使われるが、「文書 C」には  $\text{᠋}$  (-du/-dü, -t'u/-t'ü) の形が多く現れる。「文書 C」の  $\text{᠋}$  の計 102 回現れるうちの 92 回が母音字と子音字 n、m、l、ng で終わる語幹に付く。その比較を示せば、表 57 の通りである。表で網かけをしたのは、 $\text{᠋}$  と  $\text{᠋}$  の出現総数である。

表 57. 「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の与位格語尾の出現回数の比較

	語幹末字	語尾の転写	「文書 A」		「文書 B」		「文書 C」	
			出現回数	母音字と子音字	出現回数	母音字と子音字	出現回数	母音字と子音字
$\text{᠋}$	子音字 <b><d> <g><γ><r><s>	-tu/-tü	35 回		69 回		10 回	
	母音字と子音字 <n><m> <l> <ng>	-d'u/-d'ü	112 回	147 回	236 回	305 回	56 回	66 回
$\text{᠋}$	母音字と子音字 <n><m> <l> <ng>	-du/-dü	28 回		27 回		92 回	
	子音字 <b><d> <g><γ><r><s>	-t'u/-t'ü	5 回	33 回	14 回	41 回	10 回	102 回

表 57 からわかるのは、「文書 C」には語尾  $\text{᠋}$  が母音字と子音字 n、m、l、ng で終わる語幹に多く付く。それは、現代モンゴル文語の規範と一致する。これにより、「文書 C」は、「文書 A」、「文書 B」と違って、規範が進んでいることがわかる。

例 3 : 第 3 人称所属語尾

第 3 人称所属語尾において、「文書 A」、「文書 B」には口語的要素である ni/n'i が多く使われ、「文書 C」には an'u と in'ü が現れ、口語的要素の ni/n'i が現れない。「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の比較を示せば、表 58 の通りである。

表 58. 「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の第 3 人称所属語尾の比較

「文書 A」		「文書 B」		「文書 C」	
in'ü	1 回	in'ü	23 回	in'ü/inü	128 回
なし		an'u	1 回	an'u	4 回
ni/n'i	22 回	ni/n'i	37 回	なし	

古典式モンゴル文語の第 3 人称所属語尾<sup>47</sup>の単数は inü であり、複数は anu である。「文書 C」には、in'ü/inü と an'u が現れるが、単数と複数の区別がない。その形としては古




<sup>47</sup> 古典式モンゴル文語では、人称所属語尾と人称代名詞の区別がないが、ここでは人称所属語尾とする。






典式モンゴル文語の規範と一致する。表 58 に示したように、「文書 C」は「文書 A」と「文書 B」と違って、古典式モンゴル文語の規範に近い。

以上の例で示したように、「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の字形と文法的語尾の比較から「文書 A」と「文書 B」より、「文書 C」が古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範に近いことが分かる。




このほかに、モンゴル語檔案文書には先古典式モンゴル文語に見られる字形が現れる。

例 1：母音字<o> <u>の頭位形において、「文書 B」に 1) ačuy (アチョグ) に gedesü (ゲデス) が連なった字形  と 2) ačuy (アチョグ)、gedesü (ゲデス)、silbi (シルビ) が連なった字形  の二つの字形が現れる。字形 2)  は先古典式モンゴル文語に現れる字形である。次は母音字<u>の例である。前者は、先古典式、古典式、現代モンゴル文語と一致するが、後者は先古典式モンゴル文語に稀に現れる字形である。

 uč'ir(2:17) 「原因」       u'čir(42:3) 「原因」




例 2：母音字<ö> <ü>の頭位形にはにおいて、「文書 A」と「文書 B」では、二つの字形：1) ačuy (アチョグ) と gedesü (ゲデス) と silbi (シルビ) が連なった字形  と 2) ačuy (アチョグ) と gedesü (ゲデス) だけの字形  が現れる。字形 2)  は先古典式モンゴル文語に稀に現れる字形である。次の例は、「文書 A」に現れる母音字<ö>の字形である。前者は先古典式、古典式、現代モンゴル文語と一致する字形であるが、後者は先古典式モンゴル文語に稀に現れる字形である。


 ösiy\_e(40:6) 「仇」       ö'rüsüje=ju (3:2) 「愛しんで」


母音字<ö> <ü>の中位形には第 1 音節に 1) gedesü (ゲデス) と silbi (シルビ) が連なった字形  と 2) gedesü (ゲデス) だけからなる字形がある。古典式モンゴル文語の規範では、1)  は第 1 音節に、2)  は第 2 音節以降に現れる字形であるが、「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」では、第 1 音節に 1) の字形も 2) の字形も現れ、第 2 音節以降には 2) の字形だけが現れる。次は、「文書 A」における、母音字<ö> <ü>の中位形が第 1 音節に現れる例である。前者は先古典式、古典式、現代モンゴル文語と一致する字形であるが、後者先古典式モンゴル文語に稀に現れる字形である。

 n'ökür(33:9) 「友達」       dö'rben (15:30) 「四」


また、モンゴル語檔案文書には満洲文字の影響を受けたと考えられる字形が現れる。


例 1 : 母音字<o> <u>と母音字<ö> <ü>は、子音字<b><k><g>と結合して合体字になる。「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」の合体字の kö/kü/gö/gü の頭位には、母音字<ö> <ü>と同じく、silbi(シルビ)のある形  と silbi(シルビ)のない形  が現れる。 は古典式モンゴル文語と現代モンゴル文語にない字形である。次は、「文書 A」に現れる例である。前者は先古典式、古典式、現代モンゴル文語と一致する字形であるが、後者はそれらに現れない字形であり、満洲文字の影響を受けた可能性がある。

 kümün(33:4) 「人」

 kü'cü+ben(12:5) 「力を」

例 2 : 「文書 C」には、「文書 A」、「文書 B」より二つの子音字が多く現れる。それは、<p>と<f>であり、満洲文字で表記されている。これにより、「アリガリ(al i ya li)」文字にも<p>、<f>を表記する字形があるが、ここでは使われてないのは、その影響を受けていないことがわかる。

 efü(1:5) 「額駙」

 fū(17:4) 「府」

## 参考文献

### [日本語]

井上治、永井匠、柳澤明

- 1999 (書評) 「arban doluduyar jayun-u emün-e qayas-tu qolbuydaqu mongyol üsüg-ün biçig debter(十七世紀蒙古文文書档案[1600—1650])」 満族史研究通信 8。

小沢重男

- 1997 『蒙古語文語文法講義』 大学書林。

神田信夫, 松村潤, 岡田英弘譯註

- 1972-1975 『舊滿洲檔 天聰九年』 東洋文庫。

海蘭

- 2017 「『滿文原檔』所収モンゴル語文書の文法的特徴について」 東北大学東北アジア研究センター 『東北アジア研究』 第 21 号 2017 年 3 月 頁(査読を経て掲載決定済み)

栗林 均

- 1989 ダグル語『言語学大辞典 第 2 卷 世界言語編 (中)』三省堂 597-603 頁。  
東郷(ドゥンジャン)語『言語学大辞典 第 2 卷 世界言語編 (中)』三省堂 1281-1288 頁。
- 1992 モンゴル諸語『言語学大辞典 第 4 卷 世界言語編(下-2)』三省堂。  
保安(バオアン)語『言語学大辞典 第 3 卷 世界言語編(下-1)』三省堂 88-92 頁。  
モンゴオル語『言語学大辞典 第 4 卷 世界言語編 (下-2)』三省堂 492-498 頁。
- 1999 「『孝経』のモンゴル文語における曲用語尾の特徴」 알타이학보 한국알타이학회 제 9 호 1999 년 6 월。
- 2009 『『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』 東北大学東北アジア研究センター叢書 第 33 号。

栗林均・海蘭

- 2015 「『滿文原檔』所収モンゴル語文書の研究」 東北アジア研究センター報告 第 17 号。

杉山正明

1999 『元代蒙漢合璧命令文の研究(二)』 神戸市外国語大学外国学研究所 35 頁—56 頁。

服部 四郎

1940 「オロンスム出土の蒙古語文書について」『東方学報』(東京) 第 11 冊の 2、257 頁-280 頁

昭和六十二 『アルタイ諸言語の研究Ⅱ』三省堂。

藤岡勝二

昭和 14 (1939) 『満文老檔』岩波書店。

満文老檔研究会訳注

昭和 30—38 (1955—1963) 『満文老檔』 全 7 冊。 I 太祖 1、II 太祖 2、III 太祖 3、IV 太宗 1、V 太宗 2、VI 太宗 3、VII 太宗 4

吉田順一、チメドドルジ

2008 『ハラホト出土モンゴル文書の研究』雄山閣。

陸軍省編

1933 『蒙古語大辞典』。

[モンゴル語]

鮑 包力格

1983 『mongγul üsüg bičig-ün tobči teüke(モンゴル文字の簡易史)』内蒙古人民出版社。

道布

1983 『oyiyurjin mongγul üsüg-ün durasqaltu bičig-üd (ウイグル式モンゴル文字文献)』 民族出版社。

李保文

1997 『arban doluduyar jāγun-u emün\_e qayas-tu qolbuγda=qu mongγul üsüg-ün bičig debter 十七世紀蒙古文文書檔案(1600—1650)』内蒙古少年儿童出版社

李保文・南快

- 1996 「17-duyar jāyun-u ekin-dü qolbuydaqu 43 qubi mongγul bičig(17世紀初頭の43件のモンゴル語檔案文書)」 『内蒙古社会科学(蒙文版)』第一期 86-118頁、第二期 93-122頁。

蒙古学百科全書編集委員会

- 2004 『mongγul sodulul-un nebterkei toli (üge kele üsüg bičig)「蒙古学百科全書(語言文字卷)」』 内蒙古人民出版社

斯琴高娃

- 2007 「17-duyar jāyun-u emün\_e qayas-tu qolbuyda=qu manju mongγul qarilčayan-u bičig-ün kelen-ü sudulul(17世紀前半の満洲モンゴル交渉に関わる檔案文書の言語の研究)」 博士論文

[中国語]

宝音德力根 乌云毕力格 齐木德道尔吉

- 2000 《明清档案与蒙古史研究》 内蒙古人民出版社。

达力扎布

- 2003 《明清蒙古史论稿》 民族出版社。

中国第一歴史檔案館

- 1989年 『清初内国史院満文檔案訳編』、光明日報出版社。

馮明珠主編

- 2005 『満文原檔』全10冊、國立故宮博物院。

符拉基米尔佐夫著 陈伟 陈鹏译 沈成明校

- 1988 《蒙古书面语与哈尔哈方言比较语法》 青海人民出版社。

國立故宮博物院

- 1969 『舊満洲檔』全10冊、國立故宮博物院。

- 1977 『舊満洲檔譯註 清太宗朝(一)』國立故宮博物院、民国69年。  
『舊満洲檔譯註 清太宗朝(二)』國立故宮博物院、民国69年。

廣祿·李學智

- 1970 『清太祖朝老滿文原檔（第一冊荒字老滿文檔冊）』 中央研究院歷史語言研究所 民國 59 年。  
1971 『清太祖朝老滿文原檔（第二冊昃字老滿文檔冊）』 中央研究院歷史語言研究所 民國 60 年。

李保文

- 2000 《愛新國天命天聰兩朝蒙古文書檔案簡介》《明清檔案與蒙古史研究》內蒙古人民出版社 217-276 頁。  
2001 《天命天聰年間蒙古文書檔案譯稿（上）》《歷史檔案》中國第一歷史檔案館 第 3 期、3-8 頁。  
2001 《天命天聰年間蒙古文書檔案譯稿（中）》《歷史檔案》中國第一歷史檔案館 第 4 期、3-9 頁。  
2002 《天命天聰年間蒙古文書檔案譯稿（下）》《歷史檔案》中國第一歷史檔案館 第 1 期、3-4 頁。

M.H 奧爾洛夫斯卡婭 著 郭守祥 譯

- 2004 《黃金史》語言 內蒙古教育出版社。  
(M.H. Орловская 1984 *Язык «Алтан тобчи»* . Издательство Академии Наук СССР. Москва.)

內蒙古大學蒙古學研究院，蒙古文研究所

- 1999 《蒙漢詞典》內蒙古大學出版社。

清格爾泰

- 1991 《蒙古語語法》內蒙古人民出版社。

台灣華文書局

- 1964 『大清太宗文皇帝實錄(一) (二)』 華聯出版社。  
1964 『大清世祖章(順治) 皇帝實錄(一) (二) (三)』 華聯出版社。

烏雲比力格

- 1999 《評〈從十七世紀初蒙古文書檔案(1600-1650)〉》，載《內蒙古大學學報》第 6 期

《从十七世纪初蒙古文和满文“遗留性”史料看内蒙古历史的若干问题一（一）召城之战》，载《内蒙古大学学报》（哲学社会科学蒙古文版）第3期。

《从十七世纪初蒙古文和满文“遗留性”史料看内蒙古历史的若干问题一（二）敖木林之战与后金喀喇沁联盟》载《内蒙古大学学报》（哲学社会科学蒙古文版）第4期。

2000 《从十七世纪初蒙古文和满文“遗留性”史料看内蒙古历史的若干问题一（三）喀喇沁部的台吉与塔不囊》，载《内蒙古大学学报》（哲学社会科学蒙古文版）第2期。

2001 《从十七世纪初蒙古文和满文“遗留性”史料看内蒙古历史的若干问题一（四）东土默特诸那颜、塔不囊与爱新国》，载《内蒙古大学学报》（哲学社会科学蒙古文版）第2期。

《17世纪20-30年代喀喇沁部的台吉和塔不囊》，《蒙古史研究》第六辑，中国蒙古史学会编，内蒙古大学出版社。

2002 《史料的二分法及其意义—以所谓的“赵城之战”的相关史料为例》，载《清史研究》第1期。

希都日古著

2006 《十七世纪蒙古编年史与蒙古文文书档案研究》辽宁民族出版社 208—278页。

中国第一历史档案馆·中国社会科学院历史研究所识注

1990 『满文老档』 中华书局出版。

中国第一历史档案馆整理编译

1989 『清初内国史院满文档案识编』（上）（中）（下）、光明日报出版社。

2009 『内阁藏本满文老档』 辽宁民族出版社 全20册。

[英語]

Poppe, Nicholas

1954 *Grammar of Written Mongolian*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

[ロシア語]

Н.Н Поппе

1939 *Монгольский словарь, Мукаддимат ал-адаб*. Издательство Академии  
Наук СССР Москва-Ленинград.

[ドイツ語]

Poppe, Nicholas

1951 *Khalkha-mongolische Grammatik*. Franz Steiner, Wiesbaden.